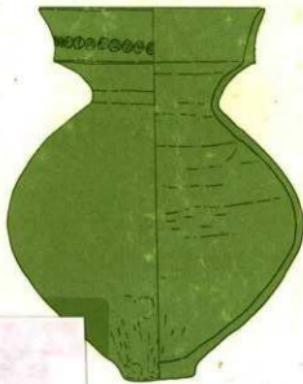


塩津丘陵遺跡群

(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 亀ノ尾古墳)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IX

(第2分冊・本文編2)



998年3月

工国道工事事務所
教育委員会

塩津丘陵遺跡群

(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 亀ノ尾古墳)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IX

(第2分冊・本文編2)

1998年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

第2分冊本文目次

5. 柳遺跡の調査	(丹羽野)	239
第1章 調査の経緯と概要	241
1節 調査前の状況と経過	241
2節 地区割と調査の概要	245
第2章 調査の結果	247
1節 頂上部から西斜面の調査	247
① 配置の概要	247
② 頂上高所平坦面西半から西斜面の遺構・遺物	249
③ 頂上高所平坦面東半の遺構・遺物	276
④ 頂上北低部の遺構・遺物	288
2節 東斜面の調査	304
① 配置の概要	304
② 遺構・遺物	324
6. 亀の尾古墳	(池瀬)	475
7. 自然科学的分析	479
柳遺跡出土の玉材剝片の産地分析	481
柳遺跡出土楕形鍛冶溝の金属学的調査	491
塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡出土炭・炭化物の14C年代の測定	495
財團法人 九州環境管理協会	
8. まとめ	497
第1章 塩津丘陵遺跡群出土の弥生時代後期後半の土器編年	(梅木・丹羽野)	499
1.はじめ	499
2. 塩津1期～塩津5期の設定	499
3. 併行関係	505
第2章 塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡検出の弥生時代後期の遺構について (丹羽野)	507
1. 竪穴住居	507
2. 加工段	507
3. 掘立柱建物跡・布堀建物跡	513
4. 上器集中地点	519
第3章 塩津丘陵遺跡群の性格について	(丹羽野)	520
1. 塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡の時期的変遷	520
2. 塩津丘陵遺跡群の性格	521

5. 柳遺跡の調査

第1章 調査の経過と概要

1節 調査前の状況と経過

調査前の状況

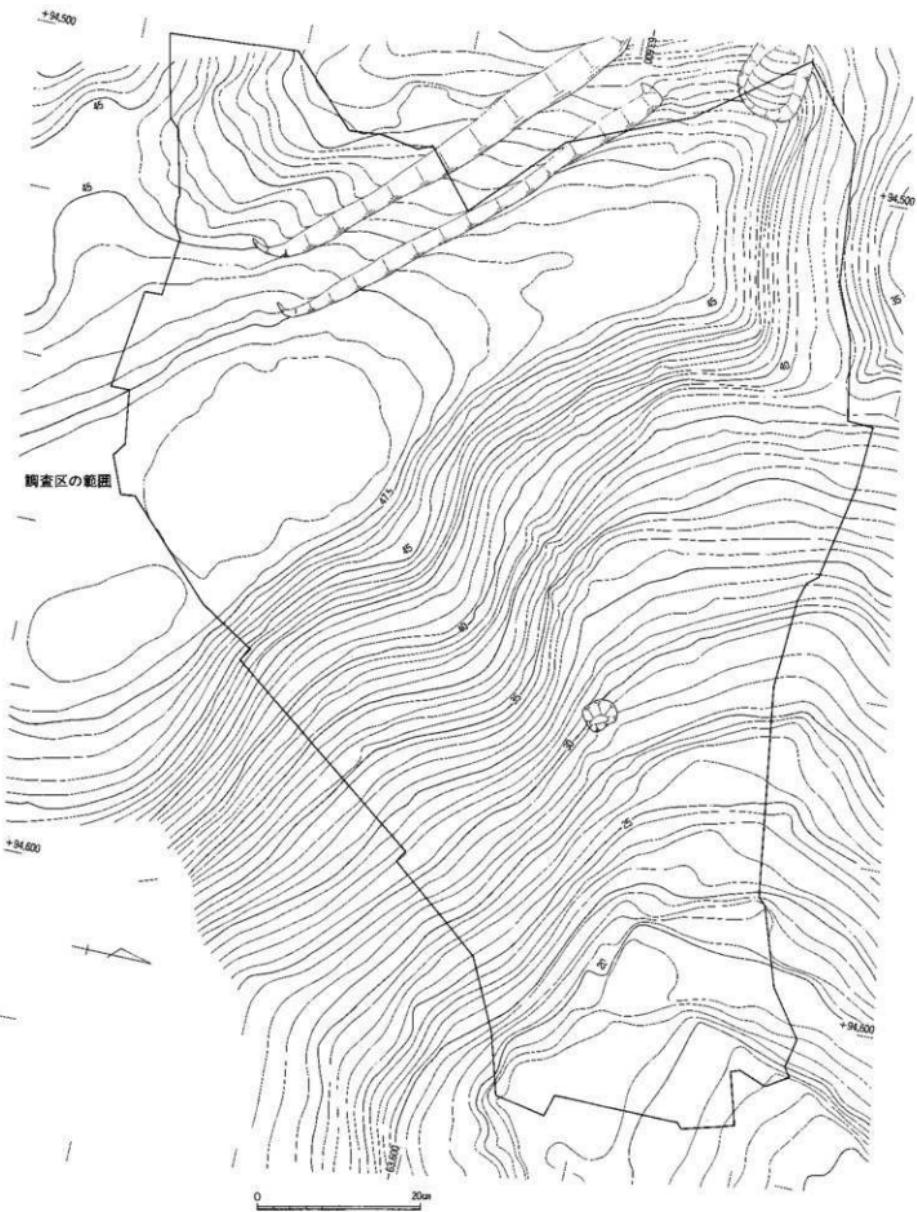
柳遺跡は、不正馬蹄形に大きな谷を囲んだ丘陵に連なる遺跡群（塩津山墳墓群・塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡）の中で西端に位置し、東西に延びる尾根から北に派生する丘陵部に当たる。若干の造構空白地を挟んで柳II遺跡が西隣する（第2、第3章、第4図）。

この丘陵の頂上は、塩津丘陵遺跡群の中で最高所にあたり、標高約48mである。頂上付近は南北方向に、長さ約120m、幅約30mにわたって平坦面が広がっており、さらに西側に向かっては鞍部を経てさらに平坦面は広がっている（柳II遺跡の東上方尾根部分）。この平坦面は、近年まで果樹園に利用されていたといい、地形の変更も受けている可能性も思量された。調査区は、この平坦面の北側の大半にかかっており、その北側は一度急に下って若干の平坦面を形成した後、北側の尾根へ標高を下げながら続いている。頂上平坦面の西側には、果樹園造成の際に形成されたと考えられる平坦面が2段観察された。

頂上東側の斜面はかなり急な地形である。特に調査区南半は急峻で、北半は緩やかな谷状地形を呈すこともある、比較的緩やかな部分もある。この北半部分は、場所によっては表面観察においても段状の地形を見ることが出来、斜面を加工した造構の存在を予想させた。



調査前の柳遺跡・竹ヶ崎遺跡 手前の緩やかな部分が竹ヶ崎遺跡、奥の斜面が柳遺跡



第193図 柳遺跡 発振調査前の地形測量図 S = 1/600

谷底は、谷頭部分に湧水地があることもある、湿润な状態であった。この湧水は知る人ぞ知る名水らしく、調査中も県外から汲みに来る人もいるほどで、この地が丘陵地の割には水の便の良い地であることをうかがわせる。

調査の経過

柳遺跡は、昭和63年度の分布調査において発見された遺跡であるが、当時は頂上平坦面に古墳が存在する可能性が強いとして「柳古墳群」と命名された遺跡である。平成6年度にトレンチによる確認調査が実施され、東側斜面に弥生時代後期の加工段が存在することが明らかになった。頂上平坦面は、果樹の抜き穴や肥料穴に搅乱され、狭いトレンチでは遺構や遺物の検出は困難であった。しかし東側斜面の状況や、尾根続きには大形墳墓が存在することなどを考慮して、頂上部にも搅乱の間に遺構が残存している可能性が高いと判断し、東斜面全体と、頂上部全域を本調査区とした。

平成7年度の本調査は、4月上旬より重機による表土掘削から始まった。4月25日から人力による掘削を開始、頂上部と東側斜面部に分かれて調査を行うこととした。東側斜面は、頂上部直下から始まり、次第に下方へ調査範囲を広げていった。急な斜面であるため、作業の安全確保と廃土の処理が難しく、重機を常駐させて廃土で平場を設けながらの発掘作業であった。

頂上部では搅乱坑に悩まされながらも発掘開始直後から柱穴を多く検出、掘立柱建物の存在が明らかになっていった。また追って竪穴住居跡も検出、さらに西側斜面にも遺構が広がることが明らかになり、調査区を拡大した。東側斜面でも竪穴住居跡や加工段が次々に検出された。特にまだ比較的傾斜の緩やかな北半部では、遺構が重複して検出され、土砂の堆積が多いことによって調査は難渋した。東側斜面の下方では、最終局面で上器が集中する階段状遺構が検出され、寒い中の実測作業は困難を極めたが、最終的に翌1月12日に現場作業を終了した。



斜面部の調査風景



第194図 柳遺跡 発掘調査後の地形測量図・遺構配置図 S=1/600

2 節 地区割りと調査の概要

柳遺跡の調査区は、頂上の平坦部を挟んで東西の両側斜面を含み、調査面積はおよそ8500m²である。前節で述べたように、頂上は広い平坦面を持ち、その一方で東側は急峻な斜面となっている。こうした地形条件の違いを反映してか、頂上部から西斜面と、東側斜面では遺構のあり方にも違いが見られる。よって、以下、調査区を平坦な頂上部から比較的緩やかな西側斜面にかけてと東側斜面とに2分して記述したい。

調査の概要

柳遺跡では、調査区全域から高い密度で遺構が検出され、土器を始めとする遺物も多く出土した。それらの多くが弥生時代後期～終末期^[3]のもので、検出された当該期の竪穴住居跡は9棟、掘立柱建物、もしくはその可能性が高い柱列が30以上、斜面の上方を削って作り出した加工段が50以上と、隣接する竹ヶ崎遺跡、柳II遺跡などとともに大集落を形成していたようだ。ただ竹ヶ崎遺跡と違い、竪穴住居跡よりも加工段が中心の構成となっている。

頂上部は、そのほぼ全域が果樹園として利用されていたため、果樹抜き取り穴と肥料穴とが縦横に分布して、遺構をかなり破壊している。また程度は軽いものの、造成も行われたらしく、遺構の深さは概して浅かった。しかしながら、そうした搅乱を繞うように、多くの弥生時代後期～終末期の遺構が検出された。

最も多く検出された遺構は柱穴群であり、それらの配列から24の掘立柱建物跡と、建物の一辺と



竹ヶ崎遺跡から見た柳遺跡 正面の急斜面が東斜面にあたる。

考えられる11の柱列を想定することが出来た。これらの掘立柱建物跡が最も顕著なのが、頂上部でも一段高い調査区南半部である。やや規模の大きい布壇建物跡を中心に、掘立柱建物跡が縁辺部に分布し、方向や配置の規則性も読み取れそうである。掘立柱建物跡は、比較的緩やかな西側斜面や一段下がった平坦面北半にも広がっている。

一方竪穴住居跡は概して少ない。しかもレベルの高い平坦面南半には全く検出されず、一段低い平坦面北半と西側の軸部に竪穴住居跡4棟、平坦面からわずかに下った西斜面に2ないし3の加工段が検出されただけである。

東側斜面は一転して急な傾斜の斜面である。特に調査区南半が急峻で、北半は谷状に若干くぼんでいることもあって、それでも比較的緩やかである。斜面のほぼ全域で造構は検出されたが、密度が高いのはやはり傾斜の緩やかな北半部である。特に頂上部から5~10m下がった付近は、竪穴住居跡を中心として造構が重複している。弥生時代後期~終末期の竪穴住居跡はこの辺りにしか検出されていないのも特徴である。斜面の上方を削って平坦面を作り出した加工段も全域から数多く検出されている。特に傾斜が急な南半部からは竪穴住居跡は検出されず、幅の狭い加工段が見られるのみである。

一方北半部の斜面中段付近からは、古墳時代中期の遺物も散見されるようになる。比較的占式の須恵器と退化した複合口縁の土師器甕や土師器高杯などで、五世紀後半を中心とする時期の集落が、弥生時代後期に形作られた段状の地形を再利用して形作られたものと考えられる。竪穴住居跡2棟を始めとして、当時の造構と限定できる造構も検出されているが、重複関係が複雑で弥生時代の造構と明確に区別しがたい部分もある。ただこの時期には、さほど大規模な集落の展開はしていないようだ。

斜面の下方、谷底に近い部分では蛇行しながら上方へ続く階段状の造構が検出されている。この造構には大量の弥生時代終末期の土器が最終的に廃棄されたような状況で出土している。谷底には黒色の粘土が堆積しており、池等の静水が溜まる状況にあったものと考えられた。中世を下限とした遺物が出土している。

次章からは、頂上部から西斜面、東斜面の順に、検出された造構、遺物について詳述していく。

注

- (1) 本書では、巨大前方後円墳の出現をもって古墳時代と呼称する立場を取る。ただ、箸墓を始めとする畿内の人形前方後円墳の出現時期が、当地方の土器編年のどの位置に当たるかは明確にしがたいが、南講武草山造構編年でいうところの6期として大過ないものと考えている。よって草田編年4期、5期併行の時期を弥生時代終末期として扱いたい。ちなみに本書で使用する塩津編年では、3期~5期が終末期におおよそ該当する(8.まとめ参照)

第2章 調査の結果

1節 頂上部から西斜面の調査

①配置の概要

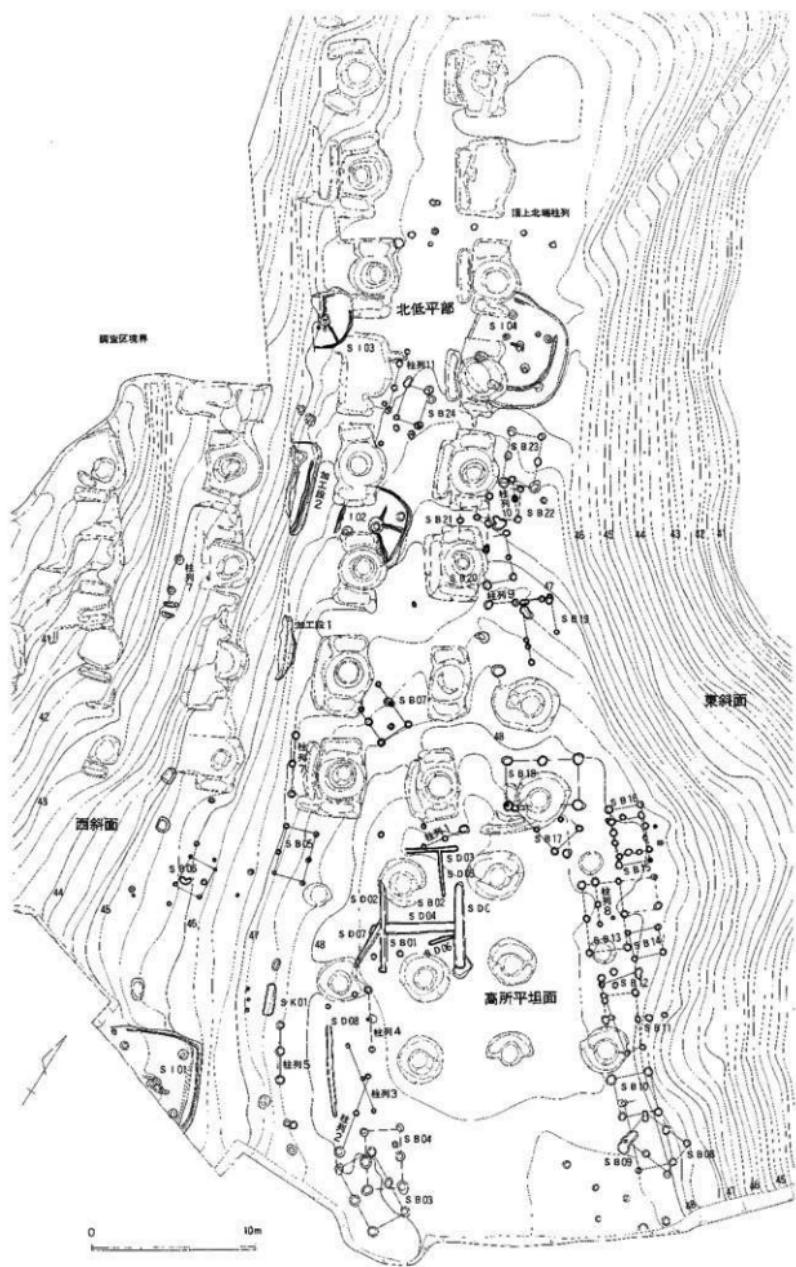
柳遺跡は、標高約48.5mの丘陵に位置し、頂上部は広い平坦面を呈しており、平坦面の幅は調査区内の広い部分で20mを測る。頂上調査区は、長さおよそ100mにおよぶこの平坦面の3分の2程度を占めるが、南側の未調査区ではさらに平坦面の幅は広くなっている。平坦面は近年果樹園として利用されており、大形の果樹抜跡がかなり遺構を破壊しているが、遺構の大要はつかみうる。

微地形を見ると、南側に一段高い平坦面（高所平坦面と呼ぶ。）があり、この部分が幅も広い。この頂上南半部では平坦面の縁辺（斜面との境付近）にとりまくように掘立柱建物跡（SB03、04、SB08～SB18、柱列1～5、8）を構成する柱穴群が検出されている。建物の方向は、尾根の方向と一致する一群と、それとされる一群に分かれそうであり、時期的な変遷を追えるかも知れない。頂上部の中央には幅10m強の掘立柱建物の空白地が見られ、その部分に布掘建物を構成していたと考えられる溝が7本検出されている（SD01～SD07）。これらの溝が全て布掘物の一部とすると、少なくとも同位置で5回方向を変えて建物が建て替えられたことになる。布掘建物を中心とする掘立柱建物がとりまくように存在した様子がうかがえ、それは時期を変えて建物が建て替えられても大きな変化がなかったようである。柱穴群のあり方から、南側に続く未調査区にも掘立柱建物を始めとする遺構が続いていることは疑いなく、幅が広がり標高もわずかながら高くなるこの未調査区に、これらの建物群の中心的な施設が存在する可能性をも想起させる。

北側の一・段低い部分（北低平部と呼ぶ。）は、長さ45m、幅15m前後の範囲で平坦面が広がっている。遺構は平坦面の北端から15m程南側で検出された柱穴列（頂上北端柱列）を境に、その南側に限って検出されている。検出遺構は竪穴住居跡3棟（SI02～SI04）と掘立柱建物（SB07、SB19～SB24、柱列9～10）を構成する柱穴群、やや西に下った斜面の加工段2ヶ所である。竪穴住居跡と掘立柱建物跡は重複することはないが、高所平坦面のような規則正しい配列は明確でない。頂上北端柱列を境にして北側には同様の平坦地形が続くにもかかわらず、全く遺構が検出されなかつたことは、この柱列が何らかの境界を表象する施設（例えば柵列など）であった可能性を思わせる。

頂上部の西側斜面は、東側斜面に比べて傾斜が緩やかで、西側の丘陵につながる鞍部に近い南側から遺構、遺物が検出された。遺構は頂上平坦面からさほど下らない位置から検出され、調査区南側境界で半分検出された竪穴住居跡（SI01）は、ほぼ鞍部の位置に当たっている。その北側の緩やかな斜面からは掘立柱建物（SB05、06、柱列5～7）を構成していたと考えられる柱穴や、性格不明の土壙などが検出された。また谷底には黒色土が堆積し、そこから多くの弥生土器を始めとする遺物が検出されている。南側の鞍部から流れてきたものもあると考えられ、SI01の西側に遺構が続いていることを推測させる。

それでは次節から「高所平坦面西半～西斜面」、「高所平坦面東半」、「北低平部」の順に、遺構、遺物について記述していきたい。

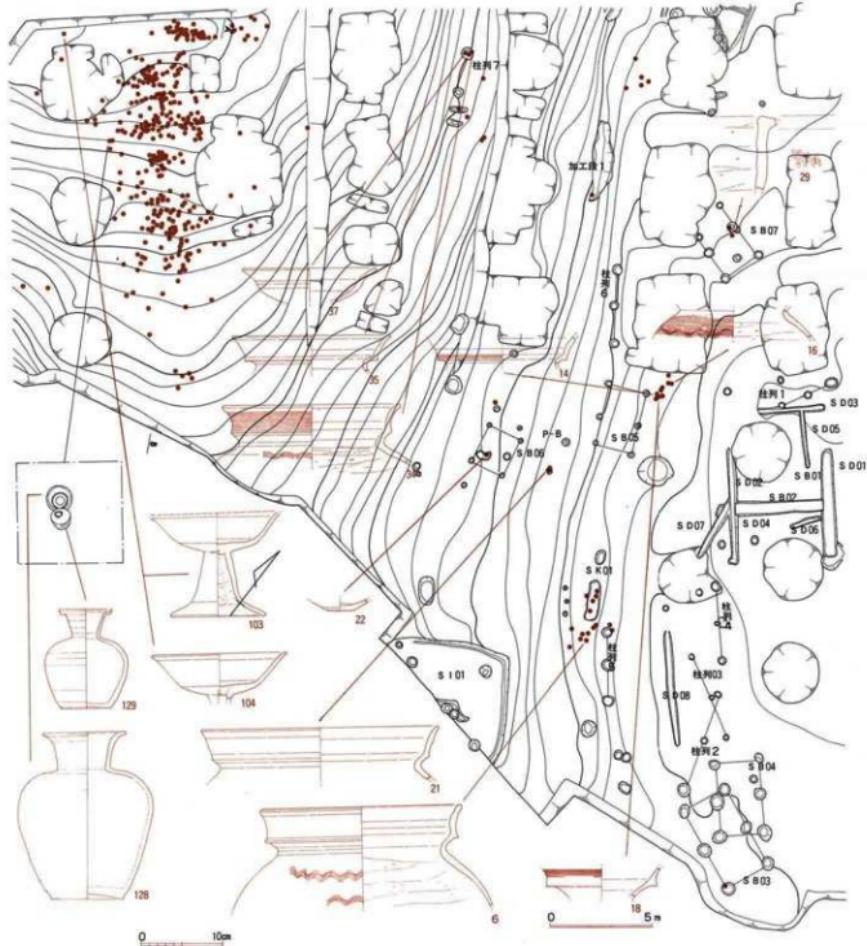


第195図 石器跡頂上～西斜面 造構配査図 S = 1/300 等高線は25cm間隔

②頂上高所平坦面西半～西斜面の遺構・遺物

頂上部南側に広がる高所平坦面の西側半分から、その西側に続く斜面の部分である。頂上平坦面の縁辺および、やや下った緩やかな斜面に遺構は集中している。

ただ頂上部に果樹抜き跡や肥料穴が多く見られるが、西側斜面にも果樹園は広がっていたらしく、一部は段状に造成されて同様の抜き穴が検出されている。この西側斜面の造成で遺構が失われた可能性は大きく、実際造成された平坦面から柱穴らしきピットや多くの遺物が出土した部分もある(柱例7付近)。



S I 01 (第195図、197図)

頂上最高所辺りから約2.5m西に下った位置で検出された竪穴住居跡である。用地境で2分の1は未調査区にかかるおり、地形条件はわかりにくいが、西に続く丘陵との間をつなぐ鞍部に位置している。

遺構の半分弱は用地外の未調査区にかかり、斜面下方側は流出によって失われているため全容を知ることは出来ないが、上方の辺を検出できたためおよその形態や規模は復元可能である。S I 01は、壁体溝の内側で一辺5.4mの隅丸方形竪穴住居跡である。隅丸方形と言っても隅の丸みはわずかで、方形と言っても差し支えないような形態である。壁および柱穴の軸方向はほぼ地形に沿っており、N34°Wを測る。この方向は頂上部で検出された地形に沿った方向の建物群（S B01、04など、後述）と近い方向である。

遺構内の覆土の堆積状況を見ると、竪穴の掘り方付近の高さから斜面地形に沿って黒色土が堆積しているのがわかる。遺構検出の際に最初に検出された上層で、遺物も多く含んでいる。住居廃絶後、一定期間経過した後の旧表土と考えるのが自然だが、特に注目されるのはこの黒色土の下面から大形の土器類が出土したことだ、これは後の遺物出土状況の須で述べる。一方壁体溝部分には、垂直に立ち上がる上層の線が確認され、この溝に板などが差し込まれて立ち上がっていたことを思わせる。床面上には褐色の粘質土が一部に見られ、厚い部分では15cmの厚さを測る。この土層を切って後に述べる中央ピット外周の落ち込みが掘られていることから、いわゆる貼り床のための土であったと考えられる。

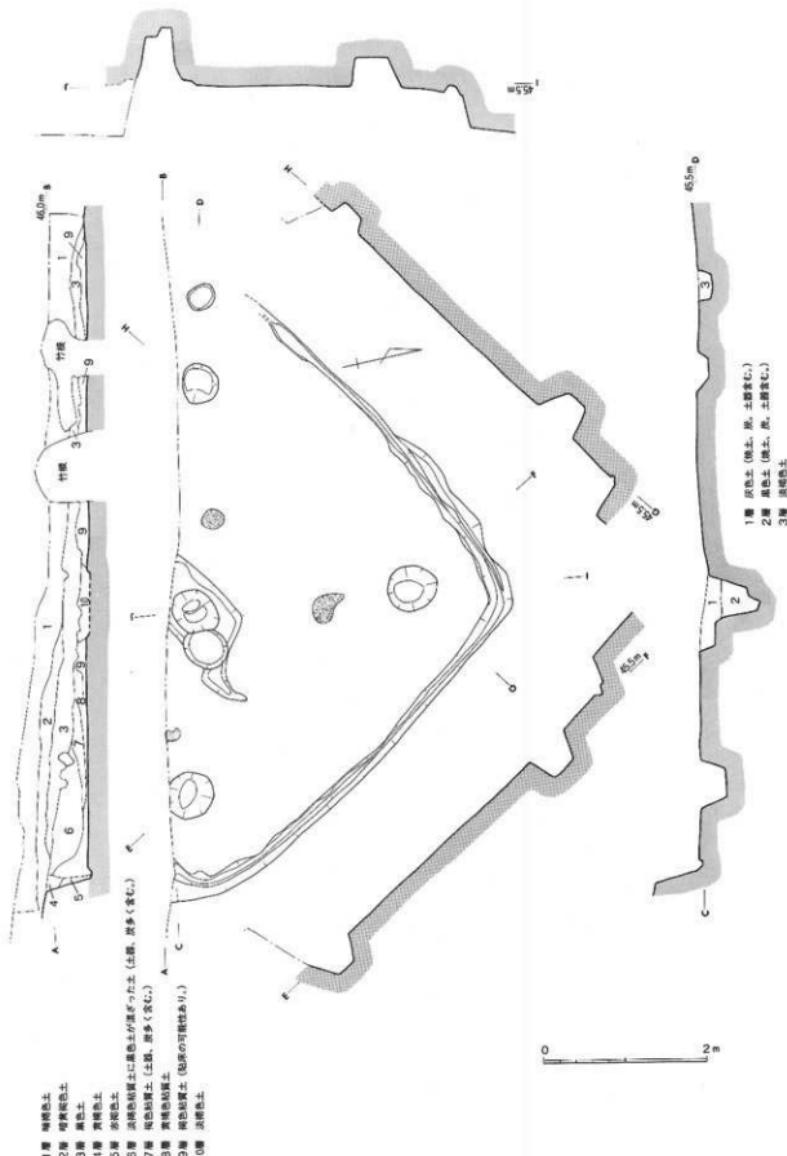
主柱穴と考えられるピットは、平面形のはば対角線上に3穴確認されている。柱間は柱穴の中央部で測って3.8mである。柱穴の直径は50~60cm、掘り方は壁体溝から60~80cmの位置に当たり、かなり壁寄りの柱の配置に見える。柱穴の深さは15~40cmと、弥生期の竪穴住居跡の一般例に比べてかなり浅い。

いわゆる中央ピットは、床面の中心から若干東コーナー寄りに片寄った位置で検出された。上端での直径50cm前後の円形ピットが2つ並んで検出されたが西側が深さ70cm、東側が深さ20cmと極端に深さが違う。上層では両者に切りあいを認めることは出来なかったが、西側の深いピットが本来的な中央ピットに当たるものであろう。このピットの底はさらに2段掘り状になり、内部には上層に灰色土、下層に黒色土が堆積していた。いずれの土層にもかなりの炭や焼土が含まれていた。西側の中央ピットを取り囲むように、深さ5センチ程の浅い長方形の落ち込みが検出されている。この落ち込みは、全容は明かではないが、長さ1.2m、幅0.8m程度の規模であったことがわかる。

さらにこの長方形状の落ち込みの西コーナー付近から、わずかに溝状の落ち込みが壁際に向かって延びているが、この時期の住居跡にしばしば見られるような中央ピットから壁体溝に向かう溝がこの住居跡にも存在した可能性がある。

床面には3ヶ所、火を受けて赤く変色した焼上面が確認されたが、いずれもさほど広い範囲ではなく、最大焼土面の長径が40cm強を測るばかりである。

S I 01遺物出土状況（第198図） S I 01からは多くの遺物が出土している。その出土状況は大きく2群に分けることが出来る。ひとつは、ほぼ床面の直上から出土した遺物群、もうひとつは覆土の黒色土の直下から出土した遺物群である。床面直上の遺物は、北コーナー付近に集中して出土しており、特に壁際付近に集中して出土している（第198図右上の遺物群）のが通常の大きさのコシキ



第197図 柳遺跡 S-01実測図 S=1/60

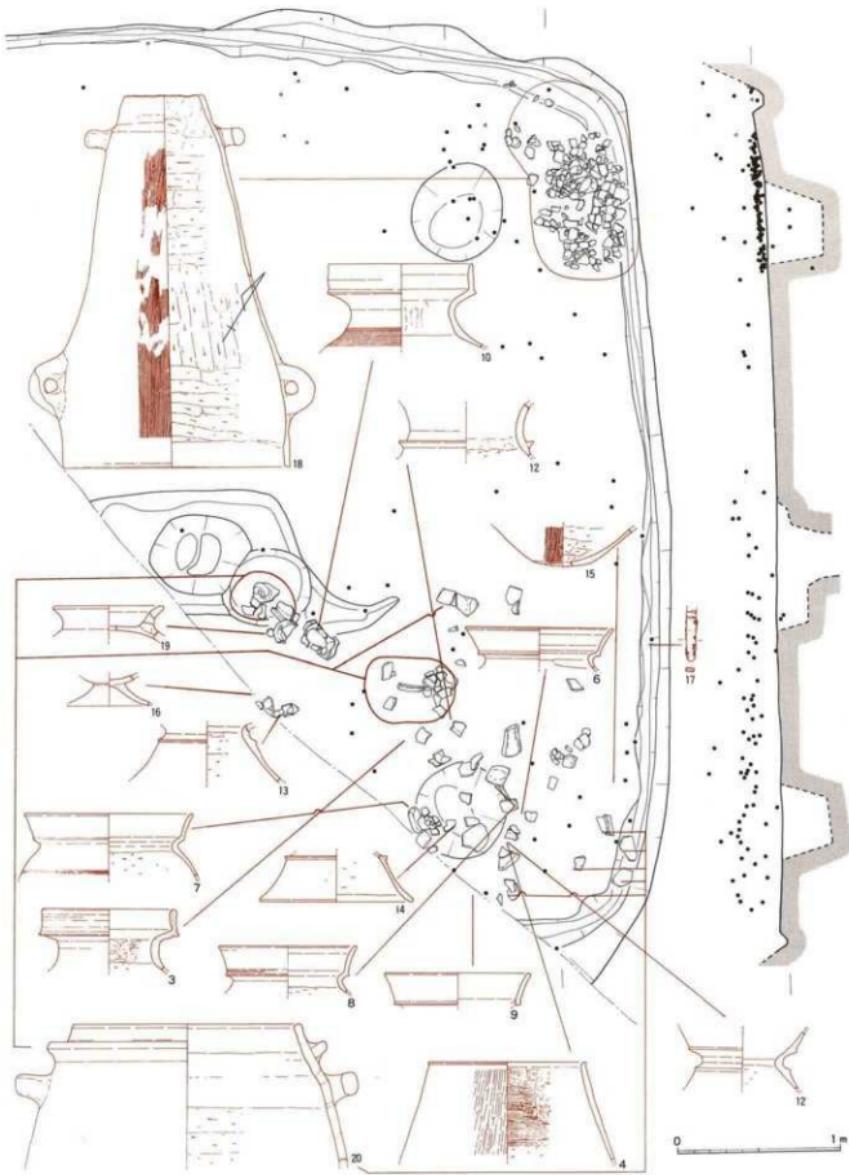
形土器である。これらの破片の多くが1個体分のコシキ形土器(第200図18)で、竹ヶ崎遺跡S I 09で検出されたような壁際に置かれていたものが潰れた状態と考えることも可能である。

黒色土下面出土の遺物は、住居跡の東南半を中心に出土しており、未調査部分に遺物の分布がさらに広がっている可能性が強い。遺物はコシキ形土器と蓋で、注目すべきはこれらの遺物は、後の遺物の項でも述べるように一般の上器群に比べて非常に大形の土器であることだ。明らかに日常的な土器とは思えず、また比較的散漫な出土状況は意図的に破碎して撒いた可能性もうかがわせる。住居跡廃絶後、一定の土砂が堆積した窪地に破碎した巨大なコシキ形土器と蓋をばら撒いた状況が想定され、何らかの祭祀行為の結果と推測される。

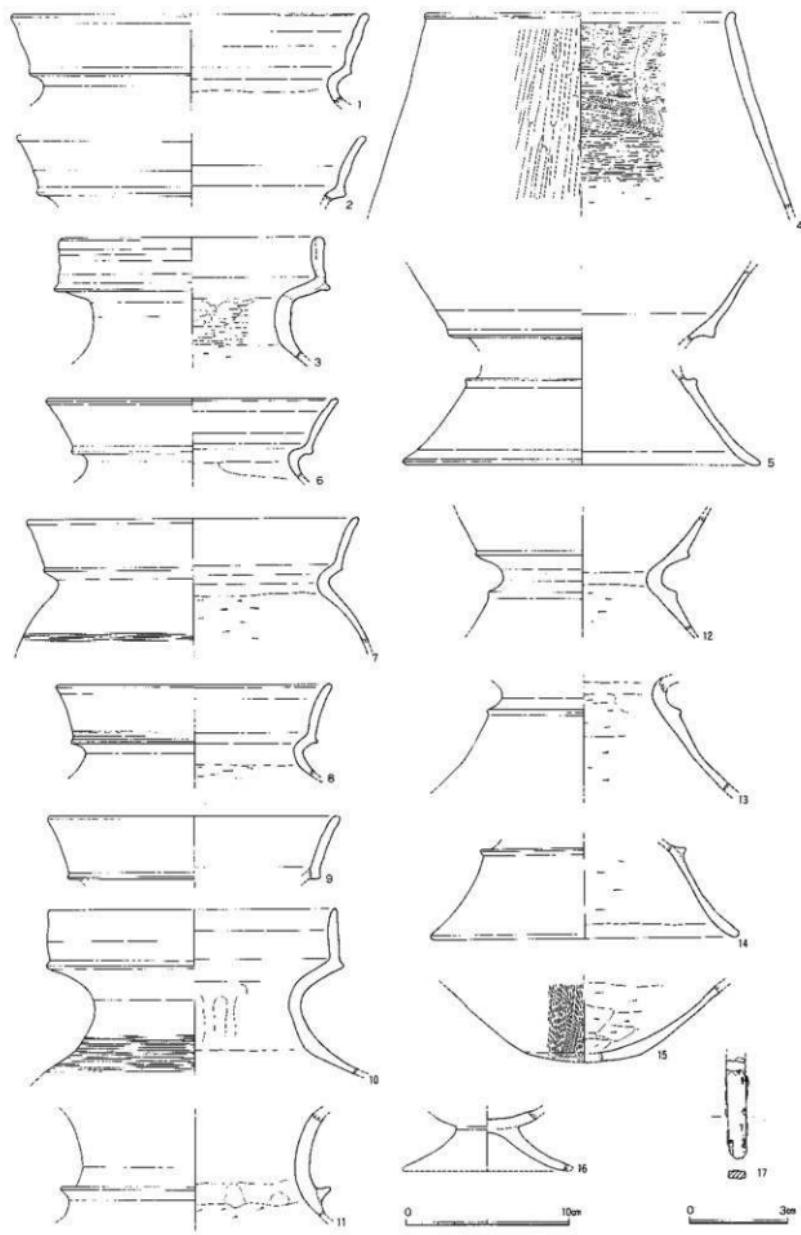
S I 01出土遺物(第199図～201図) 床面、覆土(黒色土より下)、黒色土直下、黒色土から遺物が出土している。床面出土の遺物は第199図1～5と第200図18である。1、2は口径22cm前後のやや大形の甕である。口縁端部は丸くおさめているが、わずかに外方にアクセントがある。3はほぼ直立する口縁をもつ壺である。口縁部の稜は横方向に張り出し、膨らみ気味のやや厚めの立ち上がりである。4は器種不明の長く直口の口縁を持つ土器である。復元口径19.1cmと大形で、やや内傾して円化しているが、直立に近い立ち上がりになる可能性もある。外面は縦方向、内面は横方向にて寧ろ磨いており、口縁端部はわずかに外方につまみ出している。5は鼓形器台である。復元底径22.0cm、筒部径12.2cmと口径、底径に比して筒部の径が比較的大きいタイプである。第200図18はコシキ形土器である。上半と下半は直接つながってはいないが、口径12.8cm、底径36.7cm、高さ60～61cm程度の一般的な大きさの個体である。底部から15cmばかりはほぼ直立し、縦方向の取っ手が付いた後、径が上方に向かってすばんしていく。口縁部から5cm下辺りからは小さなアクセントを持って径が広がり、その位置に横方向の取っ手が取り付いている。取っ手は上下とも器壁に穴を開けて差し込んでいる。17は中央ピットから出土した鉄器である。茎と考えられる部分に木質が残っており、刀子か鉗の破片であろうか。

6～16は床面から黒色土の間の覆土より出土した土器である。6～9はいずれも外方には直線的に開く口縁部をもつ甕である。6は端部をわずかに外方に引き出し、上部には面を持つ。8は口縁部の稜の上方に2条の浅い擬凹線が残る。10、11は壺である。10は直立する口縁部で、肩付にはヨコハケが見られる。11は、頸部と胴部の境付近に断面三角形の突帯が付くものであり目にしない形態である。12～14は鼓形器台、15は壺または甕の底部、16は台付き鉢である。15は凸レンズ状の底部で、底にもハケメが見られる。

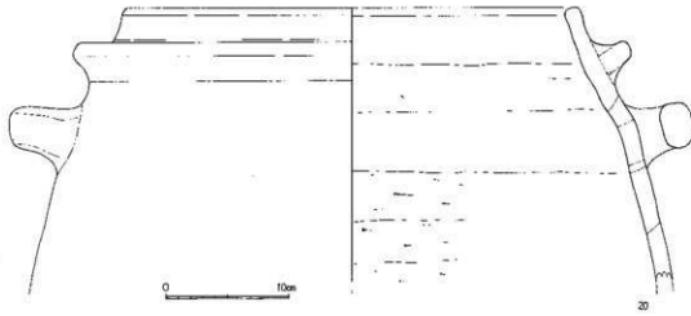
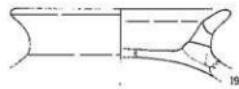
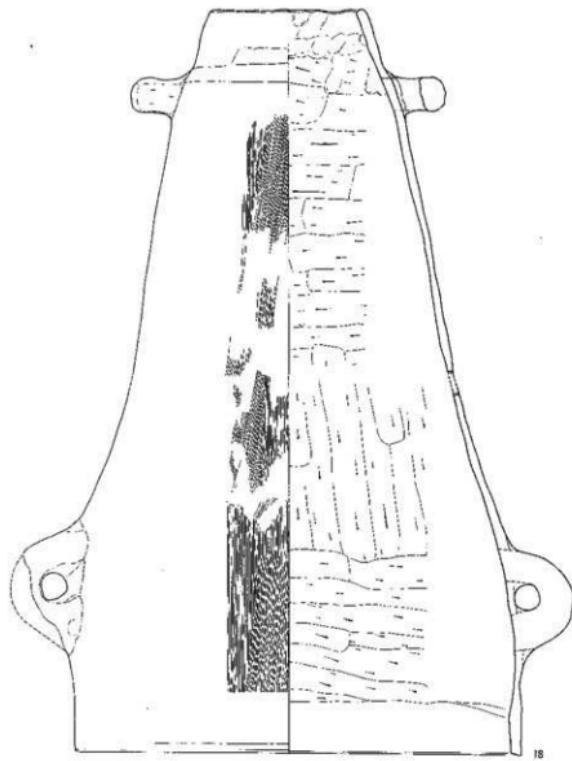
19、20は黒色土の下面から出土した大形土器である。20は口縁部のわずか下方に台形状の突帯を張り付け、その下には一对の横方向に取り付けた取っ手がある。取っ手は器壁に穴を開けて差し込んでいる。その形態は、まさにコシキ形土器の特徴を具備したものである。しかし、口径が37.5cmと一般のコシキ形土器の底径に匹敵する格段の大きさであると同時に、器壁も格段に厚い。また突帯や取っ手の取り付く位置も一般のものと比べて高い位置であり、バランスとして違和感を抱かせるものである。コシキ形土器を表象したものであることは間違いないだろうが、実用品とは考えにくく、祭祀的用途に用いられる仮器の可能性を考える必要があろう。19は外反する持ち手状あるいは高台状を呈す器壁に縦通し状の孔を開けたもので、蓋と考えられる。これも20同様、この期の蓋としては格段に巨大で器壁の厚い個体である。身の部分はほとんど残っていないが、皿状に大きく開いた形態をとれば、20のコシキ形土器の蓋と想定することも可能である。出土状況も一括性が高



第198図 柳遺跡 S I 01遺物出土状況 S = 1 / 30 遺物はスケール不同



第199図 柳遺跡S 101出土遺物実測図(1) S = 1 / 3、17は2 / 3
(1 ~ 5…床面、6 ~ 16…覆土、17…中央ピット内出土)



第200図 柳遺跡S 101出土遺物実測図(2) S = 1/4 (18…床面、19・20…黒色土上出土)

く、胎土も似通っており、両者はセットである可能性が高い。

第201図21～25は黒色土出土の上器である。21、22は甕の口縁部、23は甕か器台、24は鉢であろう。22は他の甕と比べて器壁が厚く、外面には擬凹線が微かに観察できる。25は筒状の脚部を持つ高壇である。外面はヘラミガキ、内面には横方向のヘラケズリを施している。

これらの上器は、覆土出土のものに若干古い要素を持つものも見かけられるものの、基本的にはまとまった時期のものと考えられ、塩津編年5期に併行する資料と考えられる。

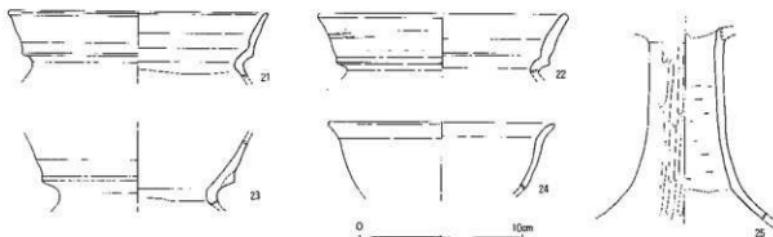
S D01～S D07 (S B01, S B02)

頂上高所平坦面の北西寄りあたりから重複して、7条の直線的で両端の切れた溝状の遺構が検出された。そのうち、尾根の方向に平行する2条 (S D01, S D02) と直交する2条 (S D03, S D04) は、相対応する方向と長さ、その規模から布壠建物を構成する溝である可能性が強く、それぞれS B01, S B02と呼ぶ。さらにそれらの溝と重なってわずかに方向を違えた2条 (S D05, S D06) とはほぼ南北方向に伸びる1条 (S D07) も、対応する溝は検出されなかったものの、周間に存在する掘立柱建物に同方向のものがあることや深さが同じであること、溝の端が途切れていることなどから、同様に布壠建物を構成していた可能性が高いと判断している。

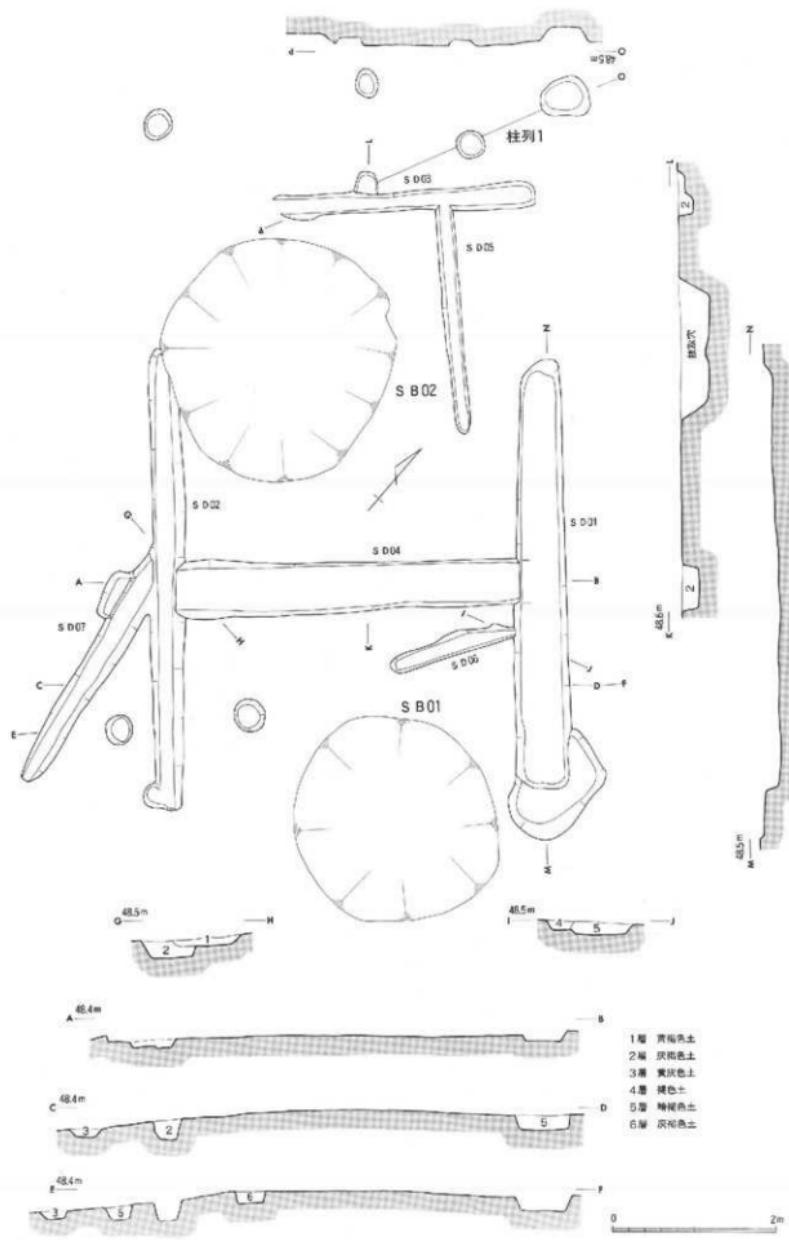
S B01 (S D01, S D02 第202図)

尾根の長軸方向と平行する同規模の2条の溝 (北東側をS D01、南西側をS D02と呼ぶ) によって構成される布壠建物跡と考えられる遺構である。溝は直線的で、方向はN 42° W、長さはやや長く残存するS D02が5.7mを測り、両溝間の梁行は溝の中央で測って4.7mである。この規模で施物の面積を計算すると約27m²と、かなり大形の施物となる。S D01, 02ともに深さは、検出面から10～20cmとかなり浅い。これはこの周囲が近年果樹園として造成された際に削平されたためと考えられ、本来はもっと深かったと推測される。溝の幅は、S D01が約55cm、S D02が約40cmとやや違いが見られる。

遺物はS D02の覆土内より弥生土器片が一点出土したのみである。小片で詳細な時期の判断は難しいが塩津4期併行であろうか。S B01の時期をこの一点の上器だけでは決めかねるが、後にも述べるように他の掘立柱建物跡などのあり方を考え合わせると、弥生時代後期後半～終末期の時期とみて大過ないと考える。



第201図 柳遺跡 S 101出土遺物実測図(3) S = 1 / 3 (21～25…黒色土中出土)

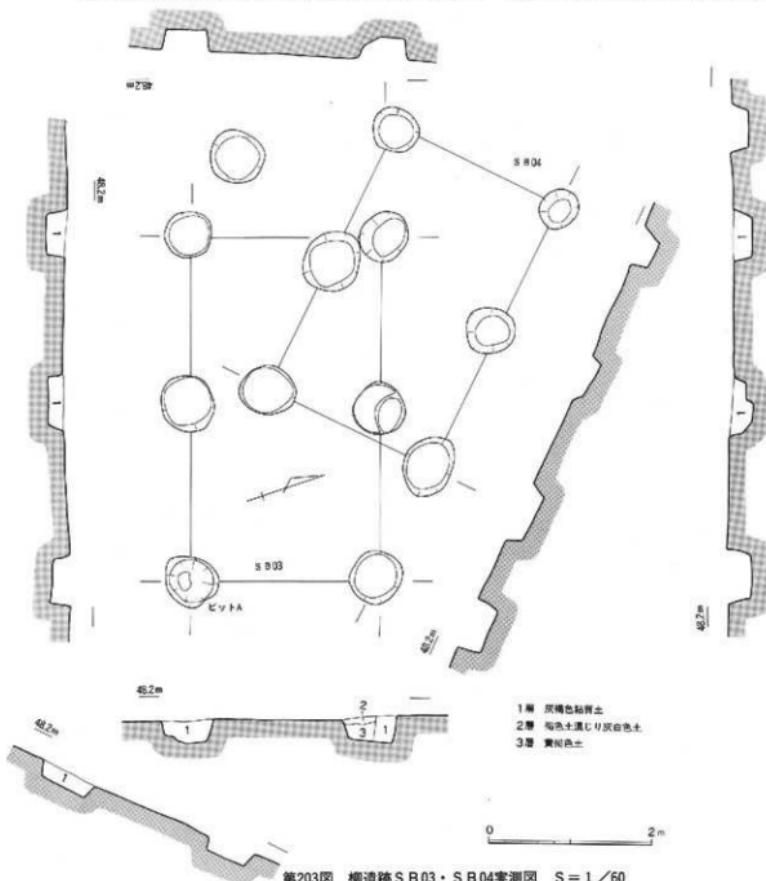


第202図 樅遺跡 S B01、S B02 (S D01～S D04)、S D05、S D06、S D07、柱列1実測図 S=1/60

S B02 (S D03, S D04 第203図)

S B01のはば中央に直角に交差するS D04と4.7m北西で検出されたS D03の平行する二本の溝で構成される布堀建物と考えられる。S D03は南側の端が検出できず、またS D04は北側の端がS D01の中で切れていたらしく、明瞭に検出できていない。よって正確な溝の長さ（桁行）は明かではないが、およその規模は推測できる。長辺（桁行）5.5m前後、短辺（梁行）4.7mとはばS B01と同規模で、方向だけ90° 振った建物と考えられる。溝の方向はN48° Eである。

溝の幅はS D03が約30cm、S D04が約65cmとS B01と同様にかなり違いが見られるが、深さはともに検出面から20cm前後である。S D04はS D02と切り合っており、その関係からS D04が新しいことがわかる。よってS B01よりS B02が新しいことになる。S D03の覆土から弥生土器が出土しているが小片で図示していない。時期は弥生時代後期後半～終末期と見て大過ないと判断している。



S D 05 (第202図)

S D 03と直角からわずかに振れた角度で交差して、南西に延びる溝である。溝の方向はN46° Wである。検出された長さが2.8m、幅が20cmで直線的に延びている。南端が明瞭に途切れることから、対応する溝は検出されていないもののS B 01、02と同様に布壙建物を構成する溝である可能性が高い。

S D 06 (第202図)

S D 04の南東側、S D 01と直角からややすれた角度(N32° E)で交わって検出された直線的な溝である。検出された長さは1.9m、幅は20cmと短いが、S D 01の北側は若干地形的に低くなっている、深さが検出面から10cmと浅いことと相まって、残存していないかかったか、検出不可能であった可能性が高い。S D 01との切り合い関係から、S D 06の方が新しいことが確認できる。溝の南端は明瞭に途切れており、布壙建物を構成する片側の溝と考えている。

S D 07 (第202図)

S D 02、S D 04と交差して検出された、N10° Wとはば南北方向の直線的な溝である。検出された長さが3.3m、幅は30~40cmであるが、南端は地形が低くなることによって中途で切れており、本末はもっと続いていると考えられる。深さは検出面から10cm前後と浅い。他の溝と同様に、布壙建物の片側の溝の可能性が高いと考えている。

柱列1 (第202図)

S D 03の北側で検出された直線的に並ぶ三穴の柱穴群を柱列1とした。柱列方向はN26° EとS D 06とはば同方向である。柱穴の深さは10~20cmと浅いが、これは周囲の削平のためと考えられる。柱間は、柱穴の中央で割って1.4mである。掘立柱建物跡の片側を構成する柱列と考えられるが、対応する辺は北側が采樹抜き取り痕で大きく搅乱されているために検出できなかった可能性が高い。

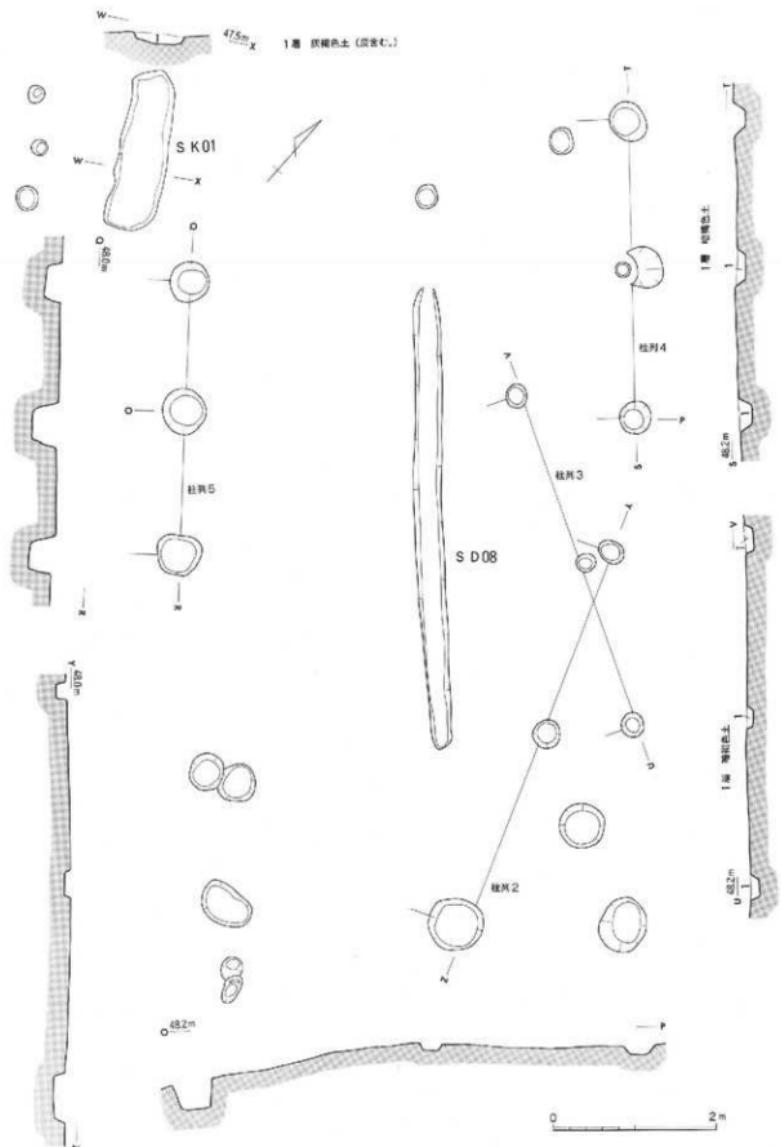
S B 03 (第203図)

頂上高所平坦面の南西縁、調査区の南端付近で検出された掘立柱建物跡である。2間×1間の建物で柱間が長辺側が2.15m、短辺側が2.35m、よって4.3m×2.35mの比較的大形の建物である。建物の方向は、尾根の長軸方向とずれており、N71° Wを測る。S D 06と比較的近い方向である。柱穴は直径65cm前後のものが多く、西端の柱穴がやや小型で55cm前後である。深さは南側に若干傾斜が下がっているため、北側の柱列が検出面から35cm前後、南側の柱列が25cm前後である。

遺物は南東端のピットAから黒曜石製の剝片が、北西端の柱穴から弥生土器小片(図示できず)が出土している。

S B 04 (第203図)

頂上高所平坦面の南西縁、調査区の南端付近でS B 03と重なって検出された掘立柱建物跡である。2間×1間の建物で、柱間は長辺側が1.8m、短辺側が2.25m、よって3.6m×2.25mの建物となり、S B 03よりやや規模が小さくなる。建物方向は尾根の長軸方向と一致しており、N46° W、S B 01、



第204図 柳遺跡 柱列2・柱列3・柱列4・柱列5・SD08・SK01実測図 S=1/60

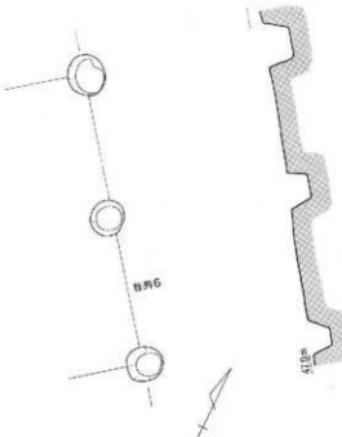
S B02と同方向である。柱穴は直径50cm~65cm、深さは検出面から15cm~30cmを測る。柱穴からは遺物は出土していない。

柱列2（第204図）

頂上高所平坦面の南西縁、S B03、S B04の西側で検出された柱穴3穴の並びである。地形の低い西側の柱列が流出したものと推測しており、本来2間×1間の掘立柱建物を構成していた可能性が高いと考えている。柱列方向は尾根の長軸方向とずれており、N21°Wと比較的南北方向に近く、S D07と近似した方向である。柱間は2mで、柱穴は北側の2穴が直径35cm、南側の1穴が直径65cmを測り、深さは10~15cmと浅い。柱穴から遺物は出土していない。

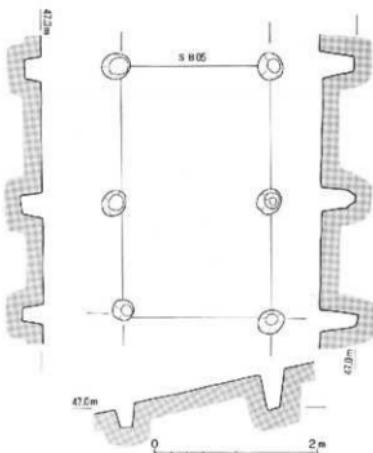
柱列3（第204図）

頂上高所平坦面の南西縁、柱列2と交差して検出された柱穴3穴の並びである。地形の低い南側の柱列が流出したものと推測しており、本来2間×1間の掘立柱建物を構成していた可能性が高いと考えている。柱列方向は尾根の長軸方向とずれており、N60°WとS D06とはほぼ同方向である。柱間は2.2mと2.1mで長辺が4.3mとなる。柱穴は直径25cm前後、深さは検出面から10cm前後と浅い。柱穴から遺物は出土していない。



柱列4（第204図）

頂上高所平坦面の南西縁、柱列3の北側に検出された柱穴3穴の並びである。地形の低い南西側の柱列が流出したものと推測しており、本来2間×1間の掘立柱建物を構成していた可能性が高いと考えている。柱列方向は尾根の長軸方向と一致しており、N42°WとS B01、S B02とはほぼ同方向である。柱間は1.85mで長辺が3.7mとなる。柱穴は直径40cm~45cm前後、深さは検出面から15cm~20cm前後である。柱穴から遺物は出土していない。



S D08（第204図）

頂上高所平坦面の南西縁、柱列2と柱列3の南西側に検出された直線状の溝である。地

第205図 柳遺跡S B05・柱列6実測図 S=1/60

形の低い南西側の対応する溝が流出したものと推測しており、本来布堀建物を構成していた可能性が高いと考えている。溝の方向は尾根の長軸方向と一致しており、N43°WとS B01、S B02とはほぼ同方向である。溝の南東側の端は明瞭に途切れているが、北西側の端は自然と消滅しており、明確な長さは不明だが、現状で5.7mとかなり大形の建物となる。幅は25cm~35cm、深さは検出面から10cm以下である。溝内から遺物は出土していない。

柱列5（第204図）

頂上高所平坦面の南西線の傾斜の変換する肩部付近、S D08の南西側2.5m付近に検出された柱穴3穴の並びである。南西側はすぐに斜面となるため対応する柱列が流出したものと推測しており、本来2間×1間の掘立柱建物を構成していた可能性が高いと考えている。柱列方向は尾根の長軸方向と一致しており、N40°WとS B01、S B02とはほぼ同方向である。柱間は1.8mと1.7mで長辺が3.5mとなる。柱穴は直径50cm~55cm前後、深さは検出面から20cm~35cm前後である。

柱穴から遺物は出土していないが、柱列の南西側から多くの弥生土器が出土している（第209図4~7）。遺物の詳細は後に述べるが、およそ塩津3期~4期の特徴を有している。ただ、隣接するSK01との関わりも考えられ、この遺物が直接この柱列の時期とは即断できない。

SK01（第204図）

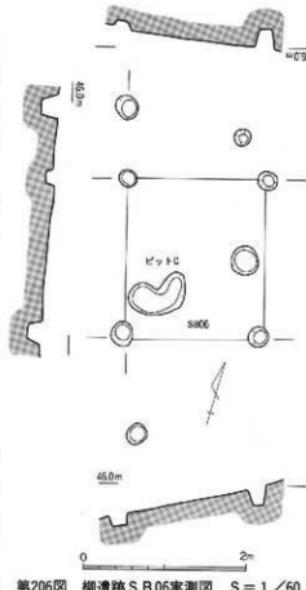
頂上高所平坦面の南西線の傾斜の変換する肩部付近からわずかに下った斜面、柱列5の西側で検出された土坑である。長さ2m、幅0.55cm~0.6cmの長方形で、深さは検出面から10cm前後と浅い。規模と形態から上壙墓の可能性もある。

覆土内より弥生土器が出土している（第209図8~10）。8と9は同一個体の可能性が高いやや大形の甕である。口縁端部は欠くが、口縁の外面には擬凹線を、頸部のやや下方には櫛状工具による波状文を施している。胴部の外面と口頭部の内面にはヘラミガキが見られる。底部は明瞭な平底である。10は鉢であろうか。口縁の端部を外方につまみ出すように突出させており、復元口径は22cmを測る。内面にはヘラミガキが見られる。低脚環の大形化したような形態かも知れない。これらの遺物から、SK01の時期は塩津2期と考えられる。

SK01の下方に小形のピットが3穴並んで検出されているが、建物等に伴うものかSK01に関わるものか不明である。

SB05（第205図）

頂上高所平坦面の南西線の傾斜の変換する肩部付近から西側斜面にかけて、S B01、S B02などの布堀建物群の西側約4m付近に検出された掘立柱建物跡である。1間×2間の建物で、長辺側（桁行）が3.1m、短辺側（梁行）が北側が1.9m、南側が1.8mのわずかにいびつな平面形を呈す。建物の長軸方



第205図 柳遺跡 S B05実測図 S = 1/50

向はN26°Wと尾根の長軸方向とややずれている。柱穴は直径30cm～35cm前後、深さは地形の高い東側の柱列で検出面から40cm～50cm、地形の低い西側で20～30cmを測るが、底面の絶対高は西側の柱穴の方が多い位置となる。柱穴内から遺物は出土していないが、北側に隣接する位置から弥生土器が集中して出土している(第210図13～19)。これらの土器の詳細は後述するがおよそ塩津2期～4期と時期幅がある。ただ検出できなかった加工段等が存在していた可能性もあり、これらの土器がSB05の時期とは明言できない。

柱列6 (第205図)

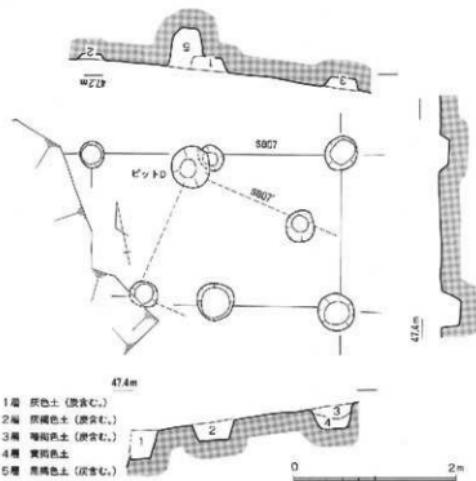
頂上高所平坦面の南西縁の傾斜の変換する肩部付近から西側斜面にかけて、SB05の北西側に検出された柱穴3穴の並びである。南西側はすぐに斜面となるため対応する柱列が流出したものと推測しており、本来2間×1間の掘立柱建物を構成していた可能性が高いと考えている。柱列方向は尾根の長軸方向と一致しており、N38°WとSB01、SB02とはほぼ同方向である。柱間は1.85mで長辺が3.7mとなる。柱穴は直径40～50cm、深さは検出面から25～35cmである。柱穴内から遺物は出土していない。

SB06 (第206図)

頂上高所平坦面の南西肩部からおよそ6m下った斜面に、比較的傾斜の緩やかな部分があり、ビットが集中して検出された。SB05の南西側、S101の北側にあたる部分で、1間×1間の掘立柱建物を組むことが出来た。2m×1.7mの規模で、柱穴の直径が25cm～30cm、深さが検出面から10～25cmを測る。建物の長軸方向がN16°Wと南北方向に近い。SB06を構成する柱穴からは遺物は弥生土器小片が出土しているが図示できていない。隣接するビットCから弥生土器が出土している(第210図22)。平底を残す底部で、厳密な時期の判定は難しいが塩津3～4期に対応する時期であろう。

SB07 (第207図)

頂上高所平坦面から北低部に向かう緩やかな斜面の南西寄りから検出された掘立柱建物跡である。果樹抜取のための搅乱で南東の柱穴が失われていると推測され、1間×2間の建物であろう。長軸方向はN79°Eと東西方向に近い。柱間は柱穴の中央で測って長辺側が1.55m、短辺側が1.9mで、桁行



第207図 柳遺跡SB07実測図 S=1/60

き3.1m、梁間1.9mの規模となる。柱穴の直径は30cm~50cmで、深さは検出面から15cm~30cmである。

S B07と重なって3穴のピットが検出されている。この3穴は1.6mと1.75mの間隔ではば直角に交わる配置となっており、掘立柱建物を構成していた可能性がある。不明瞭ながらS B07' と呼んでおく。方向はN36°Eで、S D06の方向に近い。柱穴の切り合いを見るとS B07より古いことは明かで、深さも検出面から35cm~50cmと比較的深い。

S B07' を構成する柱穴（ピットD）内からと、その近辺から弥生上器が出土している（第211図28、29）。28はピットD内から出土した甕の口縁付近の小片である。29はほぼ直立する体部から直角に外方に折れ曲がって端部に至る口縁を持つ器種不明の土器である。口縁の外面下方には櫛状工具による波状文が施され、内面をヘラケズリがみられる。いずれも時期の特定は難しいが、28は塩津4期前後、29は弥生時代後半~終末期におさまると思われるが、それ以上の限定は類例がないため困難である。

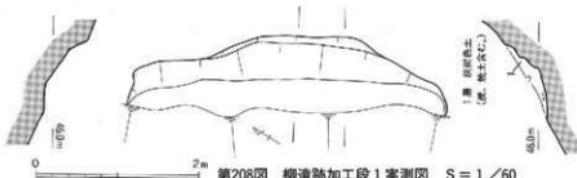
加工段1（第208図）

頂上平坦面から西側斜面に至る肩部からわずかに下った斜面で検出された遺構である。S B07西側、柱列6の北西側にある。斜面の上方を削って平坦面を作り出したもので、壁際に壁体溝は認められないことから堅穴住居跡ではなく、加工段とした。斜面下方側は果樹園造成の際に削り取られ、平坦面の幅は0.4m程しか残っていない。検出された部分での長さは3.9mを測る。覆土より弥生上器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

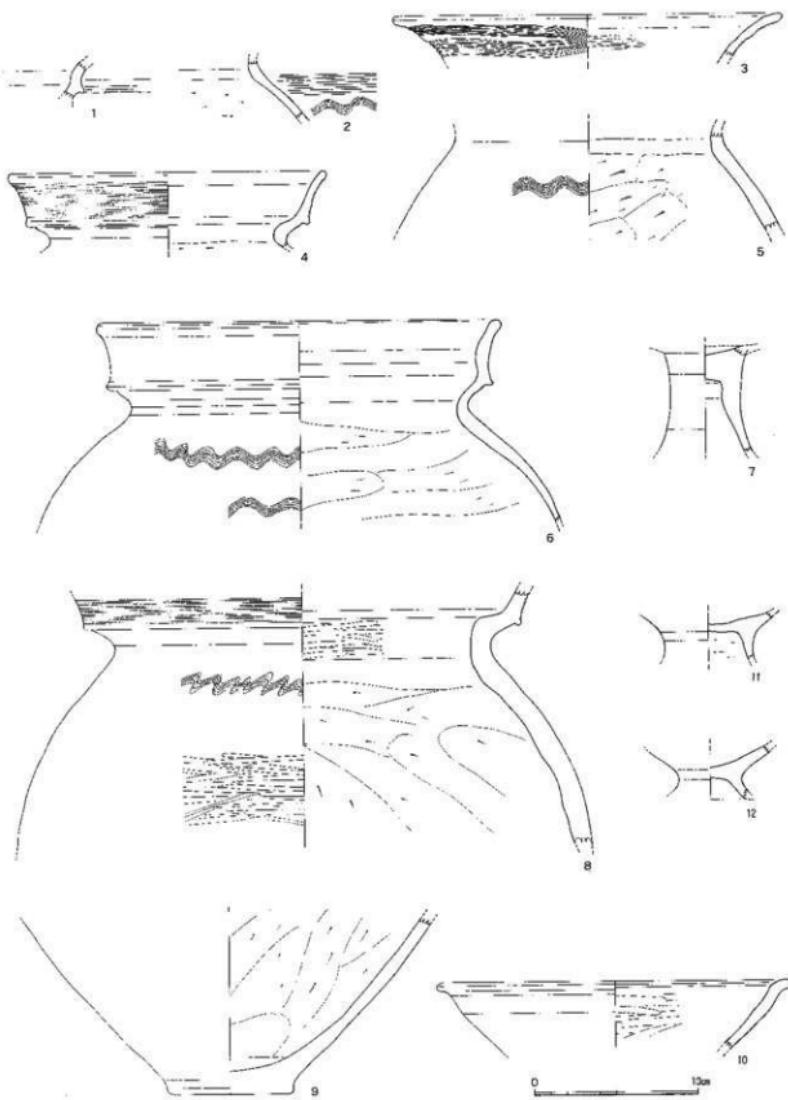
柱列7（第195図）

加工段1の下方約5m辺りは、後世の果樹園の造成により南北方向に長い平坦面が形成されている。その一部で遺物が多く出土し、ピットが検出された部分がある。詳細は不明なため柱列7と呼ぶが、元来存在していた加工段が残存している部分と考えられる。ピットは不定形なものも含めて4穴検出しており、柱間は不揃いだが並んでいる。

遺物はピット群の周辺と北端のピットEから出土している（第211図33~38）。34、35、37、38がピットE出土の土器である。34は甕で、外湾しながら立ち上がる口縁の外面に擬凹線を施している。頸部の下には櫛状工具による振幅の少ない波状文がみられる。35は薄手の甕である。複合口縁部の縫は横にやや伸び、口縁は外方にまっすぐ立ち上がって端部はやや外方につまみ出すように処理している。37は高杯の環部であろう。38は低脚杯であろうか。33、36はピット周辺から出土した土器である。33は外湾する口縁外面に擬凹線を施した甕で、頸部下にも平行沈線がみられる。36は高杯である。环部の底は円盤充填で、底には小穴が見られる。これらの土器の時期は塩津2期~3期のもの（33、34）と塩津5期前後のものに大別できる。遺構の時期としては後者を取るべきであろうが、



前者の時期にもこの位置に造構があった可能性もある。



第209図 柳遺跡頂上高所平坦面西半出土遺物実測図 S=1/3
(1…SD02、2・3…頂上部、4~7…柱列5下方付近、8~10…SK01、11・12…SI01付近)

頂上高所平坦面から西側斜面出土遺物（第209図～第211図）

出土した遺物を第209図から第211図にまとめて図示した。1はS D02の覆土内から出土した甕口縁部小片である。口縁は大きく外反する気配で、複合口縁部の稜は水平よりやや下向きに突出している。2、3はS B01を始めとする布堤跡群の南側で出土した土器である。2は甕の頭部から胴部にかけての破片で、外面には平行沈線と櫛状工具による波状文が見られる。内面はヘラケズリで、砂は右方向に動いている。3は器台の口縁部と考えられ、外面には5条1単位の擬凹線が、内面にはヘラミガキが見られる。復元口径は24cmだが、小片のため不明瞭である。

4～7は柱列5の下方付近で出土した土器である。4は口縁部が外湾して聞く甕で、外面には擬凹線を施している。淡橙褐色を呈す。5は甕の頭部から胴部にかけての破片で、外面には櫛状工具による波状文が、内面は砂が右に動くヘラケズリが見られる。白っぽい淡黄褐色を呈す。6は復元口径25cmを測る中形の甕である。口縁部は外湾して聞き、端部はやや外方に折り曲げるようにしており、頭部にはわずかながら面も認められる。複合口縁部の稜は横方向に拡張している。胴部外面には2段にわたって櫛状工具による波状文が施され、内面は砂が右に動くヘラケズリが見られる。淡黄褐色を呈す。7は高環の脚部である。当地に一般的な円盤充填による技法ではなく、環部の底は厚い。底部内面はややくぼんでいるが、ここにはさらに粘土が埋められて平坦になっていたようである。脚部は根元付近は厚いが、中段から下は若干薄くなつて外方に開いていく。白っぽい淡黄褐色を呈す。

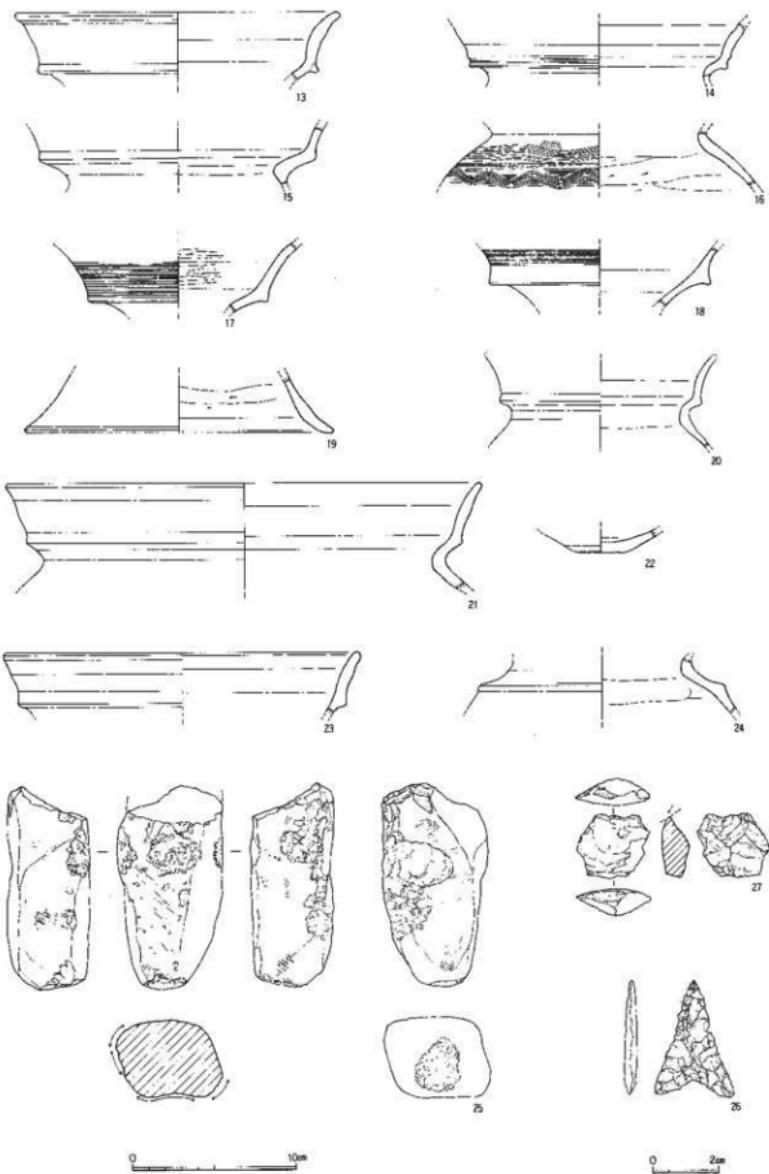
8～10はSK01出土の土器である。詳細は既に記した（P280）。11、12はSI01の北側付近で出土した土器である。11は高環であろうか。脚部の接合部付近の径が5.6cmを測り、内面には横方向のヘラケズリが見られるが、底部下面の小穴はみられない。12は低脚環であろう。

13～19はSB05の北側から集中して出土した土器である。13は外湾して聞き端部を丸くおさめる甕の口縁部で、複合口縁部の稜はやや横向きの下方に突出する。14はほぼまっすぐ外方に立ち上がる甕の口縁で、稜のすぐ上方に2条の平行沈線を施している。13、14ともに淡黄褐色を呈す。15は全体に風化が著しく細部は不明の甕だが、口縁はやや外湾しながら立ち上がるようだ。16は甕の頭部から胴部にかけての破片で、胴部上半にはヨコハケの後ややゆがんだ平行沈線と櫛状工具による波状文を施している。内面はヘラケズリで砂は右方向に動いている。白っぽい淡黄褐色を呈す。17、18、19は器台である。17、18はともに筒部が比較的延びるタイプと考えられ、受部外面には擬凹線を施している。ともに淡黄褐色を呈す。

20～22はSB05とSB06の間で検出されたビットB（第196図）から出土した土器である。20は復元口径14cm強の小形の甕である。風化が著しく詳細は不明だが、口縁は外湾しながら立ち上がり、複合口縁部の稜は横方向に突き出していたと推測させる。白っぽい淡黄褐色を呈す。21は小片で口径は不明瞭ながら、30cm前後の大型の甕である。複合口縁部の稜はわずかに横に伸び、口縁は外方にほぼまっすぐ立ち上がる。22は平底の残る底部である。これらの土器は塙津4期～5期に対応するものであろう。

23、24はSB05、SB06周辺から出土した土器である。23は復元口径22cmの中形で厚めの甕の口縁部である。口縁部はほぼまっすぐ外方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。24は器台と考えられる。脚部として風化しているが、器面の風化が著しいため上下は不明である。

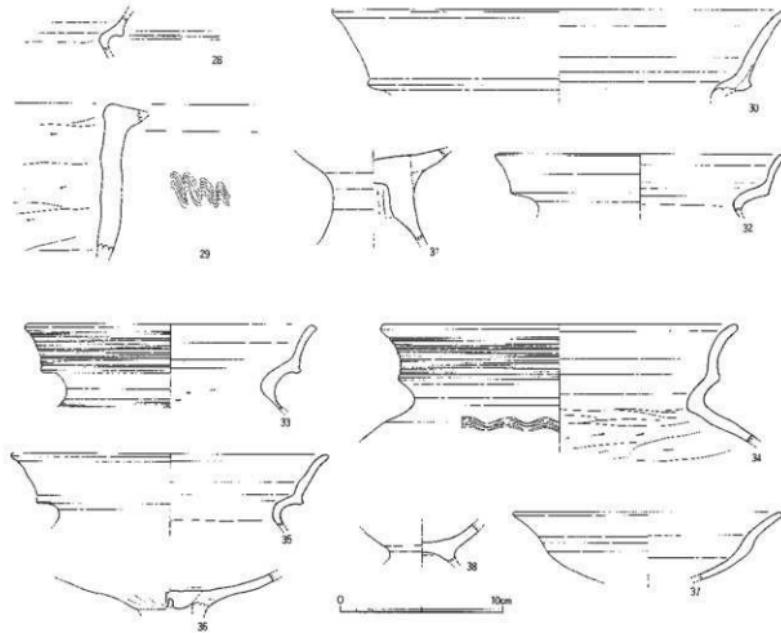
25は西側斜面部から出土した、たたき石である。細長い自然石の先端に敲打痕が認められ、周囲



第210図 柳道跡頂上高所平坦面西側下方出土遺物実測図 S = 1 / 3、26・27は2 / 3
 (13~19…SB05北側、20・21…SB05・SB06間ピットB、22…SB06ピットC、
 23~26…SB06周辺、27…SB01ピットA)

にはかすかに擦痕が観察される。また石器の周囲をめぐるように敲打痕や剥離痕が認められる部分があり、一部は強い敲打によりくほんでいる部分もある。柄等に固定するための加工かも知れない。作業面の反対側は折れている。この石器と類似した石器が竹ヶ崎遺跡、加工段07からも出土しており、注目される。26はS I 01の周辺から出土した暗緑色を呈す良質の碧玉製石鏃である。右鏃としては珍しい石材で、凹基で端正な形をしている。27はS B 03のピットAから出土した黒曜石製剝片である。端部は折れているが、平坦打面から剥離された不定形の剝片で、背面には同方向の剥離面が数面みられる。

28はS B 07¹出土の甕片、29はS B 07付近で出土した器種不明の土器片である。詳細はP 282に記載した。30は加工段1の北側で出土した復元口径28cmの比較的人形の甕である。複合口縁部の後は鋭さはないが横方向にやや突出し、口縁はわずかに外湾気味に開いて立ち上がって端部は薄くおさめている。白っぽい淡褐色を呈す。31も加工段1北側で出土した高環である。全般的に分厚いくつりで、脚部の根元は厚さが2cm近い。环部との接合は差し込み法で、縫ぎ目に粘土を継ぎ足して接合している。脚部内面にはシボリが見られ、脚部中段から下は薄くなって開いていく。胎土は紗を含むものの概して微細で、淡橙褐色を呈す。より厚めながら、柱列5下方付近で出土した高環(第209図7)と類似している。32は西側斜面出土の甕口縁部である。口縁は外湾しながら外方に立ち上がり、端部には微かながら面を持つ。



第211図 柳遺跡頂上平坦面及び西側斜面出土物実測図 S=1/3
(28…S B 07¹ ピットD、29…S B 07周辺、30…加工段1北側、
31~32…西斜面、33~38…柱列7付近、34~38…柱列7ピットE)

西側斜面谷底遺物出土状況（第195図、第196図）

頂上部と西側に隣接する丘陵の間の谷底部から、大量の弥生土器を中心とする遺物が出土した。遺物は基本的に炭泥じりの黒色土から出土している。黒色土の堆積状況を谷の長軸（縦断）方向で見ると、斜面上方から谷底にいくに従って次第に厚みを増していっている（第212図）。谷を横断する土層の堆積では、ほとんど谷底部分にしかこの黒色土は堆積していない。果樹園の造成で削られることもあるが、縦断方向に比べて斜面が急なことが大きな原因であろう。

遺物のドットマップ（第196図）を見ると、最も低い谷底部分に厚く遺物は集中し、上方にいくにしたがって密度が低くなる様子がうかがえる。この傾向は黒色土の堆積状況とほとんど一致するものである。

以上のような黒色土の堆積状況や遺物の出土状況から考えて、西側斜面谷底出土の遺物の大部分は、斜面の上方から流出した再堆積遺物と考えられる。

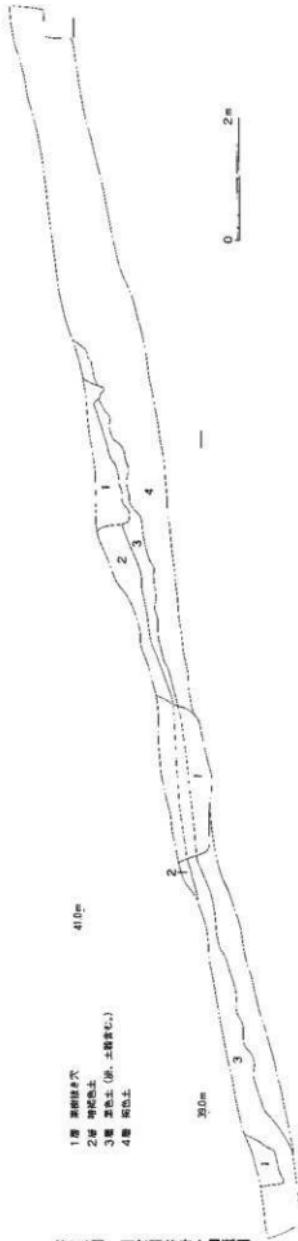
さてこれらの遺物がどの方向から流出してきたか限定することは難しい。基本的にはレベルの高い3方向から流出したものと見て良いと思われる。ただ黒色土の連続性や、後述する出土遺物の特徴が頂上平坦面で出土する遺物の中心的時期よりも若干古い特徴を持つものが多いことを考え合わせると、南東側の鞍部（用地外未調査区）から多く流れてきた可能性を指摘しておきたい。前述したように、この鞍部にはS101が存在し、また西側に隣接する丘陵の斜面にも同時期の柳II遺跡が存在することから、未調査区に遺構が統一して存在することは想像に難くない。

なお、遺物が集中して出土する部分の西寄りから、ほぼ完形の須恵器壺が2点、密接して出土している。何らかの遺構に伴う可能性が高いと判断し、周囲を注意深く精査したが遺構は検出できなかった。

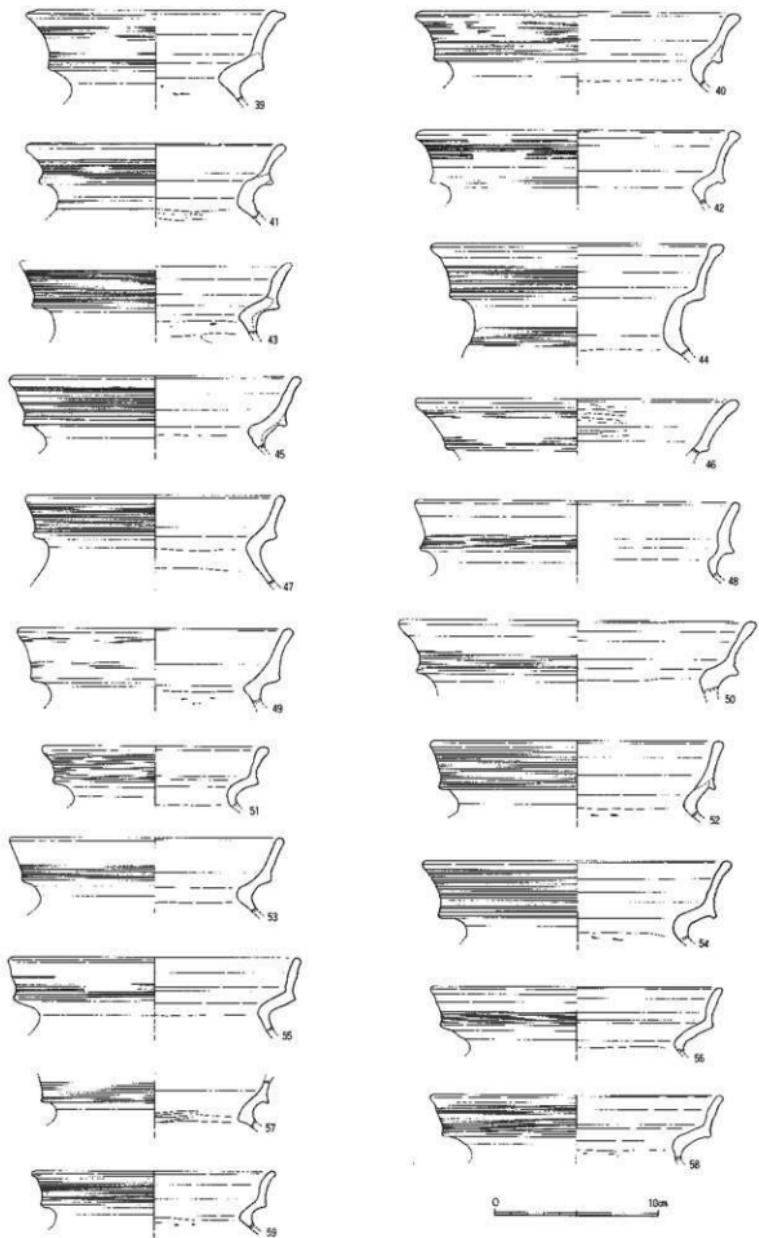
西側斜面谷底出土遺物（第213図～第217図）

弥生土器を中心に多くの遺物が出土した。中形、小形の壺が多い。壺でも、複合口縁部の外面に擬四線がみられる個体が多いのが特徴である。

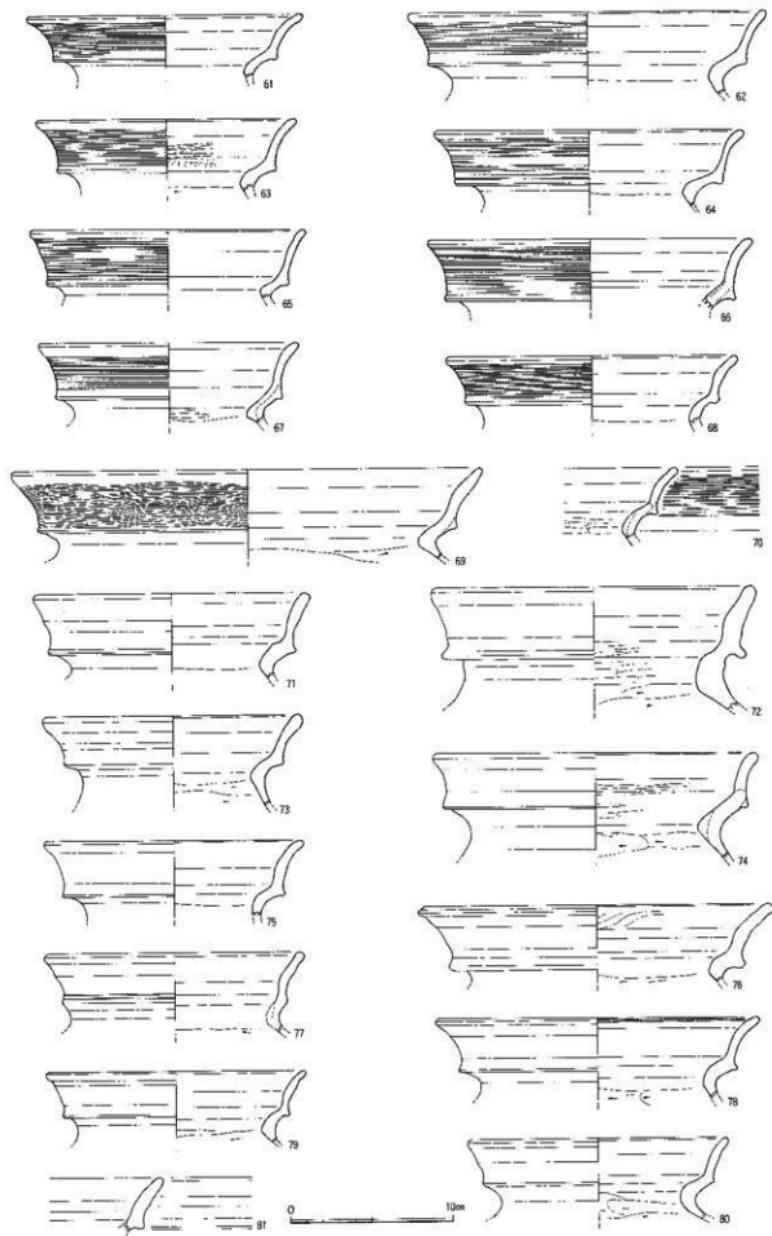
39-70は弥生土器壺のうち、複合口縁部の外面に擬四



第212図 西斜面谷底土層断面
実測図 S=1/80



第213図 柳遺跡西側斜面谷底出土遺物実測図(1) S = 1 / 3



第214図 柳達跡西側斜面谷底出土遺物実測図(2) S = 1 / 3

線を施したものである。これらのうち、39～55は、概して口縁の外側のみが外済しており、端部は若干厚みを増している個体である。34、35は分厚で端部はよく肥厚し、上面には面もみられる。42、44は厚みはさほどないが端部はよく肥厚しており内面側にもつまみ出している。上端には34、35と同様に面を持っている。50、51も端部がよく肥厚しているが、丸くおさめており上端に面はない。複合口縁部の稜はほとんど突出しない個体(39、44、49、51、53など)、やや下方向に突出する個体(40、42、45、52、54など)、やや横方向に突出する個体(41、43、48、50など)がありさまざまである。内面にヘラミガキがみられるもの(46、57)があるが、風化のため調整の観察が出来ない個体が多い。

56～58は口縁部全体が外反する甕だが、口縁部の長さが比較的短い。端部は丸くおさめており、複合口縁部の稜はわずかに下向きに伸びている。

61～70は口縁部が全体的に外反して、比較的長く伸びる甕である。口縁部の厚みは余り変化がなく、端部は丸くおさめている。複合口縁部の稜は、わずかながら下向きに伸びている個体が多い。器面の風化しているものが多いが、内面にはヘラミガキがみられるものもある(63、67)

71～90は、口縁部の外面に擬凹線が認められない甕もしくは壺である。71～74は分厚で口縁部が外反する個体である。特に72は全体的に厚く作られ、複合口縁部の稜は斜め下に長く引き伸ばされている。いずれも端面は丸くおさめている。72、74は内面にヘラミガキがみられる。

76も分厚で口縁が中段で外方に折れ曲がるものだが、端部はわずかながら外方につまみ出し、上端には面を作っている。75、78、79は口縁部がよく外反した個体である。複合口縁部の稜は斜め下向きにやや突出している。77は複合口縁部の稜が不明瞭な甕である。口縁部は中段で外方に折れ曲がり、上端には若干面を作り出している。

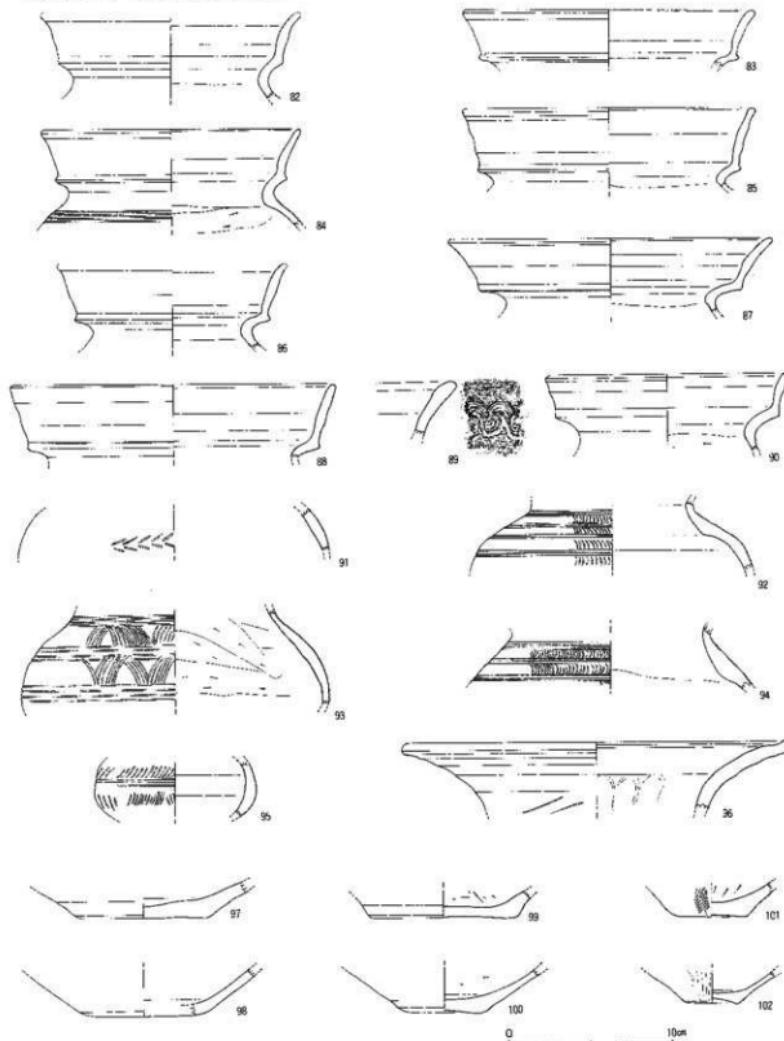
82～88は薄手の甕の口縁部である。口縁部の外反度は弱く、特に85、86、88はまっすぐ立ち上がりで、複合口縁部の稜や端部のつくりは風化したものが多く不明瞭だが、稜は概して横方向に突出している。また85は口縁部上端に面を持っている。胴部は残っていないものが多いが、84は頭部直下に平行沈線が見られ、内面は砂が右方向に動くヘラケズリを施している。比較的口径部分が残っている83は復元口径18.0cm、84は16.0cm、85は18.0cmを測る。

89は大形の甕か壺の口縁部片である。口縁外面にコンパス文状の文様が施されている。90は壺であろう。口縁部はやや外方に向かってまっすぐ立ち上がり、端部には面を持っている。風化しているが、複合口縁部の稜の突出は不明瞭である。復元口径15.0cmである。

91～95は甕もしくは壺の胴部で、刺突等の加飾が施されたものである。91は肩部や上方に、ハケメ原体状の工具で細かな刺突を羽状に施している。92は頭部以下に加飾したもので、3条の平行沈線の間にヘラ状の工具で細かく刺突を連続して施しており、少なくとも4段にわたって観察できる。外面には赤色顔料を塗布している。93も頭部以下に平行沈線と刺突で加飾した個体である。平行沈線は4条一単位で、刺突は数条～十数条単位で方向をえて山状にしている。原体は細いヘラ状のもので、刺突というよりは引いて描いたものかも知れない。94も頭部以下に平行沈線と刺突を加えたものである。平行沈線は3条一単位、刺突は半截竹管状の原体であろう。外面がカーブを描かず直線状を呈すことから、台付きの装飾壺の可能性もある。95は小形の壺で、最大径部分に3条の平行沈線を施しその上下に貝殻復縁かハケメ原体状の工具で刺突を加えている。

96は当地通有の複合口縁ではなく、単純口縁でラッパ状に開く壺である。口縁端部の上面は、そ

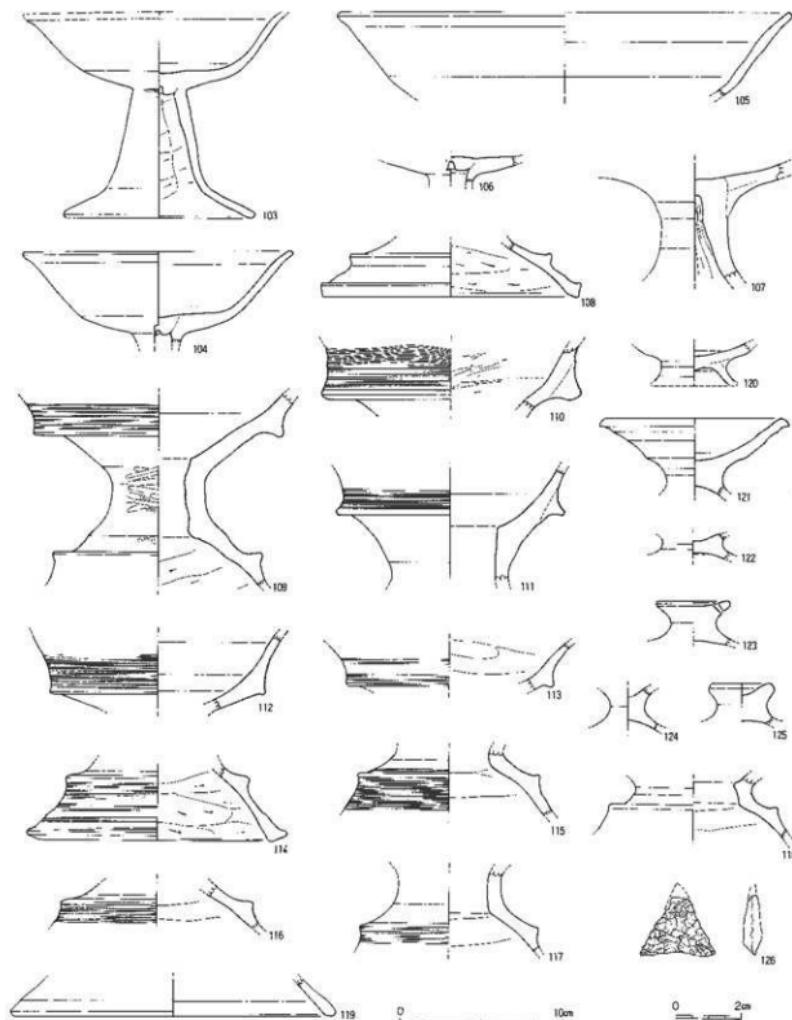
の内側をやや強くなれて凹ませることによって、上方につまみ上げたような形態をしている。外面には強いヨコナギで数条のくぼみが見られ、頸部付近には細い直線状の刺突が連続して施されている。刺突の内側には細かな条線が観察できることから、ハケメ原体状の工具であろうか。口っぽい淡黄褐色で、復元口径24cmを測る。



第215図 柳遺跡西側斜面谷底出土遺物実測図(3) S = 1 / 3

97~102は甕または壺の底部である。97、99は広い底部を持つ明瞭な平底の個体、101、102も明瞭な平底で底部は狭い。98、100は底部の縁が若干不明瞭になりかけている。

103~107は高环である。103は环部の底と立ち上がりの間にわずかに稜があり、口縁端部がやや外方に開く。脚柱部は下方に向かってやや開き、一段アクセントを持って大きく開いた脚端部に至る。



第216図 柳遺跡西側斜面谷底出土遺物実測図(4) S = 1 / 3、126は2 / 3

底部は円盤が充填され、中心には小穴があり、脚柱部内面は横方向のヘラケズリ、外面は風化しているがハケメが施されていたようである。口縁端部がわずかに欠けているが、口径は16cm前後、脚端径は11.8cmを測る。通有の高环に比べ環部が小さく、脚柱部の形態に違いがある。淡橙褐色を呈す。104は103に隣接して出土した高环で、脚部がないが103とほぼ同形態のものであろう。105は口径の大きい高环の環部であろう。106は环部と脚部の接合部付近で、环部の底は円盤充填、中心には小穴が見られる。107は全体的に分厚い高环である。环部と脚部の接合は差し込み法で、外面に粘土を添加して接合している。脚部内面にはシボリめが見られ、淡橙褐色を呈す。第209図7、第211図31が類似例である。108は有段の脚部である。

109~119は器台である。109~117は受け部や脚部の外面に擬凹線が見られるタイプ、118、119は見られないタイプである。109は分厚いつくりで、受け部には擬凹線を施しているが、脚部には見られない。筒部の中央は完全な筒状を呈し、外面にはヘラミガキを施している。114は脚端部を肥厚させて、下端には明瞭に面を設けている。

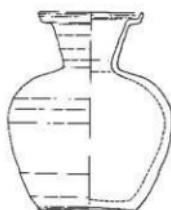
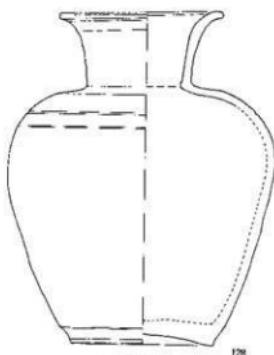
120、121は低脚环である。121は环部が外方にほぼまっすぐ伸びるタイプで、口縁端部はやや外方につまみ出し、上端には面を設けている。口径11.6cmを測る。122、124、125は蓋か低脚环か判断に迷う個体だが、調整の丁寧な側を上として蓋とした。123はつまみ部に小孔の開く蓋である。

126は黒曜石製の石鎌である。わずかに凹基で先端部を欠損している。

128、129は谷底のやや西側から互いに近接して出土した須恵器蓋である。128は最大径がかなり上方にあり、平底の胴部で、底部には回転糸切り痕を残す。胴部下半はヘラケズリの後でいるようで、上半には自然軸がかかる。口縁部はわずかに外方に開いて立ち上がり、端部に向かって大きく開いて丸くおさめる。口径10.1cm、底径8.8cm、器高20.6cm、最大径16.5cmを測る。

129は小形で薄手の蓋である。胴部の形態は128と似ており、最大径は上半にあって、底部は平底である。底部外面上には回転糸切痕が残り、胴部下部はヘラケズリを施している。頸部は外方に開いてほぼまっすぐ立ち上がり、口縁は一度水平に開いてさらに上方に立ち上がる複合口縁状を呈している。口縁部から頸部にかけては厚さ2~3mmと薄い。口径6.4cm、底径6.1cm、器高12.2cm、最大径10.1cmを測る。

これらの須恵器の時期は、およそ平安時代前半に属するものであろう。



第217図 柳遺跡西側斜面谷底出土物
実測図(5) S = 1/3

③頂上高所平坦面東半の遺構・遺物

頂上部南側に広がる高所平坦面の東側半分である。この平坦面をとりまくように縁辺から掘立柱建物跡が多く検出されている。特に東側斜面との傾斜変換点付近には同一方向の建物跡（S B10、S B11、S B13、S B15、S B16など）が並ぶように検出され、北西端で90°振った方向の建物（S B18）が続く。これらの建物の方向は布壇建物、S B01、S B02の方向とはほぼ同一である。またそれらの重なってやや方向を異にする掘立柱建物跡（S B08、S B12、S B17など）や柱列も検出されている。

高所平坦面東縁の盛土（第219図）

掘立柱建物跡が集中して検出された高所平坦面の東縁部は、元来の自然地形（発掘調査後の地形、第194図）を見ると尾根・谷の小さな凹凸がある。北側辺り（S B15、S B16周辺）は頂上平坦面が東側に張り出して広くなっているが、南側はややくぼんで谷状地形となり、平坦面の幅が狭くなっているのである。

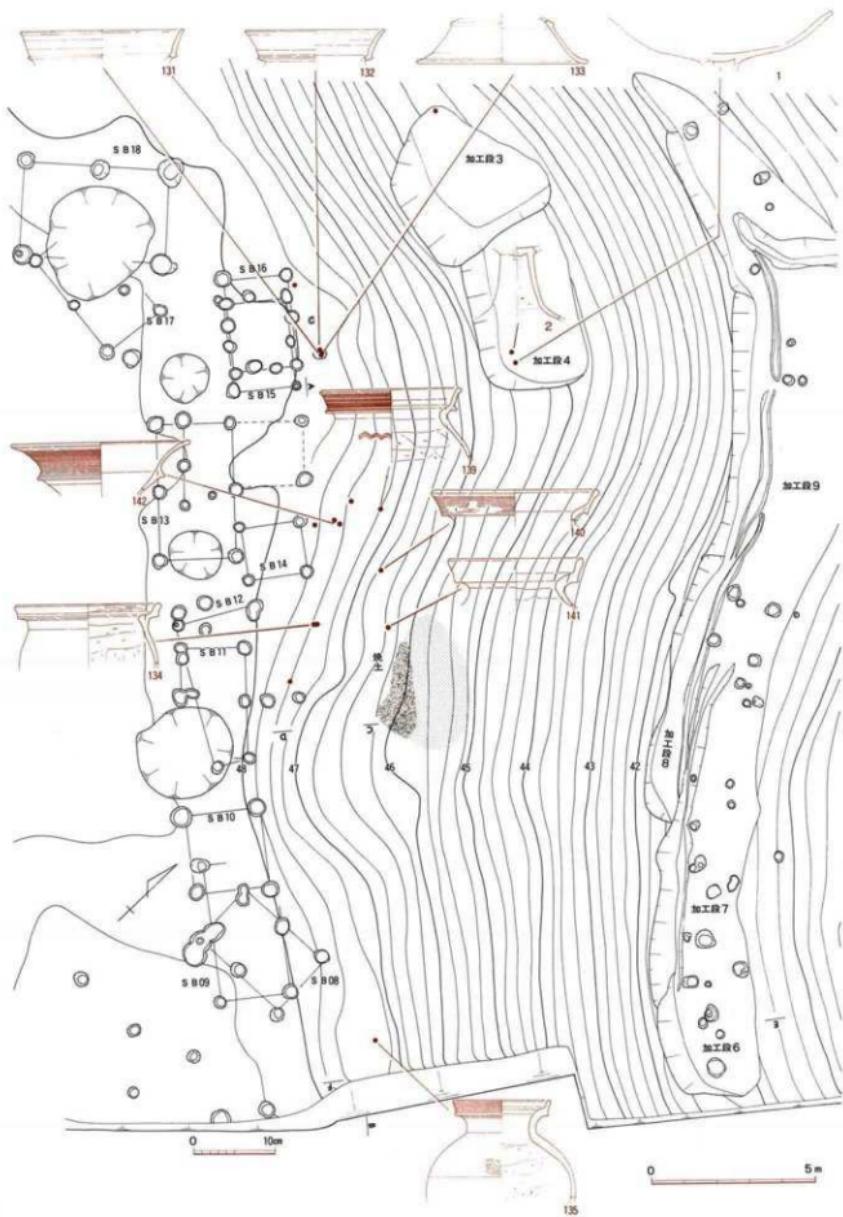
ところが調査前の地形を見ると（第193図）頂上平坦面の東縁は、最も幅の広い部分からくぼむことなくまっすぐ南側に続いている。これは谷状にくぼんだ部分に盛土を行って平坦面を広くした結果と考えられ、事実この盛土と考えられる土砂の上面からも柱穴が検出されている（S B08～S B14の東側周辺の柱穴）。

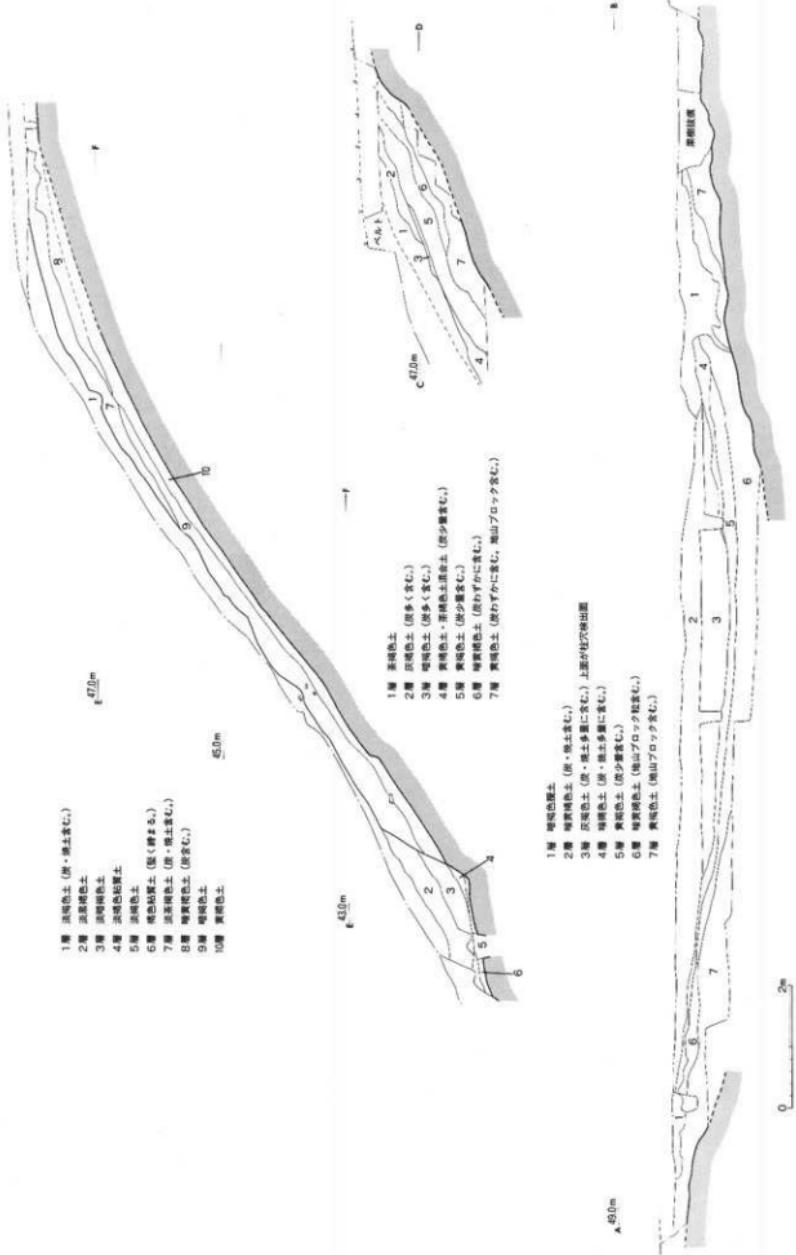
第219図はこの平坦面を形成した盛土付近の土層断面である。盛土部分を横断するA-B断面を見ると、地山の上にかなりの厚さで土砂が堆積していることがわかる。盛土と流土を見分けるのは難しいが、柱穴が2層暗黄褐色土を取り除いた時点で検出されていることから、その下面の3層（灰褐色土）以下を盛土と考えて問題ないであろう。盛土内には炭や焼土がかなり含まれており、注目されるのは盛土の下面に焼土の広がりが見られる部分があることである。この焼土は幅3mほどの広がりがあり、盛土前に何らかの火を使った行為があったことをうかがわせる。

以上のような盛土のあり方から、頂上高所平坦面の自然地形でやや幅の狭まった部分は、少なくとも2m以上は幅を広げられていたことがわかる。なお、平面的には検出できなかったものの、断面で盛土内に確認できた柱穴があり、S B10やS B11の東側あたりに、さらに掘立柱建物が存在していた可能性が高い。

この盛土の時期であるが、遺構との関係と出土遺物から追うことが出来る。まず遺構との関連では、東側下方に検出された加工段6との前後関係が明らかになっている（第219図E-F断面）。加工段6は、くぼみを覆う盛土もしくは盛土がずれたと考えられる層を切って形成されており、この盛土が加工段6が形成される以前に施されていたことがわかる。ちなみに加工段6の時期は塩津2～3期と考えられる（後節参照）。

一方、盛土内や盛土上の流土からかなりの遺物が出土しており（第225図135～第226図166）、その特徴から時期を推定できる。これらの遺物の個々の特徴については後に述べるとして、およその時期は、流土を含む層出土の遺物は塩津2期～5期の幅をを持っている。ただ明らかに盛土内出土と限定できる遺物（135、139～142）は塩津2期と考えて大過ない遺物に限定される。これは前述した遺構との関係とも整合するもので、この盛土は塩津2期からさほど降らない時期に形成されたものと考えられる。





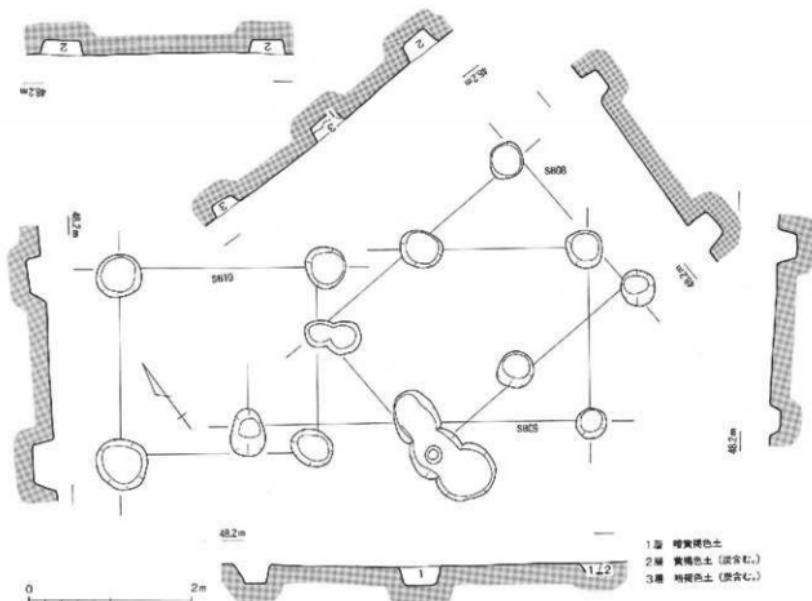
第219図 柳達跡頂上高所平坦面東側 土層堆積状況実測図 S = 1 / 80

S B08 (第220図)

頂上高所平坦面の東縁、調査区の南東端付近で検出された掘立柱建物跡である。2間×1間の建物で柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.60m、短辺側が2.05m、よって3.2m×2.05mの建物跡である。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向とずれてほぼ東西方向で、N 84° Wを測る。布堀建物群の中ではS D07と比較的近い方向である。柱穴は直径40cm～50cm前後のものが多い。深さは検出面から15cm～35cm前後だが、果樹園造成の影響を受けていると推測され、本来はもっと深かったであろう。北西端の柱穴は盛土内に掘り込んでいる。柱穴内からは遺物は出土していない。

S B09 (第220図)

頂上高所平坦面の東縁、調査区の南東端付近でS B08と切り合って検出された掘立柱建物跡である。北端に対応する柱穴1穴が検出されていないが、柱間は整っており2間×1間の建物と考えられる。柱間が柱穴中央で測って長辺側が2.10m、短辺側が2.15m、よって4.2m×2.15mの比較的大形の建物跡である。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向と近い方向で、N 44° Wを測る。布堀建物群の中ではS D06とほぼ同方向である。柱穴は直径35cm～50cm前後のものが多い。深さは検出面から10cm～25cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。東端の柱穴から弥生土器が出土しているが、小片のため図示できなかった。



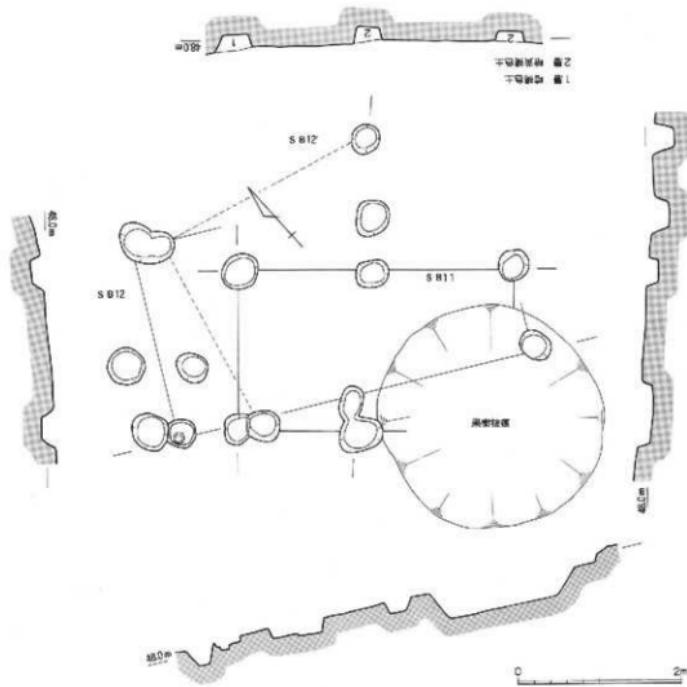
第220図 柳遺跡 S B08・S B09・S B10実測図 S = 1/60

S B 10 (第221図)

頂上高所平坦面の東縁、調査区の南東端付近でS B09と切り合って検出された掘立柱建物跡である。1間×1間の建物と考えられ、柱間が柱穴中央で測って長辺側が2.45m、短辺側が2.30mを測る。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向と近い方向で、N 44° Wを測る。S B09と同方向で布壙建物群の中ではS D06とほぼ同方向である。柱穴は直径50cm～65cm、深さは検出面から15cm～30cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。

S B 11 (第221図)

頂上高所平坦面の東縁、S B10の北西に隣接して検出された掘立柱建物跡である。果樹抜き取り穴で南端の柱穴が失われているが、1間×2間の建物と考えられる。柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.70m、短辺側が2.00m、よって建物規模は長辺(桁行)3.4m、短辺(梁行)2mの建物となる。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向とほぼ同方向で、N 48° Wを測り、布壙建物群の中ではS B01、S B02とほぼ近い方向である。柱穴は直径40cm～50cm、深さは検出面から15cm～20cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。



第221図 柳遺跡 S B11・S B12実測図 S = 1/60

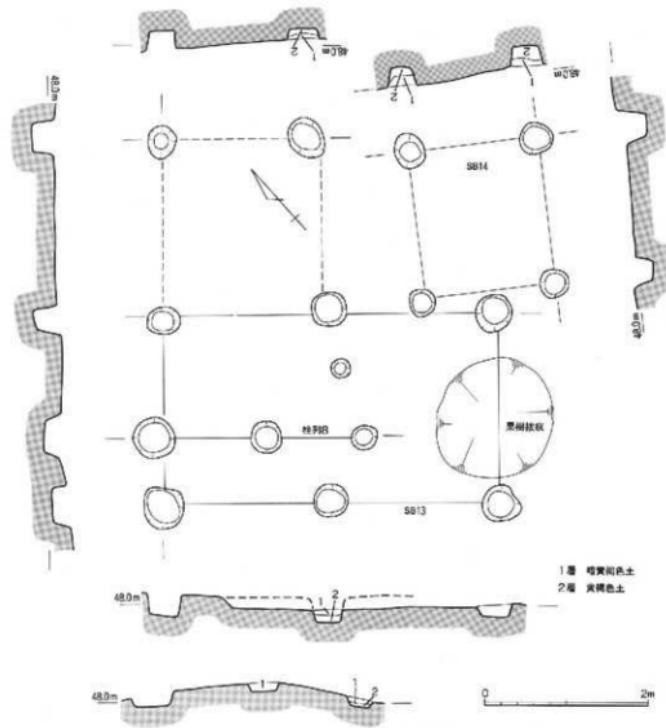
S B12 (第221図)

頂上高所平坦面の東縁、S B11と重なって検出された掘立柱建物と推測される柱穴群である。西側の2穴が検出されていないが、これは地形が低い側で柱穴も浅いために検出できなかつたものと考えており、1間×2間の建物であったと考えられる。柱間は長辺側が2, 2mと2, 3m、短辺側が2, 5mで、建物規模は4, 5m×2, 5mと比較的大形の建物となる。建物の方向は尾根の長軸方向とややすれしており、N62°Wで、布壙建物群の中ではS D06とほぼ同方向である。柱穴は直径35~40cmとやや小形、深さは15cm~20cmである。西端の柱穴から弥生土器が出土しているが、小片のため図化は出来なかつた。

なおこのS B12とS B11周辺には明確に建物を構成しない柱穴が多く検出されている。検出できなかつた柱穴も含めてさらに掘立柱建物が存在していた可能性が強い。参考までに、S B11、S B12と重なって直角に交わる3穴の柱穴を点線で結んでいる(第221図S B12')。

S B13 (第222図)

頂上高所平坦面の東縁、S B12の北西に隣接して検出された掘立柱建物跡である。布壙建物跡S B01とはほぼ平行の位置関係にある。1間×2間の建物で、柱間が柱穴中央で測って長辺側が2, 10



第222図 柳遺跡 S B13・S B14・柱列8 実測図 S = 1/60

m、短辺側が2.35m、よって建物規模は長辺(桁行)4.2m、短辺(梁間)2.35mの比較的大形の建物となる。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向とほぼ同方向で、N 48° Wを測り、布堀建物群の中ではS B01、S B02とほぼ近い方向である。柱穴は直径40cm~50cm、深さは検出面から15cm~35cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。

なお、この建物の北東側に2穴の柱穴が検出され、この位置がS B13の北西側の1間分ときれいに対応している。あるいは柱穴4穴をそのまま利用して、90°ずらして建物を建て替えた可能性も考えられる。そなだとすると4.5m×2mの建物となる。

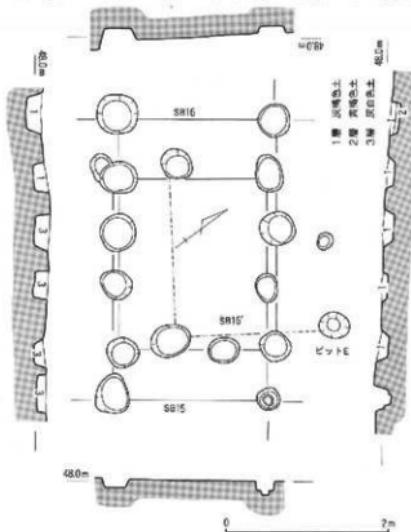
S B14 (第222図)

頂上高所平坦面の東縁、S B13の東に隣接して検出された掘立柱建物跡である。1間×1間の建物と考えられ、柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.85m、短辺側が1.65mを測る。建物の方向は、尾根の長軸方向とわずかにずれた方向で、N 55° Wを測る。S B09と同方向で布堀建物群の中ではS D06とほぼ同方向である。柱穴は直径35cm~40cm、深さは検出面から20cm~35cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。

柱列8 (第222図)

頂上高所平坦面の東縁、S B13に重なって検出された柱穴3穴の並びである。北東側は対応する柱列が流出したものとすれば、本来2間×1間の掘立柱建物を構成していた可能性もある。柱列方向は尾根の長軸方向と一致しており、N 48° WとS B13、S B01、S B02とほぼ同方向である。柱間は1.30mで長辺が2.6mとなる小形の建物となる。柱穴は直径30~50cm、深さは検出面から10~20cm

である。柱穴内から遺物は出土していない。



第223図 柳遺跡S B15・S B16実測図 S = 1/60

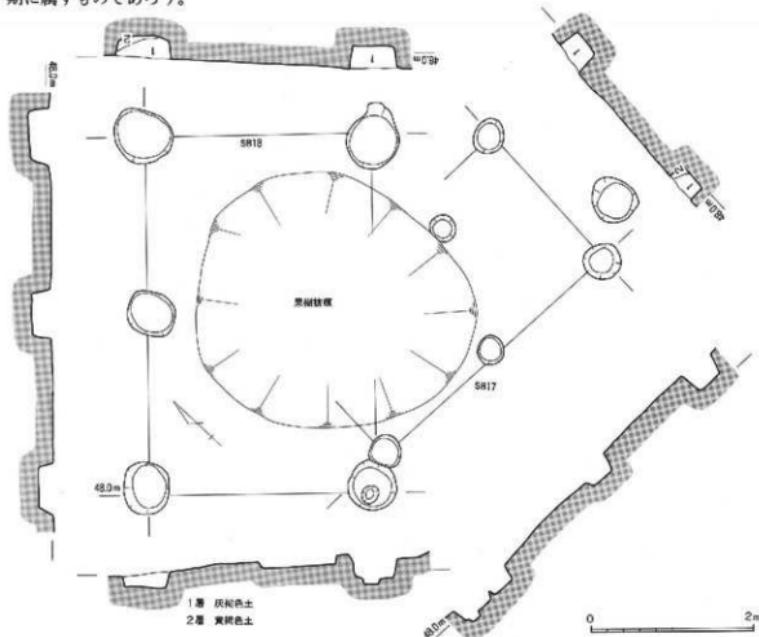
S B15 (第223図)

頂上高所平坦面の東縁、S B13の北側に隣接して検出された掘立柱建物跡である。自然地形の頂上平坦部が最も広くなる部分の縁辺にあたる。1間×2間の建物で、柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.40m、短辺側が1.95m、よって建物規模は長辺(桁行)2.8m、短辺(梁間)1.95mの建物となる。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向とほぼ同方向で、N 42° Wを測り、布堀建物群の中ではS B01と若干ズレがあるもののほぼ近い方向である。柱穴は直径30cm~45cm、深さは検出面から10cm~20cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。

S B16 (第223図)

頂上高所平坦面の東縁、S B13の北側に隣接して検出された掘立柱建物跡で、S B15とわずかに位置をずらした建物である。1間×2間の建物で、柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.40m、短辺側が1.95m、よって建物規模は長辺（桁行）2.8m、短辺（梁行）1.95mの建物となり、S B15とほぼ同形同大である。建物の長軸方向もS B15と全く同様である。柱穴は直径40cm～50cm、深さは検出面から10cm～20cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。S B15と時期を近くして建て替えられた建物であろう（前後関係は不明）。

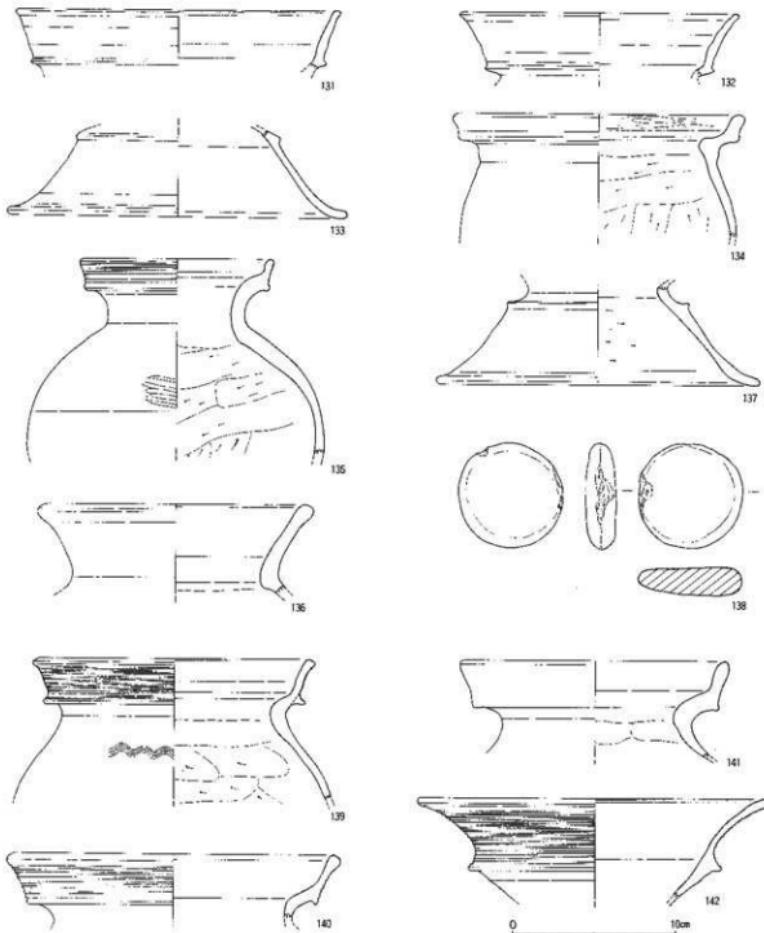
なおこのS B15とS B16周辺には明確に建物を構成しない柱穴が多く検出されている。検出できなかった柱穴も含めてさらに掘立柱建物が存在していた可能性が強い。参考までに、S B15、S B16と重なって直角に交わる3穴の柱穴を点線で結んでいる（第223図S B16'）。このうちのピットEからまとまって土器が出土している（第225図131～133）。131は甕の口縁部である。複合口縁の稜は横方向にやや突出し、そこから口縁は外方に開いてはまっすぐ立ち上がる。端部はわずかに外側につまみ出し、上端には面がある。復元口径20cmと中形の甕だが、遺存率は小さく径は不明瞭である。132は口縁部がわずかに外反気味に聞く甕で、端部にはわずかながら面がみられる。複合口縁の稜はやや横方向に突出している。白っぽい淡褐色を呈し、復元口径は17.2cmである。133は器台だが、遺存率が小さく器面も風化しているため、上下、径ともに不明瞭である。これらの土器は、塩津5期に属するものであろう。



第224図 柳遺跡 S B17・S B18実測図 S=1/60

S B17 (第224図)

頂上高所平坦面の北端付近、S B13の西側で検出された。北側の柱列のうち2穴が果樹抜き取り穴によって失われているが、1間×2間の掘立柱建物跡と考えられる。柱間が柱穴中央で割って長辺側が1.80m、短辺側が2.05m、よって建物規模は長辺(桁行)3.6m、短辺(梁行)2.05mの建物となる。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向と異なった方向で、N 83° Wを測り東西方向に近い。柱穴は直径35cm~45cm、深さは検出面から20cm~30cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。



第225図 梶原跡頂上高所平坦面東側底下斜面 盛土・流土中出土遺物実測図 S=1/3

S B18 (第224図)

頂上高所平坦面の北端付近、S B13の西側でS B17と重なって検出された掘立柱建物跡である。南東側の柱列のうち1穴が果樹抜き取り穴によって失われているが、1間×2間の建物である。柱間が柱穴中央で測って長辺側が2.25m、短辺側が2.80m、よって建物規模は長辺(桁行)4.5m、短辺(梁行)2.8mの比較的大形の建物となる。建物の方向は、尾根の長軸方向と同方向で、N48°Eを測り、布堀建物群の中ではS B02とはほぼ平行である。柱穴は直径55cm~70cmと大形で、深さは検出面から20cm~30cm前後であるが、本來はもっと深かったであろう。北端の柱穴から弥生土器が出土しているが、小片で団化は出来なかった。

頂上高所平坦面東半出土遺物 (第225図131~133、136~138)

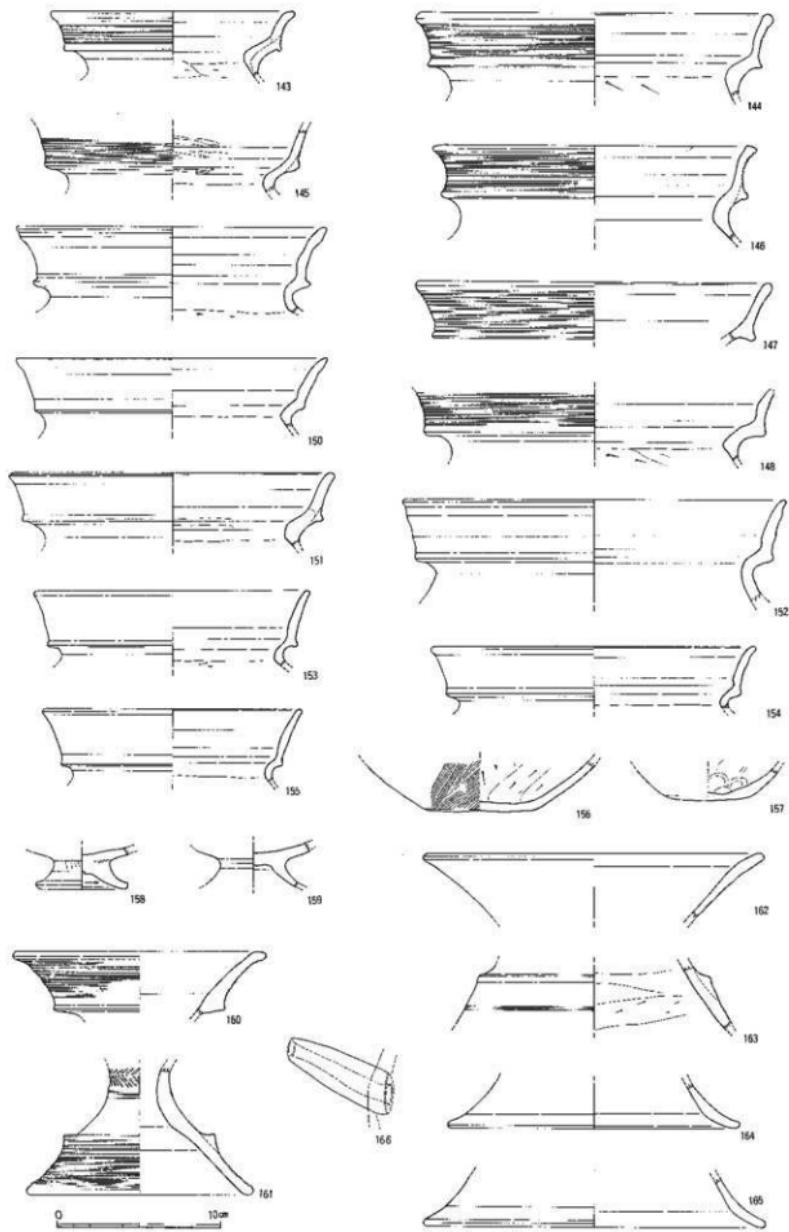
131~133はS B16'のピットEから出土した弥生土器である。詳細はP283で記述している。136は頂上平坦面で出土した直口壺である。口頸部は外方に開いてほぼまっすぐ立ち上がり、端部は若干膨らんで微かに面を持っている。復元口径17.0cmを測る。137は頂上平坦面で出土した器台である。径が大きく高さの低い鼓形器台で、復元径20cmである。138は偏平な円形の河原石の一端に敲打痕が見られる石器である。

頂上東側盛土内、流土内出土遺物 (第225図134、135、139~142、第226図、第227図)

掘立柱建物跡が集中して検出された高所平坦面の東縁部は、元来の自然地形の尾根・谷の小さな凹凸を解消するために盛土を行っている。この盛土内と、盛土が流れたと考えられる層からかなり遺物が出土している。

第225図134、135、139~142は盛土中出土と確認できた土器である。134は膨らみの少ない胴部と立ち上がりの低い複合口縁を持つ甕である。頸部の折れ曲がる部分が厚く、口縁はやや外反して端部は丸くおさめる。口縁内面にはヘラミガキがみられる。当地では余り日にしない形態である。135は壺である。胴部から頸部にかけては厚みがあり、胴部はよく膨らんでいる。口縁はやや外反し、外面には擬凹線を施す。口縁端部は膨らみを持ち、複合口縁部の稜はわずかに下方に突き出る。139、140は複合口縁の外面に擬凹線を持つ甕である。ともに端部は膨らみ、上端に面を持つ。139は複合口縁部の稜が横方向に突出し、頸部下には櫛状工具で波状文を施している。141は複合口縁外面に擬凹線を持たない甕である。頸部から口縁部にかけて分厚で、口縁外面はわずかに外溝して端部は丸くおさめる。141は器台受部と考えられる。口縁部に向かっては大きく外反し、外面には擬凹線を施す。復元口径22.0cmを測る。これらの遺物は塙津2期と考えて矛盾のない土器群であり、盛土の時期もこの時期を大きく降るものではないと考えられる。

第226図は、頂上平坦面の直下付近で出土した土器である。掘り下げる段階では盛土と流土の区別を明確に出来なかつたため、盛土中、流土中双方が混ざっていると考えられるが、概して掘り下げて早い段階で出土しているため流土中出土の遺物が多いと考えている。143~148は複合口縁の外面に擬凹線を施している甕である。いずれも口縁部外面が外溝し、端部が膨らんでいるものが多い。143はやや小型で、口縁端部は外方にやや引き出し気味にし、丸くおさめている。146は口縁外面がよく外溝し、複合口縁部の稜は横に引き出されている。口縁上端に面を作っている。これらは盛土中出土の遺物と近い時割のものであろう。



第226図 柳遺跡頂上高所平坦面東半・東縁盛土中出土遺物実測図 S = 1 / 3
 (131～133…S B 16' ピット F、134…S B 11北盛土中、135…S B 08東盛土中、
 136～138…平坦面、139～142…S B 14北東盛土中出土)

149～154は擬凹線のみられない甕である。149は口縁が外反して立ち上がり、端部外面には面を持つて浅い沈線を施している。153～155は概して薄つくりの甕である。口縁はまっすぐに近く外方に立ち上がり、端部にわずかながら面を作るなどの調整を施している。口径は小片のため不明瞭である。156、157は甕または壺の底部である。いずれも平底だが底部の境はやや不明瞭である。157は内面に指頃圧痕がみられる。

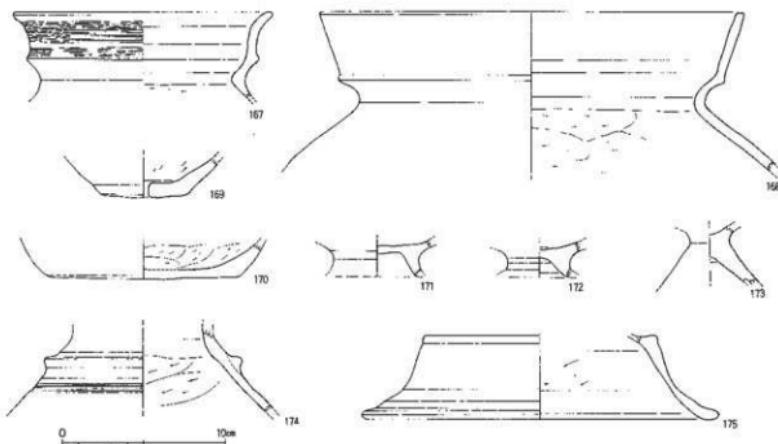
158、159は低脚壺、160～165は器台である。160、161は同一個体の可能性があるもので、比較的長い筒部と短い受け部、脚部を持つ。筒部中央にはヘラ状工具による羽状文を、受け部と脚部の外面には擬凹線を施している。163は風化が著しく不明瞭だが、擬凹線が微かに観察できる。166は柱口土器である。

これらの流土出土の土器群は、塙津2期～5期と時期幅が見られるが、この幅が頂上で掘立柱建物が存在していた時間幅と考えて矛盾はない。

頂上東側斜面流土出土遺物（第227図）

頂上直下より下方、加工段6、7よりも上方から出土し、頂上平坦面から下方に流出したと考えられる土器である。167は口縁部外面に擬凹線を施す甕である。口縁部は中途で折れ曲がるように外反し、端部はわずかに薄くなりながら丸くおさめる。168は復元口径26.2cmの大形の甕である。大形にしては薄いつくりで、口縁は外方に開いてまっすぐ立ち上がる。上端には面を設け、浅くて細い沈線を一条めぐらす。169は穿孔のある底部で、底にはやや膨らみがある。170は復元径12.0cmと広い底面を持つ、甕の底部である。

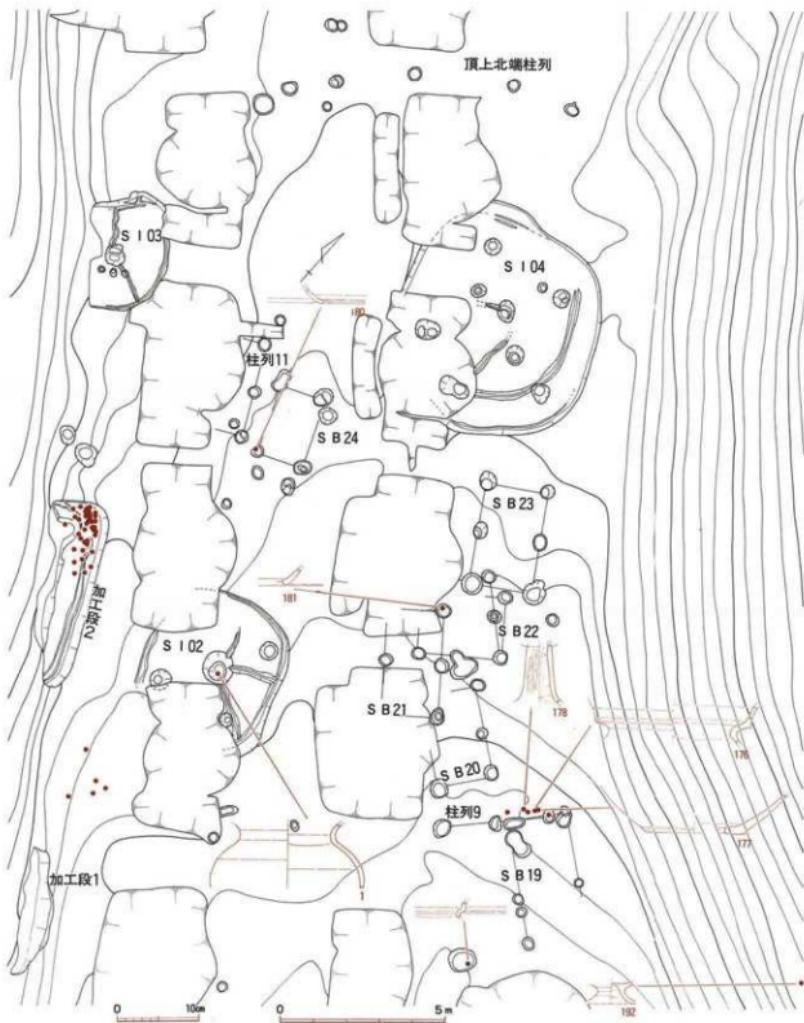
171、172は低脚壺、173はやや厚めだが器台であろうか。174、175は鼓形器台の脚部である。174は風化が著しく不明瞭だが、外面に擬凹線が認められる。175は中途で折れ曲がって開く脚で、底径が大きい割に高さが低い個体である。



第227図 柳達跡頂上高所平坦面東側斜面 流土中出土遺物実測図 S=1/3

④ 頂上北低平部の遺構・遺物

頂上高所平坦面の北側に一段下がって、再び平坦面が広がる部分を北低平部と呼ぶ。標高は約46m～47m前後で高所平坦面から1.5mばかり低い。平坦部の幅も15m前後と若干狭くなっている。この平坦面は北側に向かって約45mばかり続いて、急激に落ち込んでいく。

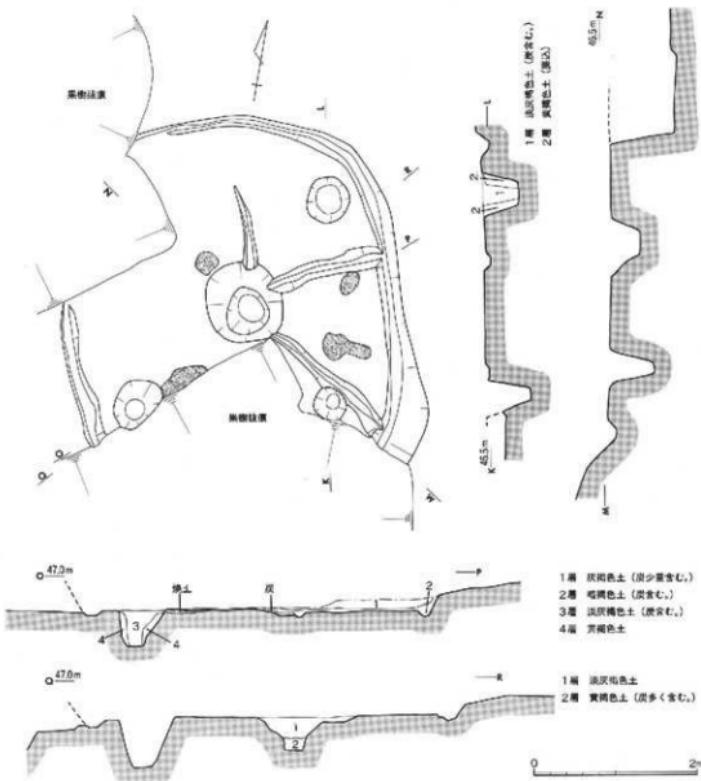


第228図 柳遺跡頂上北低平部遺構配置図・遺物出土状況 S = 1 / 150

北低平部から検出された遺構は、竪穴住居跡 3 棟 (S I 02~04)、掘立柱建物 6 (S B19~24) と掘立柱建物の片側の柱列と考えられるもの 3 (柱列 9~11)、頂上からわずかに西に下った斜面から加工段 2 ヶ所がある。注目されるのは、平坦面北端からおよそ 15m 南側で検出された弧状の柱列 (頂上北端柱列) を境にして内側 (南側) にしか遺構が検出されていないことである。あるいは北端柱列が何らかの境界を表す遺構であるかも知れない。

S I 02 (第229図)

北低平部の西縁で検出された竪穴住居跡である。遺構のかなりの部分を果樹抜き取り穴によって擾乱されてしまっているが、大要はつかむことが出来る。残存部分の壁体構造内側での規模が一辺 3.8m の隅丸方形の竪穴住居と考えられる。柱穴は 3 ヶ所しか検出されていないが、1 穴は明らかに擾乱坑で失われており、主柱穴 4 本と考えて間違いないだろう。柱間は、柱穴の中心で測って 2.45m を測る。



第229図 柳遺跡 S I 02実測図 S = 1 / 60

柱穴の直径は40~60cm、深さは45cm~60cmとしっかりしている。土層で柱痕が観察できるものもあり、15cm~20cmの幅がある。

造構の中心からやや東側にずれた位置にいわゆる中央ビットが検出されている。上端の直径が95cm前後、下端30~35cmで、中途で傾斜角度が変わって二段掘り状になっている。ビット内の下層には炭を多く含んでおり、周囲には炭が広がっていた。中央ビット内から弥生土器甕が出土している(第230図1)。

中央ビットから少なくとも三方向に、放射状に溝が検出されている。この溝は幅が20cm前後、深さは10cm以下と狭く浅いもので、レベルは中央ビット側から壁に向かってわずかに高くなっているようだ。床面には4ヶ所、焼けて赤変した部分がある。

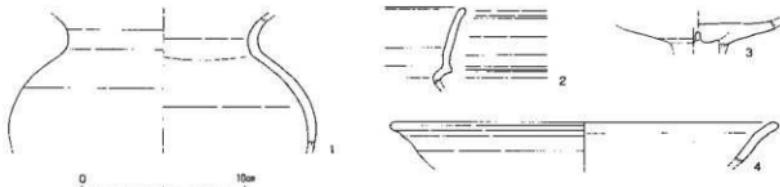
S I 02出土遺物(第230図) 1は中央ビット内から出土した甕である。比較的肩の張った胴部から外反して口頭部が立ち上がるが、口縁部は欠損しており、複合口縁かそのまま単純におさまる口縁かは不明である。器面は風化しており、調整等は不明である。淡黄褐色を呈す。2~3は覆土内出土の土器である。2は甕口縁部の小片である。複合口縁部の稜はやや横方向に突き出し、口縁は外に開いてまっすぐ立ち上がる。端部は若干外につまみ出し気味である。白っぽい淡黄褐色を呈す。3は高环の环部と脚部の接合部分である。环部の底は円盤を充填しており、底の中心に小孔がみられる。4は鼓形器台の端部であろうが、上下は不明である。

S I 02の時期は、中央ビット出土の1が判断に適した出土状況であるが、口縁部がなく判断しがたい。ただ、覆土出土の土器は塩津5期の特徴を持っており、豊穴住居跡の時期もその時期で大過ないと思われる。

S I 03 (第231図)

頂上北低平部の西縁、北端柱列群に程近い位置で検出された豊穴住居跡である。斜面側を果樹園造成で破壊されているため全容は不明だが、やや不整形の隅丸方形を呈すものと考えられる。主柱穴とおぼしき柱穴が検出されなかったが、外周に壁体溝がめぐることや中央ビットとそこから派生する溝の存在等から豊穴住居跡と判断した。規模は残存部分の壁体溝内側で、約3mと小形の住居跡である。

いわゆる中央ビットは床のほぼ中央で検出された。上端で60センチ前後の形を測り、2段掘り状、深さは15センチと一般例と比べて浅い。中央ビットから少なくとも2方に向かって幅10~15cm程度の浅い溝が検出されている。中央ビットの南側には、直径20cm前後の小ビットが3穴、15cmほどの間隔を開けて並んで検出された。ただ、両側のビットは5cm以下の深さで柱穴とは考えにくい。中央



第230図 柳遺跡S I 02出土遺物実測図 S = 1/3 (1…中央ビット内、2~4…覆土内出土)

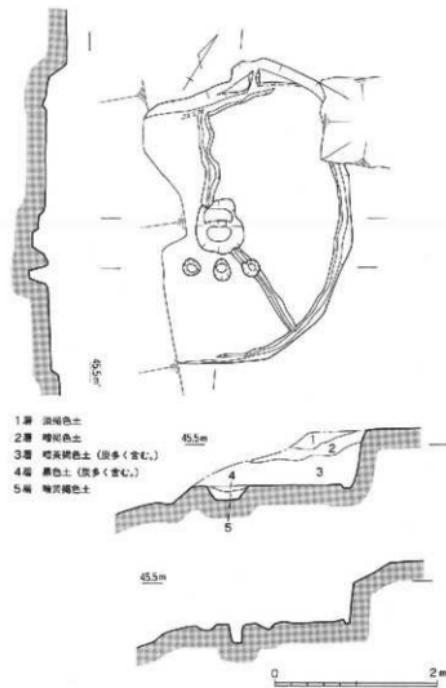
のピットは約20cmの深さがあり、柱穴の可能性もあるが、対応する柱穴は他には見あたらない。規模からして2本主柱穴の可能性もあり、あるいは中央ピット北側の柱穴を検出できなかった可能性も捨てきれない。

北側の壁体溝の外側に底辺1m、奥行き20cm程の三角形の平坦面があり、中央を壁体溝から続く溝が横切っている。S I 03の床面と同一平面であり、住居跡の付属施設の可能性もあるが、詳細は不明である。

S I 03遺物出土状況（第232図） S I 03内に堆積した3層暗茶褐色土の上面から内部にかけて、かなりの土器がまとまって出土している。土器はおよそ中央部あたりを中心に出土した。かなり小片となっていたが、個体別に比較的まとまって出土しており、一般的な流入した土器あり方とは異なっている。覆土内の出土としては完形に近い個体があり、また器種として高環や台付き鉢などが多いことなどからも、ある程度住居が埋まった時点で土器を投げ込んだ状況も想定できるかも知れない。状況としてはS I 01に近い出土状況といえる。

S I 03出土遺物（第233図、第234図）

1～3は複合口縁の甕である。1は口縁がわずかに折れ曲がって外方に開き、口縁端部は丸くおさめている。複合口縁部の稜は横方向に突き出している。脚部は2.5mmとかなり薄く、外面には櫛状



第231図 柳遺跡S I 03実測図 S = 1 / 60

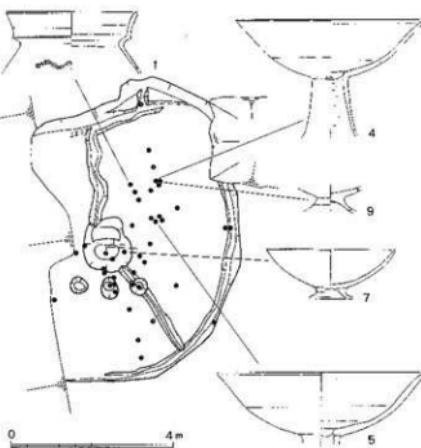
工具による振幅の余り大きくなない波状文が見られる。復元口径16.2cmで白っぽい淡褐色を呈す。2は口縁が外方に向かってほぼまっすぐ立ち上がる甕である。風化により表面の剥落がひどく、口縁端部の様相など詳細は不明だが、複合口縁部の稜は横方向に突き出す。復元口径18.4cmで淡褐色を呈す。3は復元口径14.6cmのやや小形の甕である。口縁部はほぼまっすぐ立ち上がり、風化のため詳細は不明ながら複合口縁の稜は横方向に出ているようである。淡黄褐色を呈す。

4～6は高環である。4は薄手で外方に開くボール状の環部に円筒状の脚が付く当地に通有の高環である。環部は23.5cm、深さ6.5cmとやや深めで、底は円盤を充填し、中心に小孔がみられる。中央よりやや下方に微妙に稜がみられ、その上方はわずかながら外湾気味に立ち上がる。脚部は付け根部分の径が4.4cm、下方に向

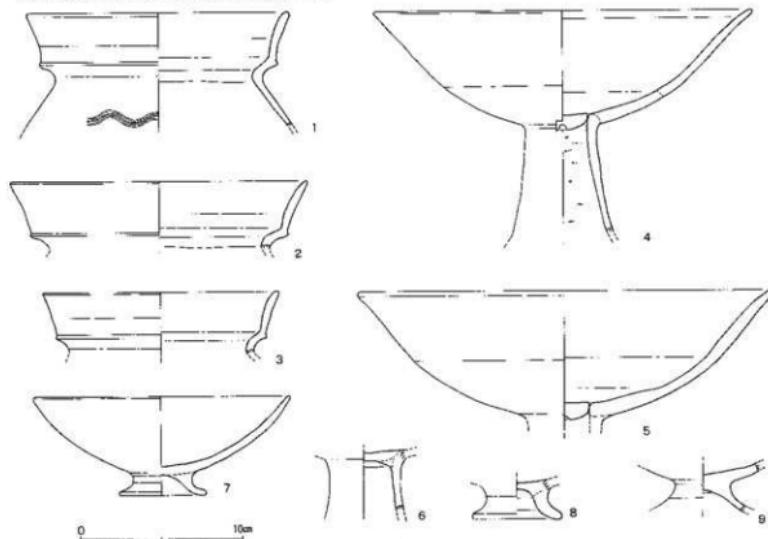
かってわずかに開いていく。脚端に向けては失われているが、この先開いて端部に向かうものと思われる。内面は横方向のヘラケズリを施し、器壁は3.5mmと薄い。脚部と環部の接合は、脚部の外側に環部を接合しているようだ。淡褐色を呈す。5は4とほぼ同形の高环の环部だが、口径が25.8cmとやや大形である。4と同様环部の中央付近に微かな稜を持ち、そこから上方はわずかに外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部も同様、円盤充填で中心に小孔がある。器壁は6~8mmと口径の差を反映してか4よりやや厚めだが、破損面から測定される脚部の径は4.4cmと、4とほぼ同大である。淡黄褐色を呈す。

6は高环の脚部上半である。环部の底は円盤充填と考えられるが、脚の内側が丁寧になでられており、底部下が平坦になって中心部に通常みられる小孔はない。脚部は円筒形で、接合部付近の径4.4cmと4、5とほぼ同大である。白っぽい淡褐色を呈す。

7は浅いボウル状の环部に低い脚台の付く低脚环である。环部は口径15.9cm、深さ4.3cmと、この時期の通有の低脚环に



第232図 柳遺跡 S I 03遺物出土状況 S = 1/120 遺物は 1/6



第233図 柳遺跡 S I 03出土遺物実測図(1) S = 1/3 (1~9…覆土内出土)

比べて深い印象のある個体である。環部の器壁が3~5mmと薄手で、端部は薄く丸くおさめる。脚台は底径5.5cm、高さ1.3cm、接合部の径3.6cmで、端部に向けて水平に近い角度で開き、端部は丸くおさめる。淡黄褐色を呈す。8、9は低脚環であるが、9は脚部の長さが比較的長い個体である。

第234図10は白っぽい小穢を含む石材の砥石である。不整の直方体状で両端は破損している。一面(図左面)にツルツルになった研面がみられるが、「使い減り」は見られず、さほど長期間は使われなかつたものと考えられる。火を受けたらしく、全体的に赤変しているが、特に強い火を受けて黒化している面(図右面)がみられる。

これらの遺物の特徴から、S I 03の時期は塩津5期と考えられる。

S I 04(第235図)

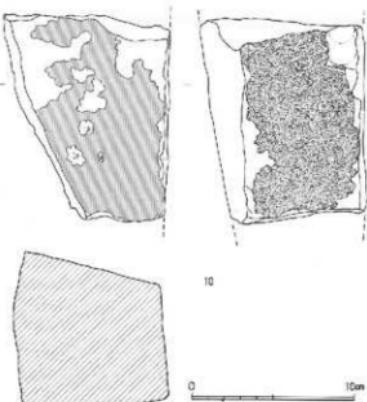
頂上北端柱列に近く、平坦面の東寄りで検出された竪穴住居跡である。S I 02の約8m北側、S I 03の7m東側にあたる。造構の西側2ヶ所を果樹抜き取り穴で破壊されているが、大要は把握可能である。

竪穴住居跡の壁面の内側にさらにもう一廻り壁体溝が検出されたことから、少なくとも1回建て替えが行われたことが明らかになった。両者の前後関係は、内側の壁体溝から壁面が立ち上がりつてないことから外側が新しく、この建て替えが拡張であったことがわかる。よって内側をS I 04古、外側をS I 04新と呼ぶ。

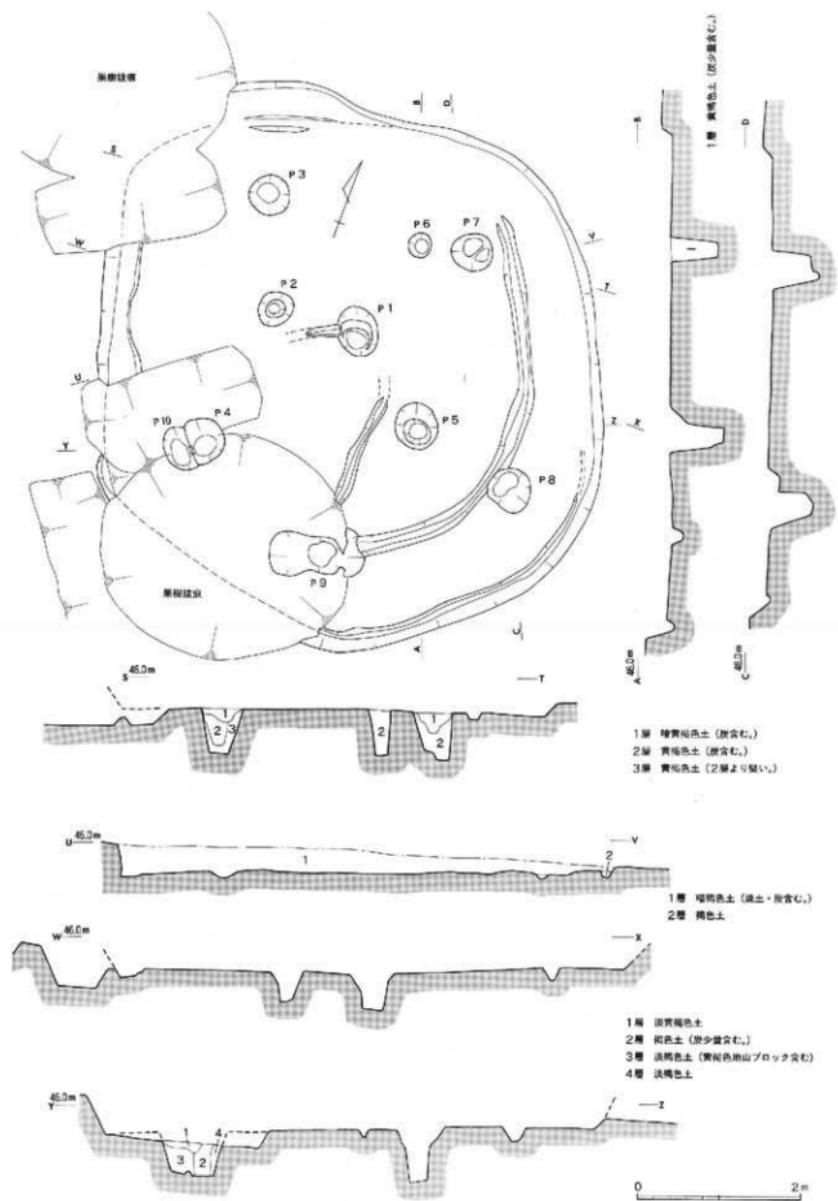
S I 04古は、北側の壁体溝が検出できていないが、残存する壁体溝と柱穴配置から4本主柱穴の隅丸五角形を呈すものと考えられる。ただ壁体溝は全体的に丸みを帯びており、また柱穴配置もP 3~P 6(2つの柱穴が重なったP 7の可能性もある。)を主柱穴とすれば、柱穴配置は正方形ではなく不整な方形で、全体的に整った形ではないようである。

規模は両端がつかめる東西辺の床面で4.6mを測る。柱穴の深さは55~65cmとしっかりしている。上層で柱痕がわかる例もあり、その幅は20cm前後である。いわゆる中央ピットは床面のほぼ中央で検出されたP 1が対応する可能性が強いが、そうであれば中央ピットはS I 04新と同じ位置となる。ただ中央から西寄りに検出されたP 2が対応する可能性もあり、そうであればかなり中央からずれた位置になる。P 1が深さ約40cm、P 2が約35cmと、ともに柱穴よりもやや浅く、当該期の中央ピットの一般例と同様である。P 1からは少なくとも2方向に向かって幅20cm前後の細い溝が伸びている。ただ溝の外側の先端は未検出で、S I 04古の壁面に続くのか、S I 04新の壁面に続くのかは明かではない。

S I 04新は残存する壁面と柱穴配置から、隅丸五角形を呈すものと考えられる。壁面の肩からの



第234図 柳遺跡S I 03出土物実測図(2) S = 1/3



第235図 柳遺跡 S-104実測図 S=1/60

深さは、残りの良い西側で35cm前後であるが、これは周囲が果樹園造成で削平されている影響と考えられ、本来はもっと深かったものと推測される。内部には炭や焼土の混ざる暗褐色土が一樣に堆積していた。

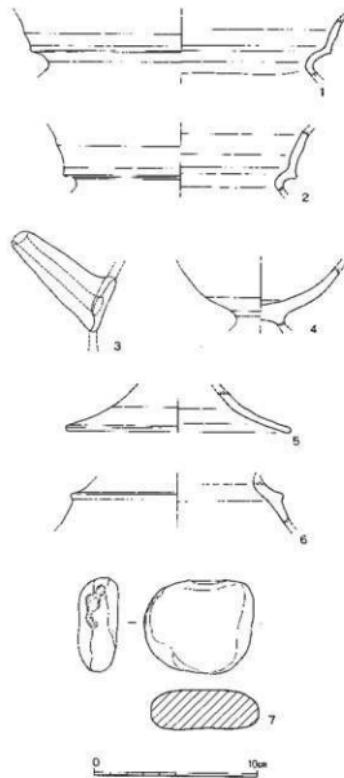
P 7～P 10がS I 04新の主柱穴となることは間違いないと考えられるが、北西側の柱穴はS I 04新と同じ柱穴（P 3）を使用しているかも知れない。あるいは果樹抜き取り穴で失われている可能性も比定できない。柱間は2.2m～3mとばらつきがあり、S I 04古と同様、不整な形態であったろう。柱穴は上端の直径が50cm前後、深さは50～55cm前後で、S I 04古の柱穴より若干深い。いわゆる中央ピットは、P 1が対応すると考えられる。

S I 04出土遺物（第236図） 遺物はP 1、P 2からと覆土内から出土している。5はP 1から出土した脚部片である。端が大きく開いて丸くおさめた端部にいたり、復元径は14cmを測る。高坏の脚部と考えられるが、アクセントがあまりないままに上方に立ち上がっていくので台付き鉢の脚部の可能性も捨てきれない。白っぽい淡褐色を呈す。7はP 2から出土した叩き石である。偏平な河原石の一端に敲打痕がみられる。

1～4、6は覆土内出土の土器である。1は復元口径が20cm前後になる中形の甕である。器面が風化しているため詳細は不明だが、厚さが現状で3～4mmと薄い土器である。複合口縁部の稜は風化してすり減った状態だが、横方向に突き出す気配である。口縁部は外方に立ち上がるが、あまり外反はしないようである。淡黄褐色を呈す。2は復元口径16cm前後となる甕である。複合口縁部の稜はやや下向きの横方向に突き出し気味である。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は失われている。淡黄褐色を呈す。

3は注口土器の注口部である。先端部はわずかに失われているが、注口の長さが6cm前後で7mm前後の穴が貫通している。白っぽい淡褐色を呈す。4は低脚坏もしくは小形の台付き鉢と考えられる。脚部と坏部の接合部の径2.9cmと小形で、坏部はボール状を呈す。口縁端部は失われている。6は鼓形器台の脚台部と考えられるが、風化のため調整等が不明であり、受け部の可能性もある。筒部と脚台部との境の稜は、やや横方向に突き出している。淡橙褐色を呈す。

S I 04の時期は、5期以降一般的となる高坏もしくは台付き鉢がピット内から出土していることや、覆土出土の土器の特徴から、塩津5期と考えて人過ないであろう。



第236図 S I 04出土遺物実測図 S = 1/3

加工段2（第237図）

頂上北低平部の西縁、肩部から西側斜面にかけて検出された遺構である。S I 02のおよそ2m西側、加工段1の5m北側にある。後世の果樹園造成の際に、西側の大部分を削り取られてしまつており、遺構の一部しか残存していない。ただ斜面上方側（東側）の壁面はほぼ全体が残つておらず、長さが5.7m程度の壁が直線的な加工段であることがわかる。豊穴住居跡の可能性もあるが、床面で検出された溝が壁際からやや離れていることや、壁体溝にしてはやや幅が広いことから、加工段と判断した。

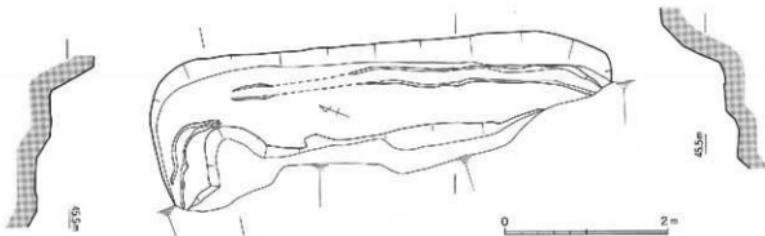
床面は検出面の肩から深さ80cm程度で検出され、残りの良い北側でも幅1.7mしか残存していない。壁際から5~20cm離れて、幅20cm前後の浅い溝が検出されている。北側に向かっては検出されていないが、本来は続いていたものだろう。またこの溝の内側にも溝が廻るらしく、北側の壁際には一部L字状に溝が検出されている。遺構の掘り直し等があつたことを示すものかも知れない。

また壁際から70cm程西側に、深さ15~20cmの深さで一段低く落ち込んでいる部分が検出された。この段は外側の壁面とほぼ平行して同様の形をしており、ほぼ水平な面を持っている。この内部には、灰白色の粘土が堆積しており、あるいは上段の床面を形成するときの盛土かも知れない。そうであるならば、検出された壁面は拡張された壁面の可能性が高くなる。

なおこの加工段2の南側、加工段1、S I 02に囲まれた付近からは遺物が集中して出土している（第228図、遺物は第211図30）。調査では検出されなかつたが、何らかの遺構が存在していた可能性は高い。

加工段2出土遺物（第238図） 遺物は北側のコーナー付近を中心に出土している。1、2、11は床面から出土した遺物である。1は複合口縁の甕である。復元口径21.0cm、口縁部は全体が外反してよく開いており、外面には細い擬凹線がみられる。擬凹線を施した部分がよく外湾しており、その分端部付近が膨らんだ形となって、丸くおさめている。複合口縁部の稜はほとんど突出していない。頸部から胴部にかけても、口縁部外面と同様の細かな平行沈線が施されている。淡黄褐色を呈す。2は分厚で小形の甕である。口縁部外反して開き、複合口縁部の稜は横方向に出ている。口縁外面はヨコナデ、端部は失われているが、復元口径は13cm前後になろう。胴部外面には3本一単位の大柄な柳状工具で刺突を施している。暗褐色を呈す。

11は床面出土の鉄器である。現状で長さ2.0cm、幅1.5cm、厚み0.25cmの先端が尖り気味の不整三角

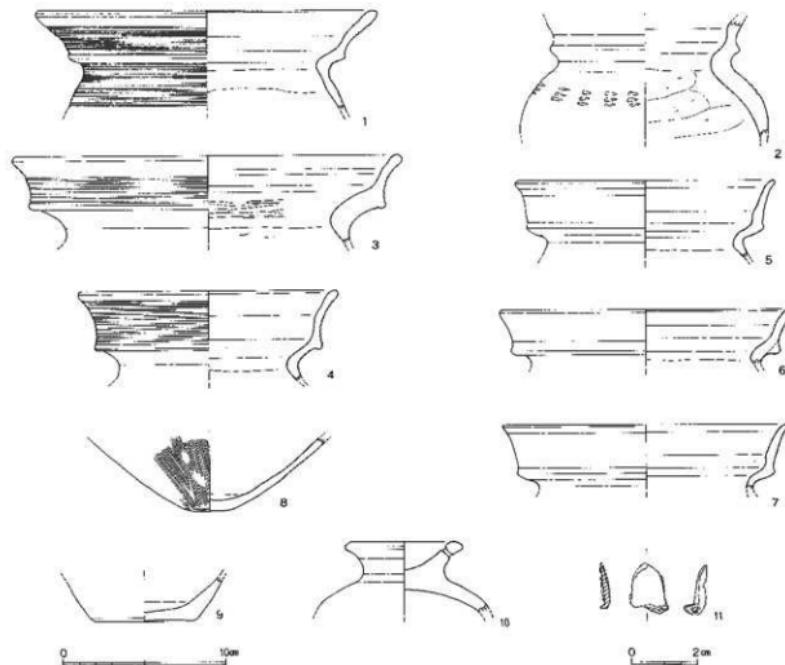


第237図 柳遺跡加工段2実測図 S=1/60

形を呈す。基部はほぼ直角に折れ曲がっており、その部分に木質が観察される。形態から鉄錆の可能性があるが、折れ曲がりの原因は不明である。

3~10は覆土内出土の土器である。3、4は外反する口縁部の外面に擬凹線を施す蓋である。3は小片のため口径の復元値は不明瞭だが、大形の蓋である。口縁部と頸部の間の厚さが1.2cmとかなり厚い個体で、複合口縁部の稜はわずかに下に伸びる。口縁部は中途でわずかに外方に折れ曲がり、端部は丸い。外面の擬凹線は線間が1.5mmと比較的幅が広い。暗褐色を呈す。4は復元口径16.0cm、口縁が中途から折れ曲がるように外反する要である。口縁部の長さが3.8cmと、口径の割には複合口縁部が長い印象を受ける。複合口縁部の稜はわずかに下に伸びており、端部は丸い。厚さは4~5mm前後で薄い。淡黄褐色を呈す。

5~7は口縁外面に擬凹線がみられない蓋である。5、7はよく似た個体である。口縁部が外方に開いてほぼまっすぐ立ち上がり、端部に向かって次第に器壁が薄くなる。口縁端はわずかに外方にお曲げるようにして端部を丸くおさめる。複合口縁部の稜はわずかに横方向に伸びる。6は口縁がわずかに外反して立ち上がる蓋で、復元口径18.0cmを測る。8は、径3cmほどのわずかな平底を残す蓋の底部である。外面にはハケメが見られる。9は径6cmの明瞭な平底の蓋もしくは蓋の底部である。10は蓋である。つまみ部の口径7.2cm、接合部の径4.9cm、端部に向かって外反気味に立ち



第238図 桶遺跡加工段2出土遺物実測図 S=1/3、11は2/3 (1・2…床面、3~11…覆土内出土)

上がり、端部は外方にわずかにつまみ出すようにしている。端部のやや下方に小孔が開いている。身部は丸みを帯びており、端部は失われているものの、さほど径は大きくないうだ。大きさの割に全体的に厚い印象がある。

加工段2の時期は、床面出土の1は塩津2期～3期と考えられるが、他の覆土出土遺物も考え合わせて、塩津3期と判断している。

S B19 (第239図)

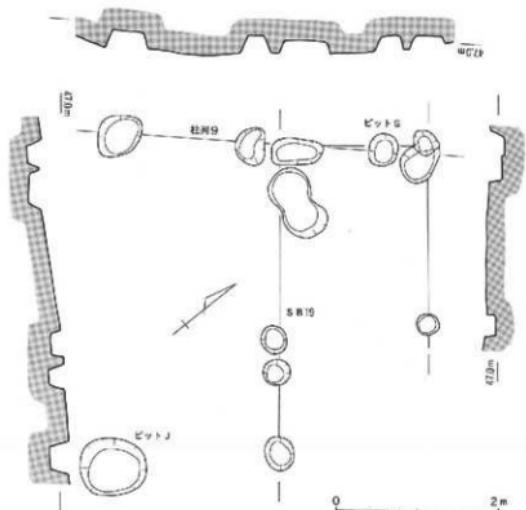
頂上北低平部の南東側、高所平坦面から下りた辺りの東縁部で柱穴群が検出されている。そのうち東側で検出された5穴が掘立柱建物を構成しているようである。柱間は柱穴の中心で測って短辺側(梁間側)が1.85m、長辺側はばらついていて、2.3mと1.5mを測り、よって3.8m×1.85mの建物が復元できる。建物の長軸方向はN52°Wで、高所平坦面の布堀建物群の中ではS D06とはほぼ同じ方向である。柱穴は直径25cm～40cm、深さは検出面から15～25cmである。柱穴から遺物は出土していない。

柱列9 (第239図)

S B19の北西辺に重なって検出された柱穴3穴の並びである。北西側は対応する柱列が流出したものとすれば、本来2間×1間の掘立柱建物を構成していた可能性もある。柱列方向はN43°EとS B19とはわずかにずれ、高所平坦面の布堀建物群ではS B02とほぼ同方向である。柱間は1.65mで長辺が3.3mの建物となる。柱穴は直径35～50cm、深さは検出面から20cm前後である。

北東端のピットGから土器片が出土している(第243図179)。小片のうえ風化しているため詳細は

不明だが、外面に擬凹線の見られない甕である。複合口縁部の稜はほとんど突き出さない。あえて時期をいえば塩津3期～4期であろう。

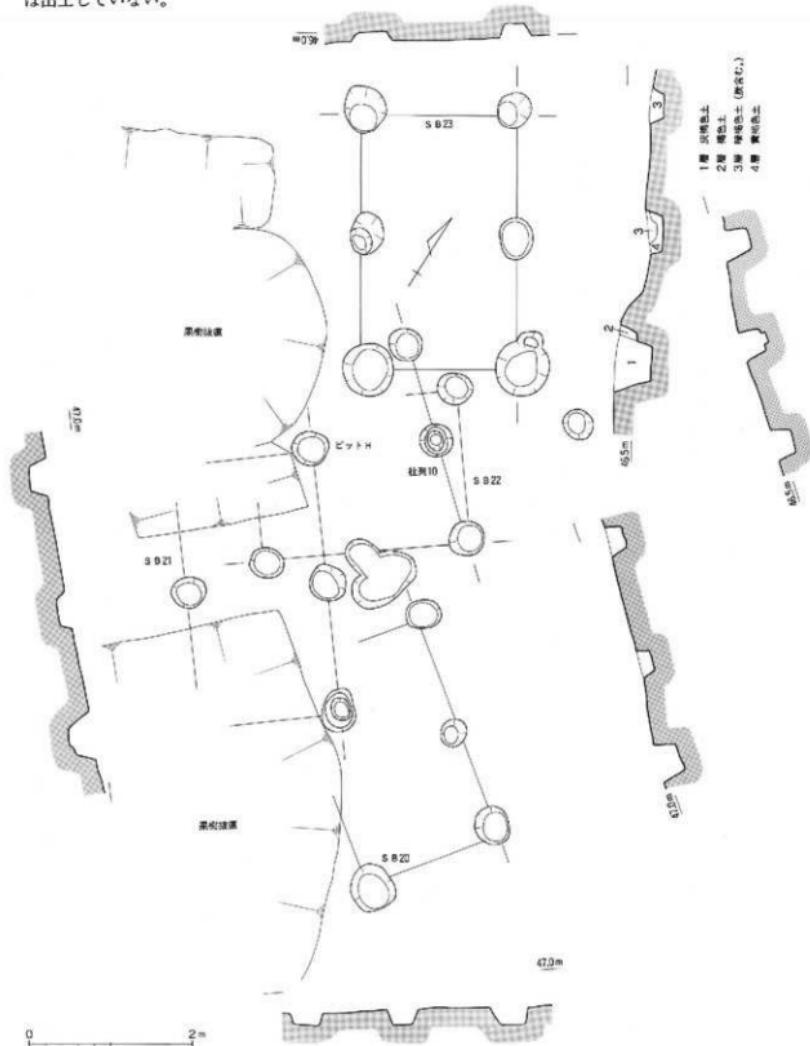


第239図 柳遺跡 S B19・柱列9 実測図 S=1/60

S B20 (第240図)

頂上北低平部の東寄り、柱列9の西側に隣接して検出された建物跡である。南西側の柱列のうち2穴が果樹抜き取り穴によって失われているが、1間×2間の掘立柱建物跡と考えられる。柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.45m、短辺側が1.75m、よって建物規模は長辺

(桁行) 2.9m、短辺(梁行) 1.75mの建物となる。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向とほぼ同方向で、N52°Wを測り、高所平坦面の布堀建物群ではSD06に近い方向である。柱穴は直径35cm~55cm、深さは検出面から15cm~30cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。柱穴から遺物は出土していない。



第240図 柳遺跡 S B20・S B21・S B22・S B23・柱列10実測図 S = 1/60

S B21 (第240図)

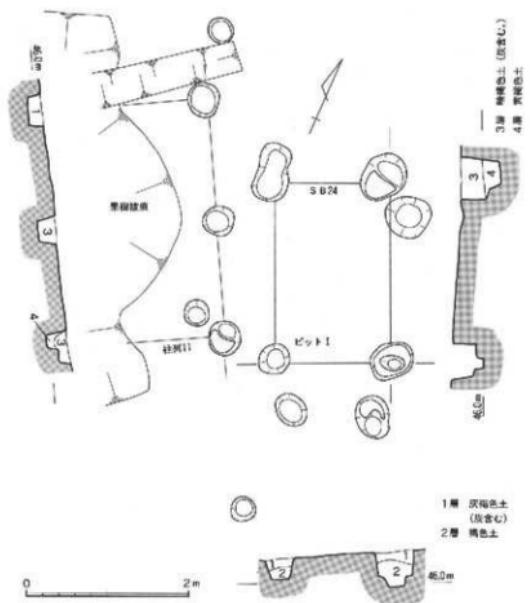
頂上北低平部の東寄り、S B20の北西側に重なって検出された建物跡である。西側の柱列のうち両端の2穴が果樹抜き取り穴によって失われているが、1間×2間の掘立柱建物跡と考えられる。柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.65m、短辺側が1.75m、よって建物規模は長辺(桁行)3.3m、短辺(梁行)1.75mの建物となる。建物の長軸方向は、尾根の長軸方向とはほぼ同方向で、N 38° Wを測るが、S B20とは方向を違える。高所平坦面の布堤建物群では方向の一一致する遺構はないがS B01に比較的近い方向である。柱穴は直径40cm~55cm、深さは検出面から10cm~30cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。

北端のピットIIから甕もしくは壺の底部片(第243図181)が出土している。時期の詳細は不明だが、やや不明瞭ながらも平底を保っており、弥生時代後期末頃のものであろう。

S B22 (第240図)

頂上北低平部の東寄り、S B21の北側に重なって検出された建物跡である。北側の柱列が果樹抜き取り穴によって失われているが、掘立柱建物跡と考えられる。南側の柱列は、短い間隔で3本の柱が並んでいるが、北側では中央の柱穴は検出されておらず、1間×2間となるか、1間×1間となるか判断しかねる。建物規模は長辺(桁行)2.6m、短辺(梁行)1.90mの建物となる。建物の長軸方向は、S B20とはほぼ直交しており、N 54° Eを測る。柱穴は直径40cm前後、深さは検出面から

15cm~25cm前後であるが、本来はもっと深かったであろう。
柱穴内から遺物は出土していない。



第241図 柳遺跡 S B24・柱列11実測図 S=1/60

柱列10 (第240図)

S B22の北東辺に重なって検出された柱穴3穴の並びである。南西側の対応する柱列を検出できなかったものとすれば、本来1間×2間の掘立柱建物を構成していた可能性もある。柱列方向はN 48° WとS B22とは若干ずれ、S B20とはほぼ同方向である。柱間は1.25mで、掘立柱建物となれば長辺が2.5mとなる。柱穴は直径40cm前後、深さは検出面から25cm~40cm前後である。柱穴内から遺物は出土していない。

S B23 (第240図)

頂上北低平部の東縁、S B22の北側に隣接して検出された掘立柱建物跡である。1間×2間の建物で、柱間が柱穴中央で測って長辺側が1.60m、短辺側が1.95m、よって建物規模は長辺(桁行)3.2m、短辺(梁行)1.95mの建物となる。建物の長軸方向はN32°Wで、S B21、S B22とわずかにずれている。柱穴は直径40cm～65cm、深さは検出面から10cm～55cm前後とばらついているように見えるが、これは南短辺側の検出面が高いためで、底面のレベルは大差がない。柱穴から遺物は出土していない。

S B24 (第241図)

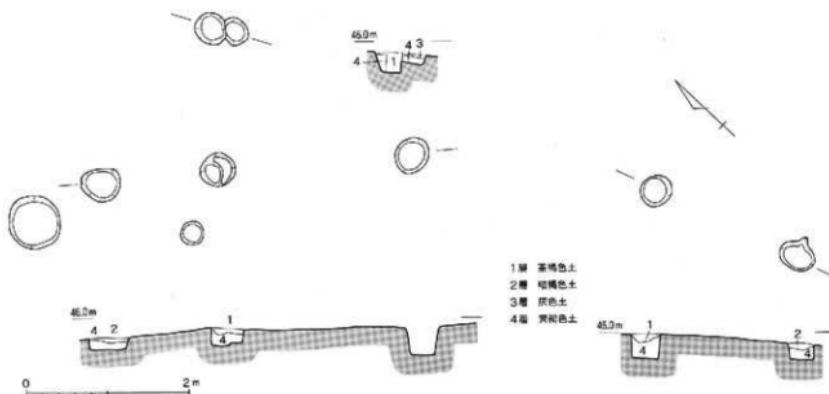
頂上北低平部の中央やや西寄り、S I 04の南側で検出された掘立柱建物跡である。2.25m×1.45mの1間×1間建物で、柱穴の直径は40cm～55cm、深さは検出面から25～50cmを測る。建物の長軸方向はN24°Wで柱列2とはほぼ同方向である。南端のピットIから器台の端部かと思われる弥生土器片が出土している。時期の詳細は不明だが、弥生時代後期末頃と見て大過ないだろう。

柱列11 (第241図)

S B24の西側に隣接して検出された柱穴3穴の並びである。西側の対応する柱列が果樹抜き取り穴によって失われたものとすれば、本来1間×2間の掘立柱建物を構成していた可能性もある。柱列方向はN27°WとS B24とはわずかにずれている。柱間は1.50mで、掘立柱建物となれば長辺が3.0mとなる。柱穴は直径35～45cm、深さは検出面から15cm～25cm前後である。柱穴内から遺物は出土していない。

頂上北端柱列 (第242図)

平坦面北端からおよそ15m南側で検出された弧状の柱列である。6穴の柱穴がほぼ弧状に並び、そのほかに3穴の柱穴が検出された。柱穴の直径は30～65cm、深さは検出面から15～35cmを測る。

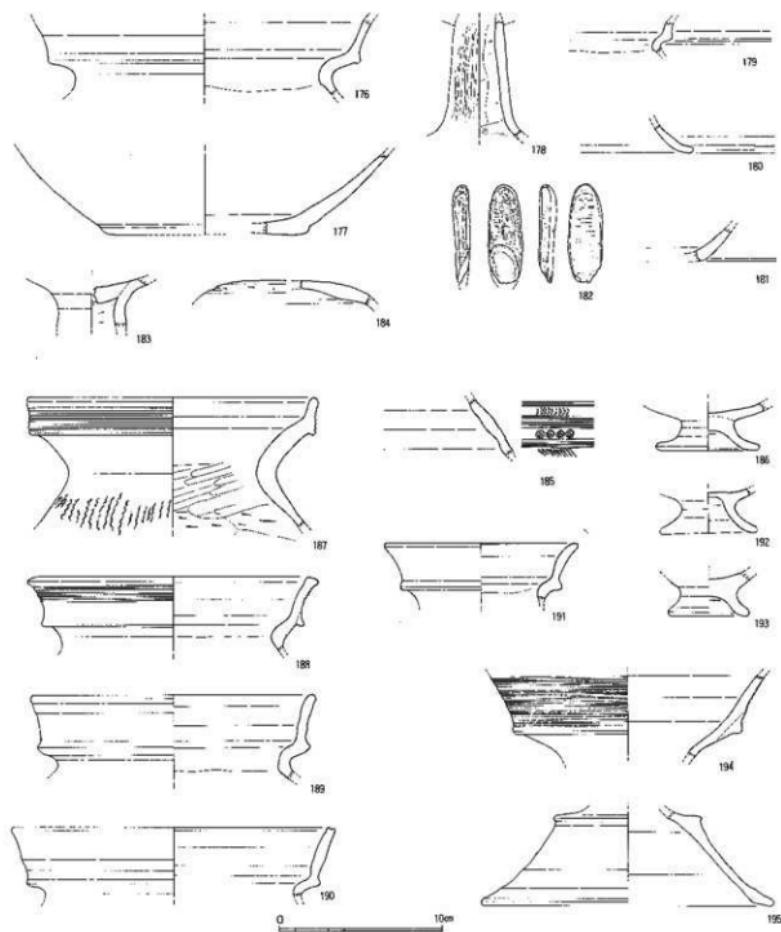


第242図 柳遺跡頂上北端柱列実測図 S = 1 / 60

掘立柱建物や竪穴住居を構成するような配置は見られず、この柱列を境に北側には全く遺構が検出されていないこと合わせて、柵列等の境界表示的な遺構の可能性も考慮する必要があろう。柱穴内から遺物は出土していない。

頂上北低平部出土遺物（第243図）

176～178はS B 19の北側で集中して出土した遺物である。176は口縁が外反して立ち上がる型であ



第243図 柳遺跡頂上北低平部と東側斜面出土遺物実測図 S = 1 / 3
 (176～178… S B 19北、179…柱列 9 ピット G、180… S B 24 ピット I、181… S B 21 ピット H、
 182… ピット J、183～184…頂上平坦面、187～188…東斜面頂上底下、189～195…東側斜面出土)

る。複合口縁部の稜は斜め下方向への拡張を意識しているようだ。口縁端部は失われているが、復元口径22cm前後の中形の壺である。177は壺または壺の底部である。胴部と底部の境には段があり、復元底径が13.0cmとなる明瞭な平底である。178は高坏の脚柱部である。わずかに下方に向かって開く円筒形で、屈曲して大きく開く複部に向かう。接続部付近の径が3.0cm、外面はヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリが見られる。これらの遺物の時期は塩津4期～5期と考えられる。

179、180、181は、それぞれ柱列9、S B21、S B24の柱穴内から出土した土器で、詳細は各造構の項で述べた。182はS B19の南で検出されたビットJから出土した小形の円碟である。一端が欠損しているが、長さ6.1cm、幅2.1cm、厚さ1.05cmの薄く細長い自然石のはば全面を丁寧に磨いている。性格は不明だが、日常的に使う道具類とは考えにくい。183、184は頂上平坦面で出土した遺物である。183は円盤を充填した高坏である。底部下には小孔が開き、上方からもその小孔に向かって穴が開けられている。184は須恵器である。蓋が杯身で、天井にはヘラケズリが見られる。

185、186は平坦面東側の頂上直下から出土した土器である。185は壺の胴部である。平行沈線の間に刺突を連続して施して装飾しており、上段は半截竹管状の工具、中段は巴状のスタンプ、下段は貝の復縁もしくはハケメ原体状の工具を押捺している。外面には赤色顔料を塗布している。胴部に突帶が付く台付き壺の可能性もある。186は低脚坏である。脚台部の底径6.0cm、高さ1.8cmで、裾が水平に近く広がって、端部は丸くおさめている。

187～195は東側斜面下方から出土した土器である。187は複合口縁部の外面に擬凹線を施す壺である。口縁はほぼ直立し、余り長く伸びずに端部は丸くおさめる。複合口縁部の稜はわずかに下方に伸びている。頸部は「く」字状に緩やかに屈曲しており、大柄な貝殻復縁による刺突が施されている。復元口径17.6cm、頸部内面にはヘラミガキが見られる。188は複合口縁部の外面が外反して擬凹線がみられる壺である。復元口径18.0cmを測り、擬凹線は上半のみに施され、口縁端には面がみられる。189～191は口縁部外面に擬凹線のみられない壺である。189は複合口縁の稜が横方向に突出し、口縁がやや外方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部はわずかに外方につまみ出すように処理している。190は復元口径20.0cmを測る中形の壺である。複合口縁部の稜はわずかに横方向に突き出し、口縁はやや外方にはまっすぐ立ち上がる。口縁端部上端には面を設け、そこに1条の沈線がみられる。白っぽい淡褐色を呈す。191は復元口径12.0cmの小形の壺もしくは壺である。口縁は外湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。

192、193は低脚坏である。192は薄手で、脚の裾が開いて丸くおさめる脚端に至る。193は底が1.05cmと厚く、底径4.7cmの小形の個体である。194は、鼓形器台の受け部と考えられ、外面には擬凹線がみられる。表面が風化し、調整が不明瞭なため、天地が逆転する可能性もある。195は鼓形器台の脚台部と考えられる。筒部は失われているが、比較的筒部の径の小さいタイプと推定される。復元底径18.0cmである。

これら東側斜面出土の土器は頂上平坦部から流出したもののが可能性が高い。時期は幅あり、塩津1期から5期まで含まれる。187は柳遺跡では数少ない塩津1期の土器であろう。185も1期まで遡る可能性がある。188、194が塩津2期、190が塩津5期、その他が3期～4期に属するものであろう。

2 節 東斜面の調査

①配置の概要

柳遺跡の頂上は、平坦面が広がっているが、肩部から東側は一転急な斜面となる。調査はこの急な斜面全体を対象とし、ほぼ全域から遺構が検出された（第244図）。調査区域は、道路が標高の高い部分を大きく切り割る計画のため、下方に向かって幅が狭くなり、標高23m付近を最小の幅としてその下方はまた幅が広くなっている。

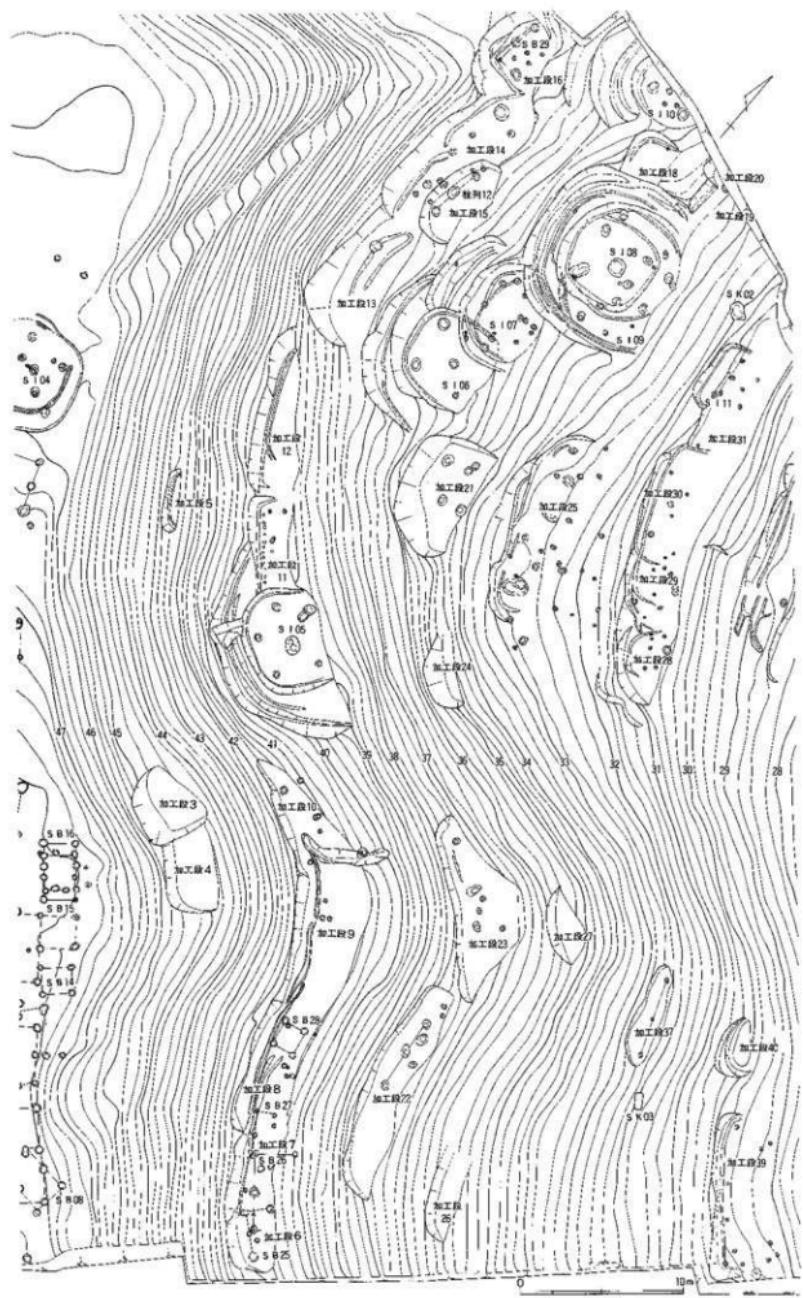
地形を詳細に見ると頂上直下のレベルが7～8m下方付近までは、30°を超えるかなりの急斜面である。それでも多少なりとも角度の緩い部分に加工段が作られている（加工段3～4）。頂上からレベルが約9m下方付近から下は、尾根・谷の地形がやや顕在化してくる。調査区の中央やや南寄りに走る尾根線から北側は地形が弧状にくぼみ、傾斜が比較的緩やかになることから、特に遺構が集中して検出されている。

遺構（弥生時代後期後半～終末期）は前述のように、調査区のほぼ全域から検出されているが、それらは全くアトランダムに分布するのではなく、その配置に一定の傾向が見て取れる。ひとつは、ほぼ同一のレベルに並ぶように遺構が検出されていることである。たとえば、標高41m付近の加工段6～10、標高39m付近のS105、加工段11・12、標高37m付近の加工段13～15・22・23、標高34～35mのS106～10・加工段21・24・26・27、標高32～33m付近の加工段25・37、標高27m付近の加工段38・41・42などがそうである。急斜面だけに施設同士の移動を考慮した配置かも知れない。

もうひとつは、竪穴住居跡が尾根筋から北の標高の高い位置にしか検出されていないことである。

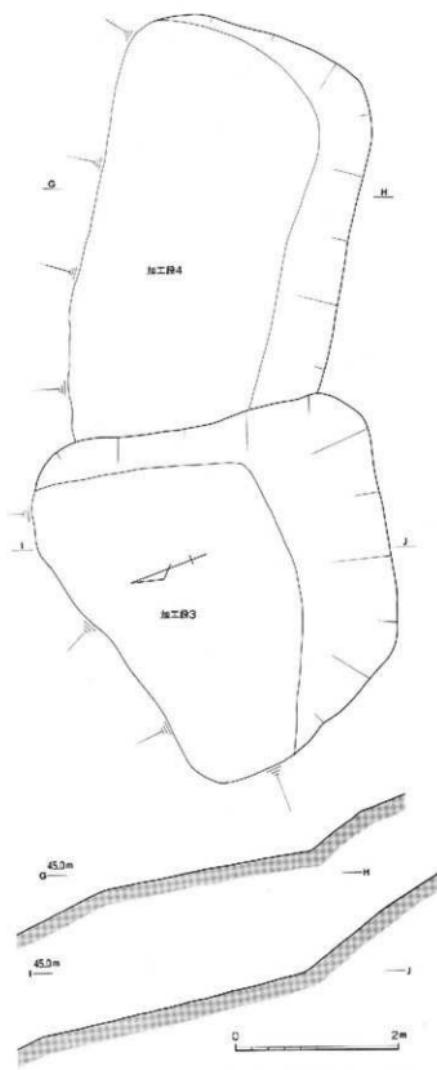


東側上空から見た柳遺跡



第244図 柳遺跡東斜面上半の遺構配置図 S=1/300

つまり標高35m~39mの範囲にのみ6棟の竪穴住居が重なりながら検出されているのである。このことは言い替えればそのほかの部分で検出されている遺構の大部分が加工段であることを示し、従来知られていた弥生時代の集落に比べて竪穴住居跡の割合がかなり低いとも言える。



第245図 柳遺跡加工段3・加工段4実測図 S=1/60

加工段では手工業生産をうかがわせる遺物も出土しており、特に斜面中段の加工段4では鍛冶を行っていたことがわかっている。また碧玉が出土した遺構もあり、玉作りが行われていた可能性もある。弥生時代後期の遺構ではそのほかに、谷底近くの斜面で検出された蛇行して上方に登っていく溝状の遺構が注目される。底面がステップ状になっていることから、上方に向かう階段状の道の可能性があり、「階段状遺構」と呼んでいる。ここからは、土器が一括して投げ込んだ状況で出土し、外来系の土器も多く含まれている。

弥生時代後期以外の時期では、古墳時代中期の遺構が斜面中段以下を中心にくらか検出されている。S I 11・12の竪穴住居跡2棟を始め、弥生時代の加工段を再利用するような形で段も作られている。かなり上方で検出された加工段16もこの時期の遺構かも知れない。

そのほかには、平安期の土壙（SK 03）や中世を下限とする遺物が出土した谷底の池状の堆積が検出された。

以下斜面の上方から順に、各遺構を記述していきたい。

加工段3（第245図）

頂上下方の急な斜面でも尾根筋の比較的緩やかな部分に作られた加工段である。頂上平坦面のSB 15, 16の北東下方にあたり、標高約45m部分である。

西側と北側の下方は流出して失われ、全体の規模はつかむことが出来ない。

検出状況の床面で長さ4m以上、幅3m以上、壁の高さ0.7mで、本来は長方形の加工段であったものと推定される。床面が傾斜しているが、これは調査時に床面を認識しにくかったため、掘りすぎてしまった可能性があり、本来は水平に近かったかもしれない。床面から柱穴等は検出できなかつた。覆土内から弥生土器片が出土しているが、小片である

加工段4（第245図）

頂上下方の急な斜面でも、尾根筋の比較的緩やかな部分に作られた加工段である。西側を加工段3に切られる形で検出されており、全形をうかがうことは出来ない。

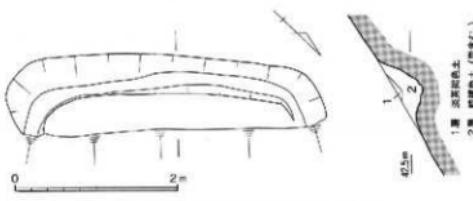
全体の規模はつかむことが出来ないが、検出時の床面で長さ5.3m以上、幅2.6m以上、本来は長方形の加工段であったものと推定される。加工段3と同様、床面が傾斜しているが、これは調査時に床面を認識しにくかったため、本来は水平に近かったかもしれない。床面から柱穴等は検出できなかつた。加工段3との前後関係は、両者を横断する土層がないため不明と言わざるを得ない。

加工段4出土遺物（第247図） 加工段4からは、南東側の壁際付近の覆土内より土器が出土している。ただ前述したように、床面の検出が難しい状況であったため、図示した土器は床面に近い状況であった可能性もある。比較的大きな破片であることもこれを傍証しているかも知れない。

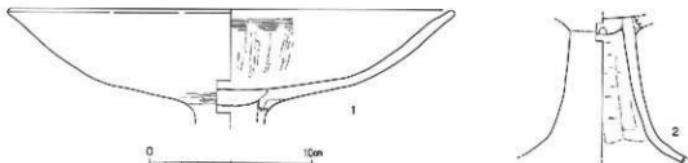
1は高坏の環部である。口径28.1cm、深さ4.9cmで、この種の高坏の一例に比べて浅い感がある。环の底には円盤を充填しており、その中心には小孔がみられる。内面にはヘラミガキが観察され、上方の一部には横方向のハケメもみられる。脚部は失われているが、接合部で計測すると脚柱部径は4.4cmを測る。淡褐色を呈す。2は1と同様の高坏の脚部である。脚柱部の接合部付近の径が4.0cmで、そこからやや外方に開きながら下り、7.5cm下方で折れて大きく聞く脚部に続く。环部の底には円盤を充填しており、その下面の中心に小孔がみられる。脚柱部内面は横方向のヘラケズリ、外面はナデを施しているようである。これらの造物の時期は、塩津5期と考えられる。

加工段5（第246図）

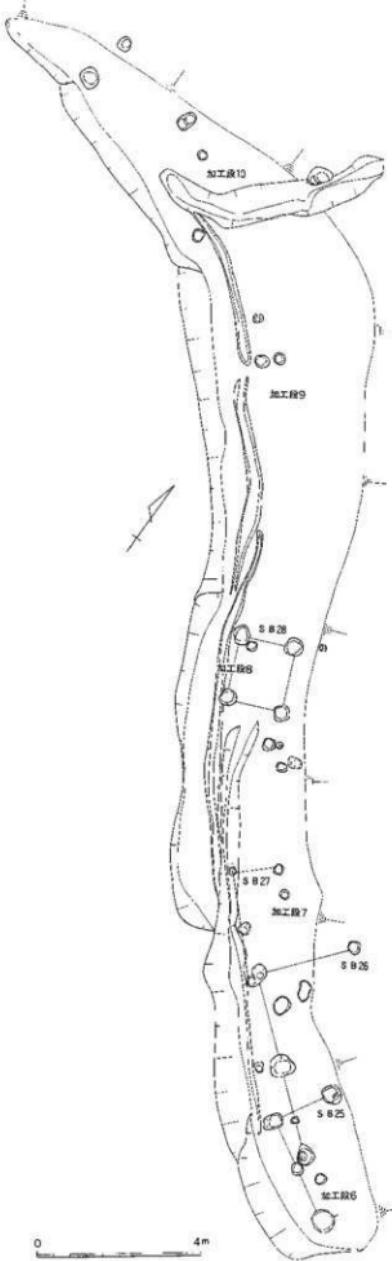
頂上北低平部のS B23付近の約4m程下方の、標高42.5m付近で検出された加工段である。かなり急な斜面に位置しているため、斜面下方側（東側）は大部分が流出したと推測され、幅は



第246図 柳遺跡加工段5実測図 S=1/60



第247図 柳遺跡加工段4出土物実測図 S=1/3 (1, 2 覆土)



床面で0.7m程しか残存していない。ただ、床面の両端はほぼ確認でき、長さは3.5m前後と小形の加工段である。壁際には幅20~25cmの溝が走っているが、豊穴住居跡の壁体溝にしては幅が広い。柱穴等は検出されていない。覆土内から弥生土器小片が出土しているが、図化は出来なかった。

加工段6~加工段10(第248図)

頂上高所平坦面から約7m下方の標高41m付近、調査区の南端から尾根筋あたりにかけて、細長く帯状に続く加工段が検出された。一見長大なひとつの加工段に見えるが、よくみると壁面の切りあいが認められるところがあり、また壁際の溝も複数認められる。よって、この帯状の加工段は、複数の加工段が切り合って結果的にこのような形態になったと考えるべきであろう。ただし、加工段形成当初は別々の独立した加工段であったかも知れないが、最終的には全体が一体的に利用された可能性が高い。

さて各々の壁面の切り合いと溝の位置は必ずしも対応していない。よって加工段を厳密に区分していくのは困難であり、ここでは壁の切りあいで加工段を区別したい。南端を加工段6とする。ここから南には加工段は連続せず、途切れている。北側は加工段7と切り合っており、長さは不明である。床面からSB25が検出されている。加工段6と切り合ってその北側に続くのが加工段7である。壁面直下に対応すると考えられる溝があり、北側でその端がほぼつかめている。11m以上のかなり長い加工段となる。床面からSB26が検出されている。加工段7の北半を切ってその上方に検出されたのが加工段8である。床面が加工段7より1段高く、加工段7の床面を嵩上げして床としたようである。SB28がこの面に対応する可能性が高い。

加工段8の北側の切りあいから、尾根筋の地形変換点あたりでの壁の切りあいまでを加工段9とする。柱穴がほとんどみられないのが特徴である。尾根筋の地形変換点あたりから西側に廻り込んで続く平垣面を加工段10とする。北西側の先端は壁が廻り込ん

第248図 柳遺跡加工段6・加工段7・加工段8
・加工段9・加工段10配置図 S=1/120

でおさまるのではなく、流出して失われた状況である。壁をみると北西端付近にもうひとつ切りあいらしき変換が認められ、あるいはまだ北西に向かって別の加工段が続いているかも知れない。柱穴らしきピットがいくらか検出されている。以下、南側から順に各造構について詳述したい。

加工段 6（第248図、第249図）

東側斜面の標高約41m辺りの急斜面、帯状に連なる加工段の南端にあたる。南側は壁が廻り込み、加工段は完結しているが、北側はとなりの加工段7と切り合っており、範囲は不明である。ただ壁面の北端がわずかながら東側に廻り込む気配がうかがえることや、対応する建物と考えられるS B 25の配置などを考え合わせると、長さ4m強の小規模な加工段であった可能性が高い。斜面の下方側（東側）は流出のため規模はおさえられないが、検出時で2.4m幅で床面が残存していた。

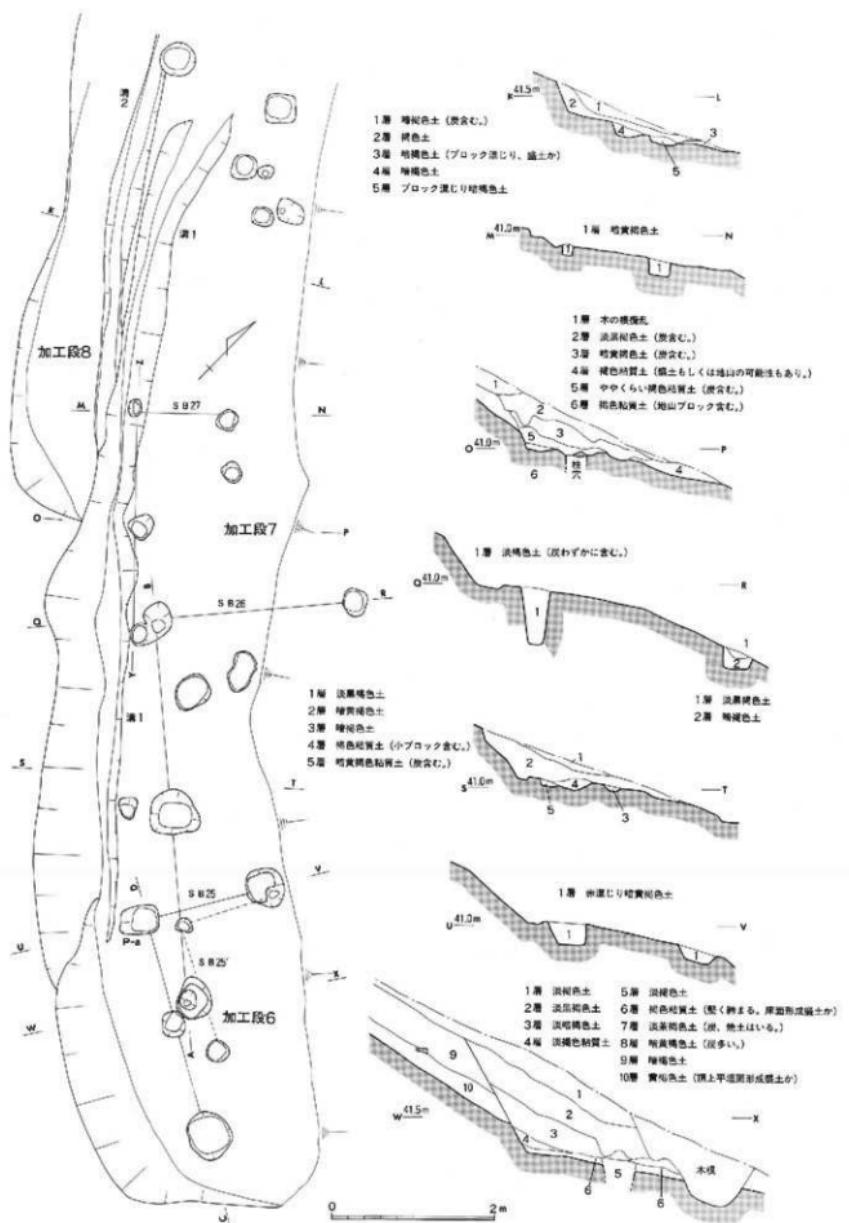
隣接する加工段7とは、対応すると考えられる建物が重なり合っているため、時間差があったと推測されるが、全く同一平面の床面のうえ両者を横断する土層を取っていないため、前後関係は不明である。土層の堆積をみると、前節で記したように頂上高所平坦面を造成した盛土を切ってこの加工段は形成されている。床面地山の直上には、固く締まった褐色粘質土が認められ、床面を整えるための層と考えられるが、この層が加工段7に対応する可能性も比定できない。

床面からは柱穴が検出され、掘立柱建物を構成する可能性が高い柱列（S B 25）が認められる。
S B 25

加工段6から検出された4穴の柱穴は、東側の対応する2穴が検出されていないが、整った並びや揃った柱間から1間×2間の掘立柱建物を構成していた可能性が高いと考えている。柱穴は円形というよりやや四角張った形をしており、上端で30~50cm前後の大きさである。柱間は柱穴の中心



上空から見た加工段6～10、S I 05など



第249図 柳遺跡加工段6・加工段7・加工段8実測図 (SB25・SB26・SB27) S = 1 / 60



で測って長辺側（染行）が1.4m、短辺側が1.5mで、よって $2.8m \times 1.5m$ の建物となる。柱穴の深さは20cm～30cmとあまり深くない。建物の長軸方向はN 60° Wである。

なおSB25の内側で検出された小形の柱穴3穴が直角に交わって並んでおり、SB25と前後して建てられた掘立柱建物であった可能性もある。ここではSB25'としておきたい。

加工段6・SB25出土遺物（第253図） 1はSB25東端のピットaから出土した器台である。受け部と考えられ、外反して立ち上がる口縁の外面には擬凹線を施している。小片のため径は不明瞭である。色調は外面が黒灰色（一部淡黄褐色）、内面が淡黄褐色である。

2～4は加工段6の覆土から出土した土器である。2はやや小形の鼓形器台である。脚部の外面には擬凹線がみられ、内面はヘラケズリを施している。底径13.0cmで、筒部はあまり長く伸びない。色調は淡黄褐色だが、外面の一部は黒灰色を呈す。1と色調や胎土が似通っており、同一個体の可能性が高い。3は低脚杯である。接合部付近の径が3.3cm、環部の厚さが薄い個体である。4はやや分厚な甕の口縁部である。複合口縁部の稜は横方向に伸び、口縁はほぼまっすぐ立ち上がって端部はやや外方につまみ出すように処理している。小片で口径は不明瞭である。

1はピット内出土で、加工段6・SB25の時期を表す遺物と考えられる。外面に擬凹線を施していることから塩津2期まで遡る可能性があるが、同一個体の可能性がある2と合わせると、2期には筒部が短くやや太い。また2期に特有の羽状文もみられない。よって3期まで下って考えた方がよいかも知れない。

加工段7（第249図）

東側斜面の標高約41m辺りの急斜面、帯状に連なる加工段のうち加工段6の北側に隣接して検出された構造である。斜面の上方を削りだした壁面の直下には溝（溝1）が検出されており、北側が加工段8と重なり合って不明瞭な部分を溝1でカバーすることが出来る。溝1は幅が20～40cmで北側が幅が広く、深さは5cm～15cmを測る。ほぼ直線的に伸びているが北側でやや折れ曲がる傾向を見せており、北端は溝が切れている付近でおさまっていた可能性が高い。南端はおさえられないが、検出部分で長さ10.3mあり、かなり長い加工段である。斜面下方側は流出しており、本来の幅も不明だが、検出時で2m残存していた。

床面からは柱穴がいくらか検出されており、南半にはSB26がSB25と重なって検出、さらにこのSB26の北に隣接して小形のSB27が検出された。

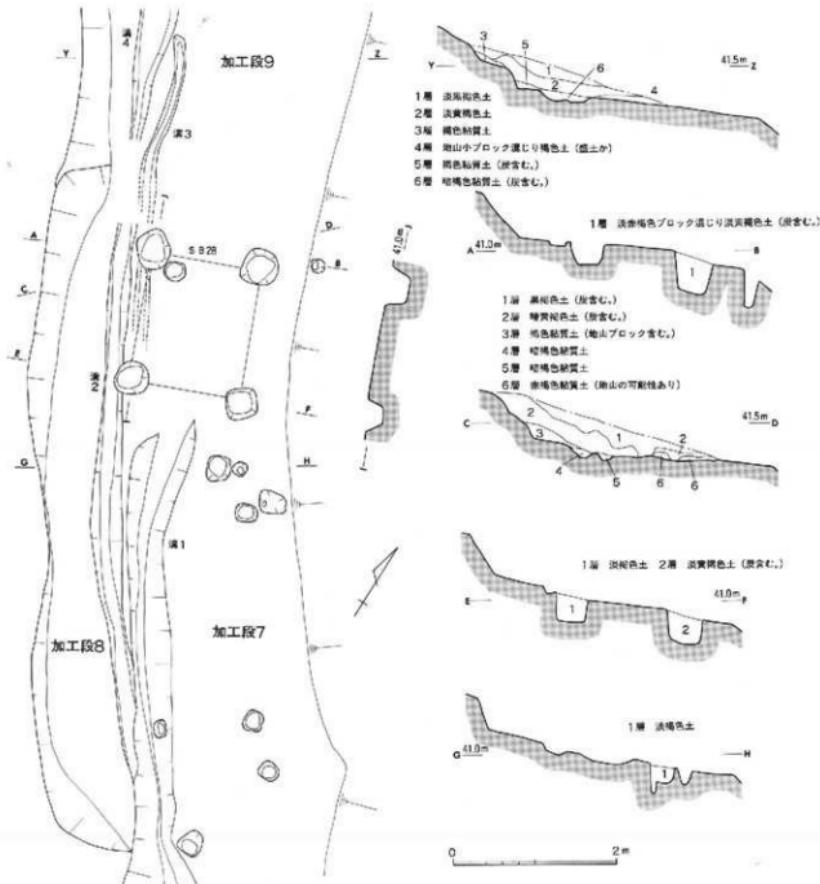
第250図 SB25・
SB26・SB27
断面図 S=1/60

SB26（第249図）

加工段7南半から一部加工段6にかけて検出された掘立柱建物である。S

B26はその位置関係から加工段7に伴う可能性が高く、よって加工段7は加工段6側にさらに伸びていた可能性が高くなる。斜面下方側の2穴は流出したらしく検出されていないが、1間×2間の掘立柱建物を構成していたものと考えている。柱間は長辺側(桁行)が2.4m、短辺側が2.5mで、4.8m×2.5mのかなり大形の建物となる。柱穴は径40cm～60cm、やや四角張った平面形を呈し、深さは45cm～75cmと深くしっかりしている。建物の長軸方向はN41°Wで、頂上高所平坦面の布壙建物SB01とはほぼ同方向である。

S B27(第249図) 加工段7の壁寄り、S B26の北側に接して検出された柱穴群である。東側の2穴が検出されていないが、1間×2間の掘立柱建物を構成する可能性があると考えている。柱間は長辺側が1.4m、短辺側が1.15mと小形の建物跡で、柱穴も径20cm～30cmと小形である。深さは検



第251図 柳遺跡加工段7 (SB28)・加工段8実測図 S=1/60

出面から15cm～30cmと浅くややはらつきがあるのが気にかかるところである。建物の長軸方向はN45°Wである。柱穴が溝1と重なっていることから、加工段7に伴うものではなく、一段高い位置で検出されている溝2とセットとなる可能性がある。

加工段7出土遺物(第253図5～7) いずれも覆土内の出土である。5は厚手で大形の甕である。口縁は外方に向けてほぼまっすぐ立ち上がり、端部は丸くおさめる。残存率が低いため口径は不明瞭である。6は鼓形器台の脚台部である。表面が風化しているため調整は不明瞭だが、脚部外面には擬円線は見られず、内面はヘラケズリを施しているようである。7は外反する口縁部の外面に擬円線を施す甕である。口縁端部は厚くならず、そのまま丸くおさめている。残存率が低いため口径は不確実である。これらの遺物の時期は、埴津3期を前後する時期であろう。

加工段8（第251図）

東側斜面の標高約41m辺りの急斜面、帯状に連なる加工段のうち加工段7の中央あたりから北で、一段高い位置に床面を持つ加工段である。加工段の南側は壁が廻り込んでいるため端がわかるが、北側は加工段9と切り合って端が不明瞭である。ただ壁の切り合いの形を見ると、加工段8が加工段9を切っておさまっているように見え、そうだとすると長さ8m前後の造構となる。壁際には溝は検出されず、壁からやや離れた位置に溝が2条見られる（溝2、溝3）が、これは加工段8とは直接関わるものではないと考えられる。重なり合っているこれらの溝や加工段7との前後関係は、それぞれの溝の外側に壁が立ち上がらないことから、加工段8が新しいものと考えられる。

この加工段の北端付近で、溝2、溝3と重なって検出されたSB28が加工段8に伴うものの可能性が高いと考えられる。

SB28（第251図）

長辺側の柱間1.65m、短辺側の柱間が1.40mの小形の1間×1間の掘立柱建物跡である。柱穴は径35～45cmの四角張った平面形で、深さは検出面から25cm～50cmを測る。建物の長軸方向はN23°Wである。

加工段8出土遺物（第253図9・10、14）

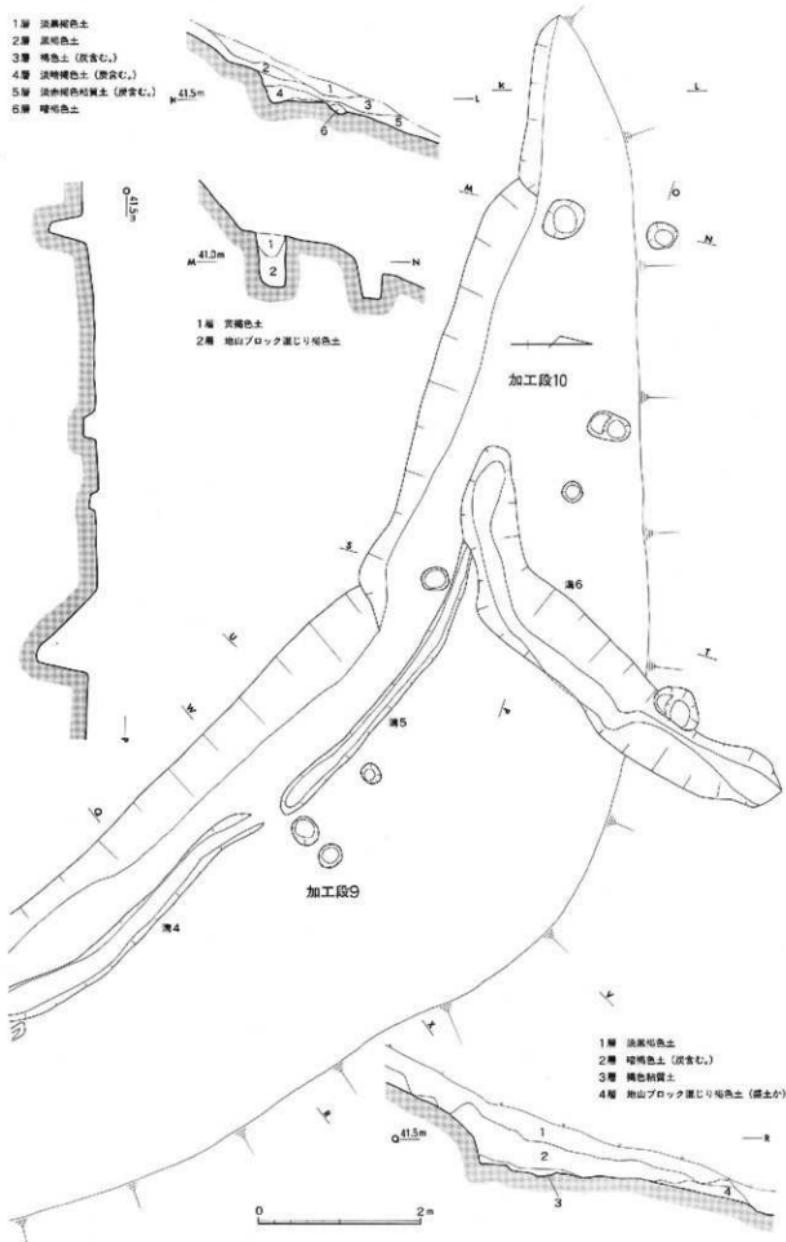
第253図9、10は加工段8の覆土から出土した土器である。9は鼓形器台の筒部である。厚い部分では1.8cmと分厚な個体で、径が小さい割に高さが低い感がある。10は複合口縁の壺であろうか。口縁はかなり外反しており、端部は丸くおさめている。これらの上器は埴津3期～4期の範囲に入るものが、やや新しい様相を持ち、加工段8が前後の造構より新しいことを考えあわせると、4期とすべきかも知れない。

14は覆土から出土した鉄片である。長さ2.5cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmの三角形状を呈し、一見鐵鎌にも見えるが、一方の縁辺が面を為していることから、鉄製品を製作する際の断ち切った断片である可能性が高い。

加工段9（第252図）

東側斜面の標高約41m辺りの急斜面、帯状に連なる加工段のうち加工段8の北側に連なる加工段である。南側を加工段8、北側を加工段10に切られているため、全体の規模は全く不明である。現状で長さ8m以上、幅は尾根筋にあたるため残存状況が比較的よく、長いところで4m残存している。

- 1層 淡黃褐色土
2層 黄褐色土
3層 増色土(灰含む。)
4層 淡褐褐色土(灰含む。)
5層 淡赤褐色粘質土(灰含む。)
6層 灰褐色土

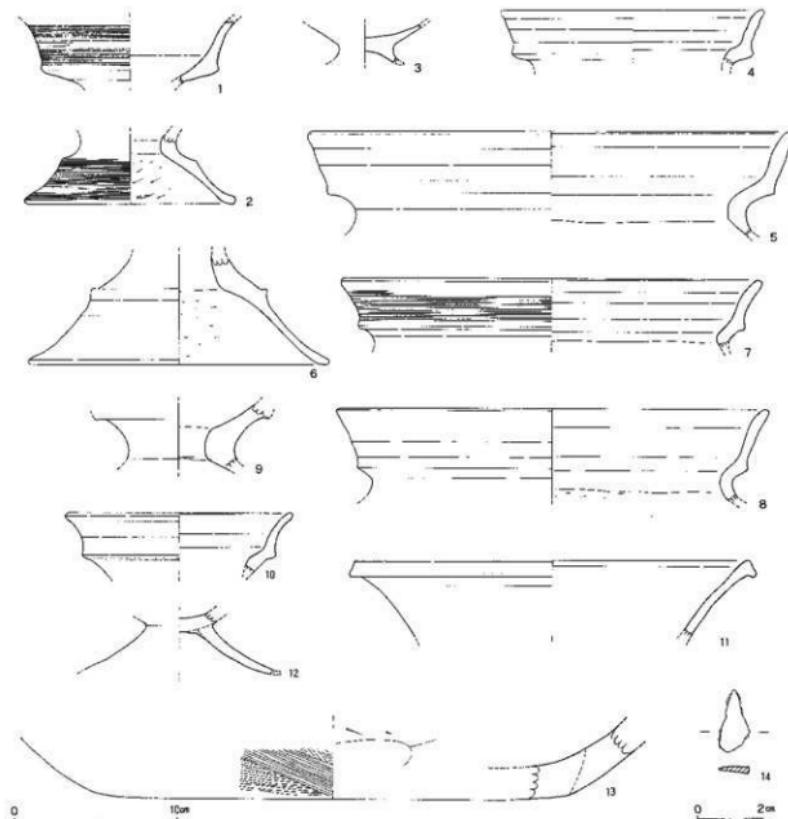


第252図 柳遺跡加工段9・加工段10実測図 S=1/60

壁際には溝は認められず、壁から30~50cm離れた部分で3本の溝（溝3、溝4、溝5）が一部重なりながら検出されている。土層の堆積を見ると溝の外側に壁は立ち上がらないことから、いくつか重なり合っていた加工段を切って拡張する形で加工段9が作られたと推測される。床面から建物を構成するような柱穴は認められず、構造的にしっかりとした建物はなかったものと考えられる。

加工段10（第252図）

東側斜面の標高約41m辺りの急斜面、帯状に連なる加工段のうち加工段9の北側、地形的にいう尾根筋の最も傾斜が緩い辺りから、南側に連なる加工段とはやや方向を変えて西側に続く加工段である。西端は傾斜が急になるからか流出して検出できず、また壁を見ると別の加工段が切っている可能性もある。現状で長さ8mばかり検出されており、幅は傾斜の緩い東側は3.5mと広く検出され



第253図 柳遺跡加工段6・加工段10出土遺物実測図
 $S = 1/3, 14\text{のみ} 2/3$ (1…加工段6 砂、2~4…加工段6 覆土、5~7…加工段7 覆土、
 8…加工段8~9、9~10、14…加工段6 覆土、11~13…加工段10 覆土)

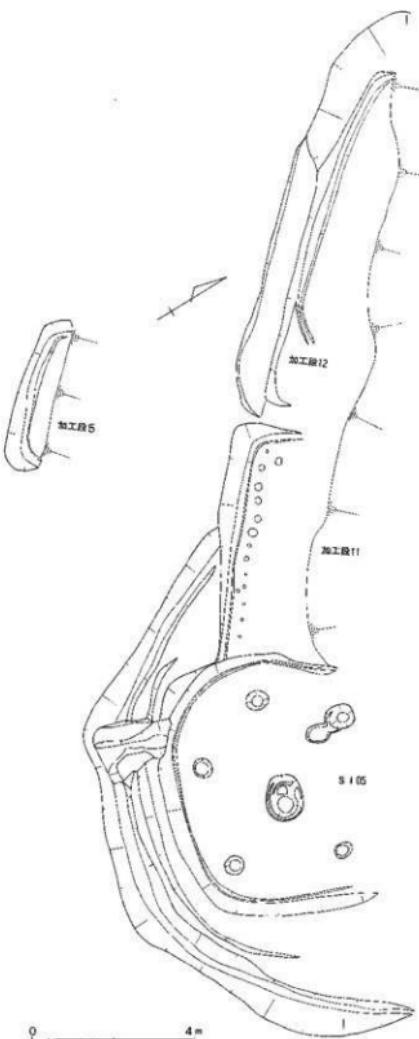
ているが、西にいくに従って傾斜が急になっていくのに比例して、検出幅が狭まりついには自然に消滅していく。

東側の床面を横切るように弧状の溝が検出されている(溝6)。上端の幅80cm前後、深さ60cmとかなり深い溝だが、底面は狭く蛇行気味で、北東側は斜面の傾斜で自然消滅している。性格は不明である。

床面の北端近くに柱穴が2穴検出されている。直径35cm~45cmのこの柱穴は、加工段の方向に直交(ほぼ南北方向)して1.3m間隔に並んでいる。上方の柱穴は深さが65cmと深くしっかりしており、下方の柱穴も底面の高さはほぼ同じである。建物の柱穴の可能性が高く、流出した西側に柱穴が続いている可能性がある。そのほかにも若干柱穴らしきピットが検出されたが、建物は構成されない。

加工段10出土遺物(第253図11~13)

11は壺、もしくは器台状のものか。復元口径24.0cmの外方に開くやや大形の口縁部で、口縁端部は下方に垂下している。器面は3mm前後と薄く、淡黄褐色を呈す。12は口付き鉢もしくは高壺の脚部である。脚は壺に向かって「ハ」字状に開いており、端部は失われているが、さほど伸びないと考えられる。環部はないが、残存部から推定するとポール状に立ち上がるようである。口っぽい淡褐色を呈す。13は厚くて非常に大形の壺もしくは妻の底部である。復元底径は30cm前後、厚さは2cm前後、平底だがわずかながら曲面を呈す。外面にはハケメ、内面にはヘラケゼリを施している。これらの遺物は時期的決定をしにくい器種ばかりであり、時期限定しづらい。塩津3期~5期くらいの範囲におさまると考えて大過ないと思われる。



第254図 柳遺跡S 105・加工段5・加工段11
・加工段12配置図 S = 1/120

S I 05、加工段11、加工段12の配置（第254図）

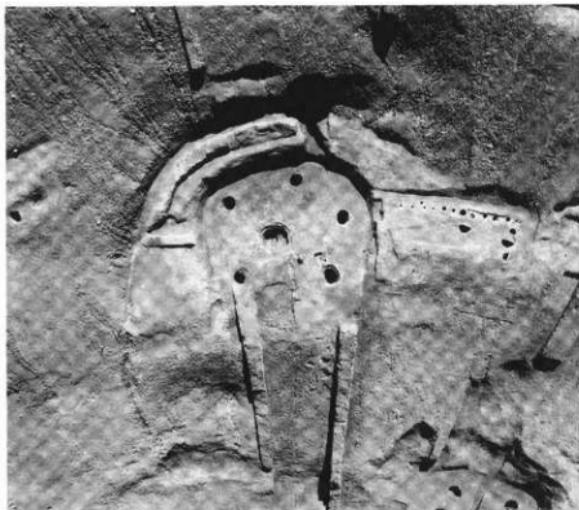
東斜面部北半の谷状にくぼんだ地形の奥、標高約39m前後のレベルに連なってS I 05、加工段11、加工段12が検出された。南側の一段高いレベルには加工段6～加工段10が連なり、北側の一段低いレベルに加工段13～加工段16が連なっている。

加工段11と加工段12は隣接しながら互いに完結しており、同時に並存していた可能性があるが、S I 05と加工段11は切り合っている。前後関係は、後に詳述するが、S I 05が加工段11の覆土を切っていることや、S I 05の外周の溝が加工段11の上に続いていることから、S I 05が新しいと判断される。

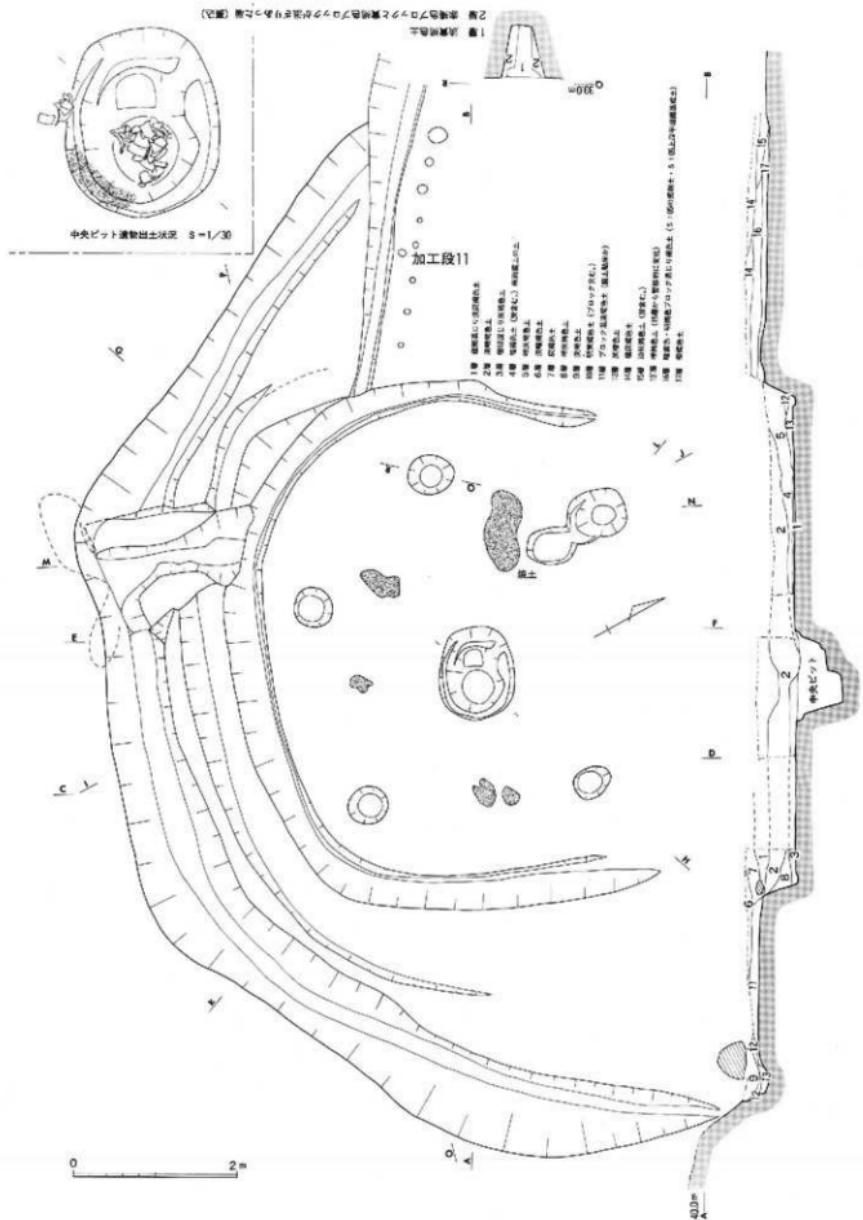
S I 05（第255図～第261図）

東斜面北側の、弧状にくぼんだ谷状地形の最奥部、標高39m付近（床面）に作られた竪穴住居跡である。塩津丘陵遺跡群が馬蹄形にめぐっている谷の下方から見ると、一方の谷頭にあたる部分であり（第1分冊第4図）、よく目立つ位置といえる。自然地形が最も内湾してくぼむ部分を利用して外周の溝を削りだし、その内側に平坦面を作り出して竪穴を掘りくぼめており、地形をうまく活かした配置といえよう（第255図）。

全体の構造 S I 05は、斜面下方側（北東側）は流出によって一部失われているが、背後の斜面上方側の遺構がよく残存しており、総体としては斜面に作られた竪穴住居の構造がよくわかる資料である。竪穴住居本体の外側には平坦面が一段めぐり、その面は側面に廻り込んでくるにつれて広くなっていく。その外側には一段高い外堤状の高まりがめぐり、さらにその外周に溝が廻っているのである。仮に周囲にめぐる平坦面が住居の内部にあたり、外周溝が屋根から直接雨水を受ける構造とすれば、この竪穴住居はかなり大形の上屋を持つことになる。



上空から見たS I 05（右は加工段11）



第255図 柳遺跡 S 105実測図 $S = 1/60$ (遺物出土状況は $1/30$)

竪穴本体 S I 05は竪穴の平面形は円形でもなく、隅丸方形でもない不整な形態であるが、後に述べるように主柱穴が5本と考えられることから、不整な隅丸五角形を呈すものと考えられる。規模は、両側の壁が残存する東西方向の壁体溝内側で測って5.85mを測る。深さはよく残っている斜面上方側（南側）で75cm前後であり、これは外周の平坦面がブライマリーな状態と考えられることから、当時の壁の高さといえる。壁際には幅5~10cm、深さ5cm前後の壁体溝がめぐる。

主柱穴と考えられる柱穴は5穴検出されている。ただこれらの柱間は2.2m~3.3mとかなりばらつきがあり、正五角形を呈さない。ただ壁もほぼこの柱穴の位置と対応して曲がっており、およそ五

角形を呈していたことは間違いない。柱穴は直径45cm~55cm、深さは55~80cmと深くしっかりしている。柱穴の土層断面に柱痕が観察されるものが4穴あり、その幅は15~20cmである。柱痕の周囲は、地山と同種の土が固く締まった状態で堆積しており、柱の周りを掘った土で埋めて固く締めたことがうかがえる。

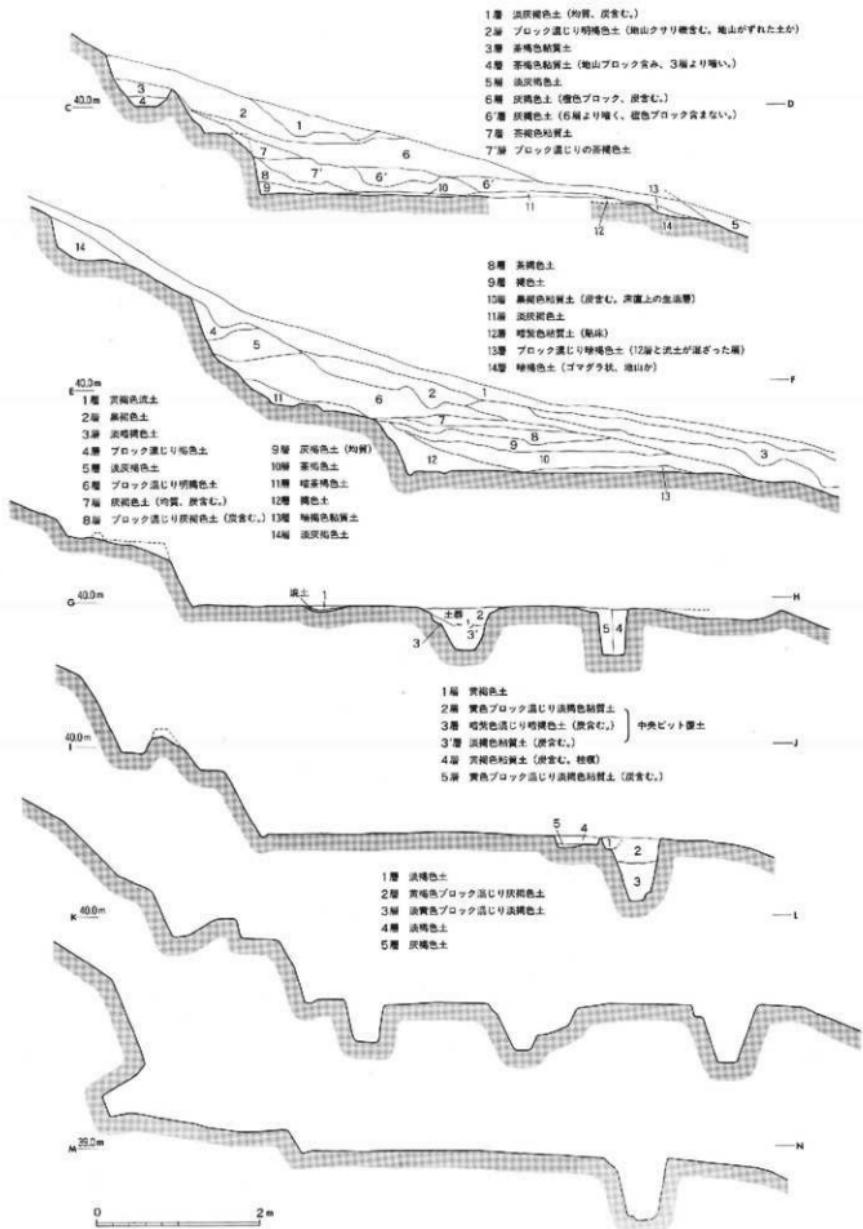
いわゆる中央ピットは、床面の中央からわずかに東寄りで検出された。床面から深さ7~8cmのところに幅の狭い平坦面がめぐり、そこからまた深く掘り込まれている。ピットの底は2段になっており、深い部分は床面から55cm、浅い部分は40cmの深さを測る。一度掘り直されたものかも知れない。直径は浅い平坦面の内側で65cm、外側で95cmを測る。平坦面の一部に焼けて赤変した部分が認められた。覆土には炭が含まれ、土器が出土した。

床面の一部には炭が多く含む厚さの薄い黒褐色土が見られ、生活層を形成しているものかも知れない。斜面下方側のレベルが低くなっている側には貼床をしており、低い側の壁は盛土で形成していた可能性が高い。床面には5ヶ所、焼けて赤変した部分が検出された。

外周の遺構 竪穴住居の床面から約75cm高いレベル（南側の壁部分の高さ）で平坦面が外周を廻っている。この面は最も狭い斜面上方側（南側）で幅30cm前後を測り、次第に幅を広げ、レベルを下げながら竪穴の側方に伸びている。北側にいくに従って平坦面の範囲は不明瞭となるが、少なくとも1mの幅までは広がっていることが確認できる。

外周平坦面は斜面下方側（北側）にいくに従って地山のレベルが下がっていくため、盛土をして面の高さを嵩上げしている。この嵩上げは竪穴の東西両側で見られるが、特に顕著なのは加工段11と切り合っている西側である。加工段11の床面上には、周辺の地山の形質を残す土がブロック状になって堆積しており、自然堆積というより人口的な盛土を思わせる。とりわけ特徴的なのは、暗紫色の土が大量に埋まっていることである（第255図A-B断面16層）。この暗紫色の土は、通常表面には現れていない土で、S I 05の床面でも深く地山を掘りくぼめた南側の一部に脈状に現れている土である。周間にこの土が現れているところはなく、加工段11を埋めているこの暗紫色土は明らかにS I 05を形成する際に生

第256図 S I 05断面図(1)
S=1/60



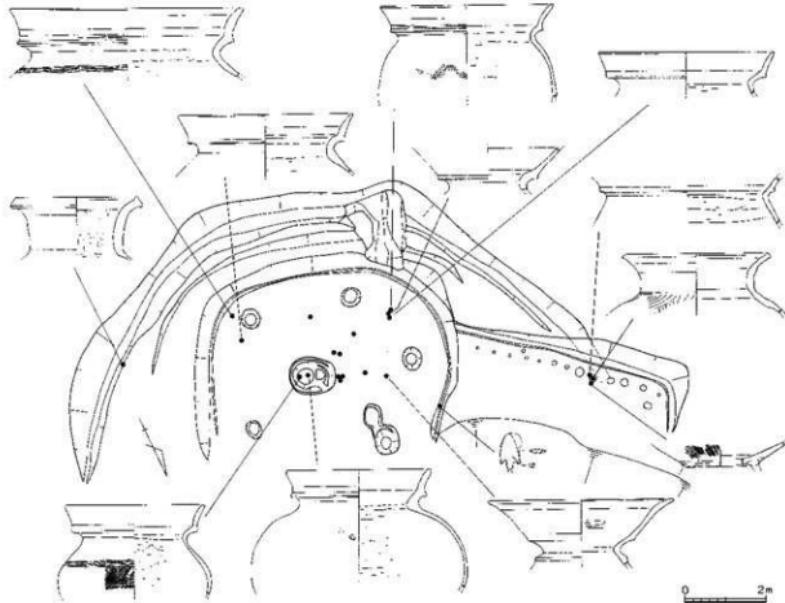
第257図 柳遺跡 S 105断面図(2) S = 1/60

した土砂を盛ったものと判断できる。よって S I 05は加工段11よりも新しく、また加工段11が埋まる前にS I 05が形成されたことになる。

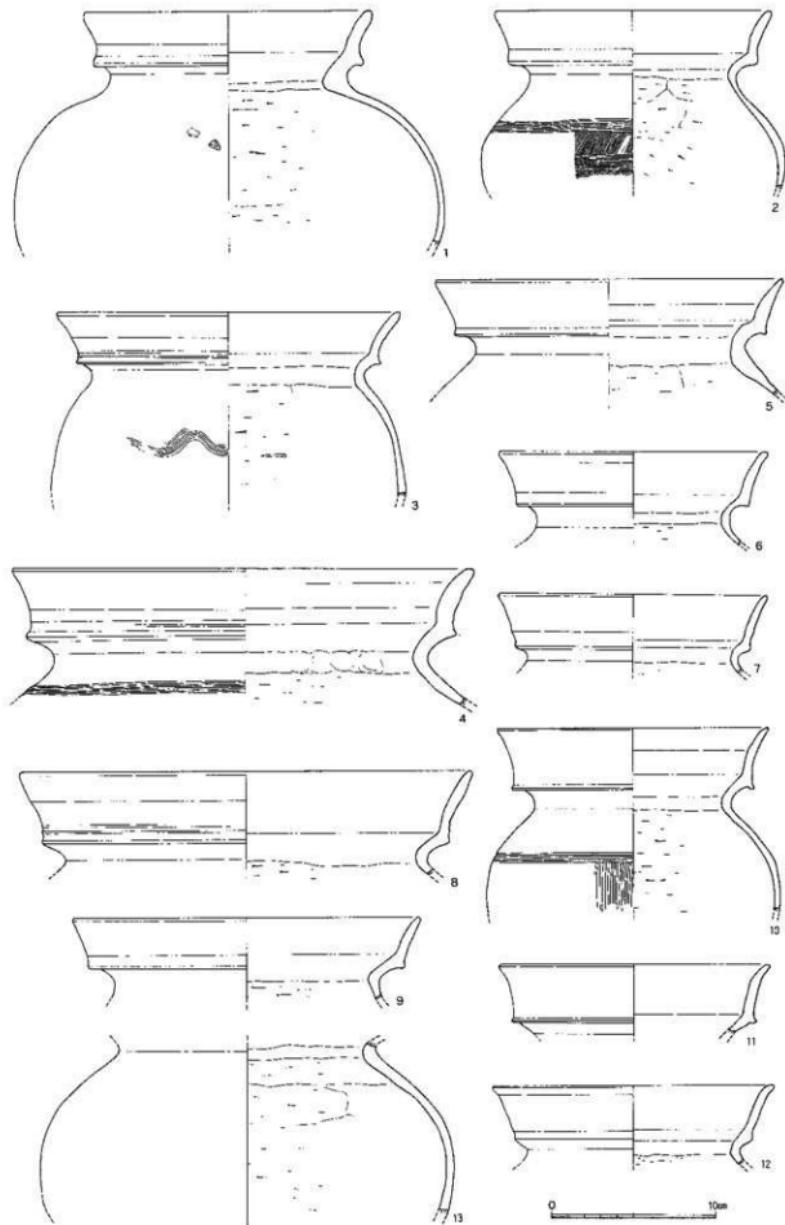
外周平坦面の外側には、残りの良い部分で平坦面からの高さ55cmを測る土手状高まり（外堤）が検出されている。この外堤の頂部には狹いながら面が作られ、そのレベルは北側に通り込むにつれて低くなっていく。また地山レベルの高い南側は地山を削り出して外堤を形作っているが、地山レベルの低い北側は盛土で形成している。この外堤は、外周平坦面の壁を構成すると同時に外周溝の内側の高さを高くる役割をはたしている。

外堤の背後に弧状の外周溝がめぐらされる。溝の断面形は逆台形状を呈し、斜面上方側からの深さは1mにおよぶところもある。溝の北西側は加工段11と切り合って不明瞭で、平面的に検出できなかつたが、加工段11の上に統いていくことは明かである。溝の幅は上端で60cm～1mを測る。この外周溝の外側で差し渡しの長さを測ると、検出された範囲内だけでも13mにおよび、かなり大規模に造作されたことがうかがえる。

さて、堅穴の南側（斜面の最も高い部分）の壁上部、外周平坦面、外堤、外周溝を切って、外周溝のさらに奥に向かって穴が掘られている。平坦面から溝までの表面に現れた部分は2段の溝状に加工されており、溝の奥は横穴状になっているが、奥行きは最大70cmほどと深いものではない。貯蔵用の施設の可能性も考えられるが、収納面積は狭いえ雨水が流入してくる可能性もあり考えにくい。そのほか、機能を推測させる根拠はなく、性格は不明と言わざるを得ない。



第258図 柳遺跡 S I 05遺物出土状況 S = 1/120 (遺物は1/6)



第259図 柳遺跡 S 105出土遺物実測図(1) S = 1 / 3 (1~7…床面、8~13…覆土)

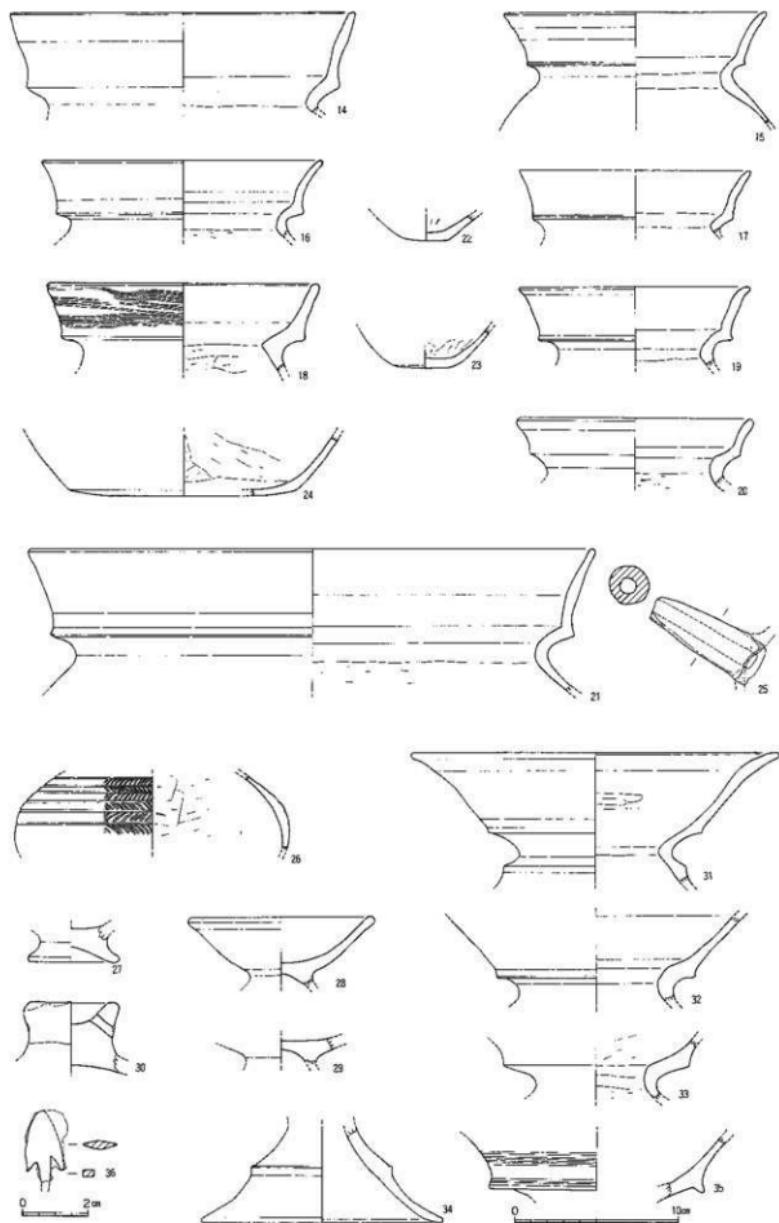
S 105遺物出土状況(第258図) 中央ピット内から甕が2点出土している。覆土下層(第257図G-H断面3層)上面からまとめて出土しており(第255図上)、意図的に投げ込んだものかもしれない。床面上では、比較的壁に近い部分で甕が出土している(3~5)。3は出土した時点では完形で潰れた状態であったが、胴部の風化が著しく接合は出来なかった。西側壁際壁体溝付近の床面からは、鉄錆が出土している。

外周溝の東西に合い対応するような位置からも土器が出土している。西側のものは加工段11から出土しているように見えるが、出土レベルは外周溝の高さである。これらのうち3点が、通例あまり見かけない器種であることも興味深い。

S 105出土遺物(第259図~第261図) 1、2は中央ピット内から出土した甕である。1は胴部がよく張った甕で、胴部は薄く仕上げられているものの、頸部から口縁部にかけては分厚な個体である。口縁部は折れ曲がり気味に外反し、端部は丸くおさめる。頸部付近が特に分厚なせいか、通常頸部内面に形成される面が不明瞭である。肩部付近に近接して2ヶ所、 $7\text{ mm} \times 5\text{ mm}$ 程の列点が施されている。外面にはススが濃く付着しており、よく使用された個体であることを示している。口径17.8cmを測る。2は口縁部が外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる甕である。肩部やや上方には櫛状工具による平行沈線が施され、その下には細かなハケメが見られる。1同様外面にはススが濃く付着している。復元口径17.2cm、やや赤みがかった淡褐色を呈す。

3~7は床面出土の甕である。3は復元口径21.2cmの中形の甕である。複合口縁部の稜は少し横方向に突き出し、その直上に2条、平行沈線を施している。口縁は厚さ5mmと薄めで、外反して立ち上がり、端部は丸くおさめている。胴部も薄い部分は3.5mmとかなり薄い仕上げとなっており、外面には櫛状工具による波状文がみられる。外面はススが濃く、胎土はやや赤っぽい淡褐色を呈す。4は口径28.6cmの大形の甕である。複合口縁部の稜は若干横方向に突き出し、その直上には浅い2条程度の凹線が微かに見られる。口縁は分厚で、外反して立ち上がり、端部は先細りになって丸くおさめる。頸部下の外面には櫛状工具による平行沈線が施されている。5は口径21.5cmの中形の甕である。複合口縁部の稜が斜め下方向に若干突出し、口縁は外方に開いてほぼまっすぐ立ち上がる。口縁はやや厚めだが、端部に向かって細くなっている、先端は丸くおさめる。淡黄褐色を呈す。6は復元口径16.6cmの複合口縁の甕である。口縁はわずかに外反して立ち上がり、端部は丸くおさめている。橙褐色を呈す。7は復元口径16.6cmの複合口縁の甕である。口縁は外方に開いてほぼまっすぐ立ち上がり、端部は風化のため不明瞭である。やや赤みがかった淡褐色を呈す。

8~21は覆土から出土した甕である。8は復元口径28.0cmの大形の甕で、複合口縁部の稜直上に2条の平行凹線を施している。口縁は外反して立ち上がり、端部は細りながら丸くおさめる。9は復元口径21.6cmを測る複合口縁甕である。口縁は外方に開いてほぼまっすぐ立ち上がり、端部はやや先細りとなって丸くおさめる。桙褐色を呈す。10は口径16.8cmの甕である。複合口縁部の稜は下に伸びている。口縁は端部に向かって先が細りながら外反して立ち上がり、先端は丸くおさめる。胴部はかなり薄く仕上げられており、外面には櫛状工具による平行沈線が施され、その下にはハケメが見られる。橙褐色を呈す。11は復元口径16.7cmの甕である。複合口縁部の稜は横方向に伸び、口縁はほぼまっすぐ立ち上がって端部近くで外方に若干折れ曲がる。端部は丸くおさめている。12は復元口径17.4cmの複合口縁甕である。口縁は外方に開いてほぼまっすぐ立ち上がり、端部付近でわずかに外方に折れ気味になり、先端は丸くおさめる。

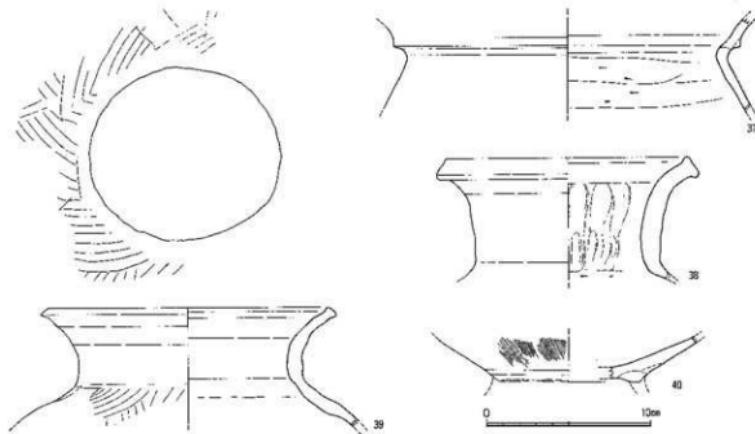


第260図 梶遺跡 S-105出土遺物実測図(2) S=1/3、36のみ1/2 (36…床面、14~35…覆土)

14は復元口径21.4cmの複合口縁甕である。口縁は外反して立ち上がり、中途からまっすぐ伸びて、上端に面のある口縁端に至る。15は復元口径16.2cmの甕である。複合口縁の稜はわずかに横に突き出し、口縁は微妙に外反して立ち上がって端部は丸くおさめている。16は口径17.3cmの複合口縁甕である。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸い。17は口径14.2cmの小形甕で、複合口縁部の稜直上に、2条の細い沈線が見られる。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめている。18は複合口縁の外面に擬凹線が見られる甕である。口縁は厚めで、外方に開いてほばまっすぐ立ち上がる。内面の頸部と胴部の境は「く」字状に折れ曲がる。他の遺物に比べて古い特徴を有す。19は復元口径14.2cmの小形の甕または壺である。小形の割には全体にやや分厚で、複合口縁部の稜は横方向に伸びている。口縁は外方に開いてほばまっすぐ立ち上がり、端部近くで外方に折れ、先端は丸くおさめる。20は口縁の立ち上がりの高さが低い小形の甕である。口縁は外反しており、端部は丸くおさめている。21は復元口径35cmと大形の甕である。大形の割に薄作りで、口縁はわずかに直立した後、外方に開いて端部に至る。上端にはわずかに面が見られる。

22~24は甕または壺の底である。22、23は狭い平底で、23は底がわずかに曲面を呈す。24は復元底径14.0cmの広い平底の土器である。25は注口土器である。注口部の長さ6.5cmで、直径1cm前後の孔が貫通する。26は甕または壺の胴部である。外面には平行に沈線をいれ、その間に貝かと思われる原体で連續刺突文を施している。刺突は斜め方向で、段毎に互い違いになるように方向を進えている。外面にはスヌが付着している。

27~29は覆土出土で低脚環であろう。28は环部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端はやや厚みをもじて丸くおさめている。他の多数の土器と比べて古相を示すものである。30は非常に分厚い土器で、上部に径5mm程の小孔が貫通しているため、蓋であろう。31~35は覆土内出土の鼓形器台である。31は口径22.8、筒径9.4cmで、筒部はかなり短くなっているが、筒径はまだ縮まった感のある器台である。34は筒部から脚部にかけてなだらかに開いていく器台である。筒部は長く延び径が小さいタイプで、表面が風化しているため大きさは不確実である。35は受け部外面の一部に擬凹線が見

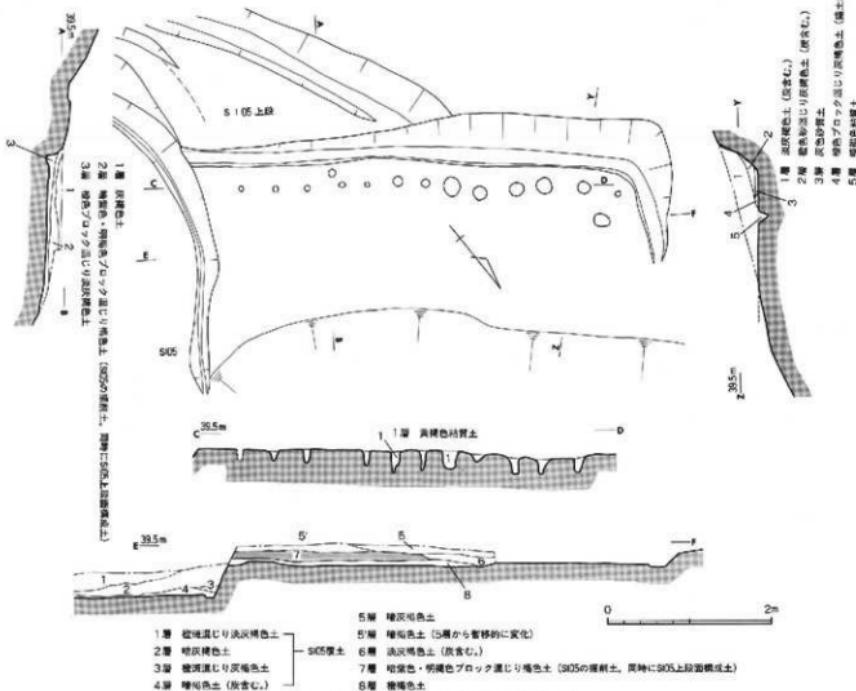


第261図 柳遺跡S105上段・周溝出土遺物実測図 S=1/3

られる個体である。受け部と筒部の境の後は下方に垂下している。

36は西側壁際壁体溝付近で出土した鉄鎌である。川越哲志氏の分類¹³⁾の有茎三角式で、長い逆刺がある。茎の先端は欠損しており、現状で長さ3cm、幅1.5cmを測る。鎌身の断面はレンズ状、茎の断面は長方形を呈す。

第261図37~40は外周溝から出土した土器である。37は複合口縁の甕である。口縁の多くを失っているが、口縁は外反して立ち上がるようであり、口径は24cm前後になるものと推定される。38は口径15.0cmの壺の口頸部である。頸部はやや外方に立ち上がり、口縁近くで開いて上下に拡張する口縁部に至る。胴部はヘラケズリが施され、薄くなっているが、頸部より上は厚さが1cm以上と厚い。頸部内面にはシボリ目を押さえつけたような凹凸が見られる。淡橙褐色を呈す。39は口頸部が外反して開く単純口縁の壺である。口頸部の外面は、ヨコナデが頸著で凹凸が見られ、特に口縁端部の下方を外面とも強くなることによって、口縁端を上下につまみ出したような形態となっている。頸部より下には、数状(8条が基本か)を1単位とした帯が絡まった文様が施されている。残存部が少なく、器表も傷んでいるため詳細は不明だが、線は非常に細く、原体は鉄器の可能性もある。それぞれの帯は基本的に重ならないように描かれているようである。吉備地方の特殊器台等で見られる弧帶文に類似しているように見えるが、直接的な因果関係が追えるかどうかはわからない。40は器種不明の土器底部である。底部の外縁に低い高台状の突帯があるが、擬口縁状にも見え、



第262図 柳遺跡加工段11実測図 S=1/60

あるいは脚が付くかも知れない。外面にはハケメが見られる。これらの土器のうち38~40はあまり当地では見かけない形態である。特に39は特有の文様を描いており、注目される。

さて、S I 05の時期であるが、床面出土の土器は7がやや新しい様相を持つものの、塙津4期と見てよいであろう。覆土出土の土器も、一部新古の様相を持つ個体も散見するものの、大部分は塙津4期におさまると考えて大過ないであろう。

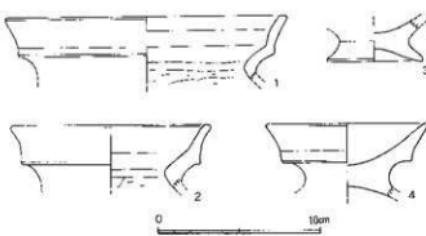
加工段11（第262図）

S I 05の北西側の急斜面で検出された加工段である。南東側はS I 05と切り合っており全形はつかめない。S I 05との前後関係は、前述したようにS I 05を掘った上が加工段11の上にかぶっていることから、加工段11が古いことがわかっている。

加工段の形態は、斜面上方側の壁がほぼ直線状に伸びて、北西側の端はきっちりと直角に近い角度で壁が屈曲しており、比較的整った長方形に整形されていたものと考えられる。壁際には幅20cm、深さ5cm程の溝がやはり整然とめぐっている。検出時での規模は長さ5.3m、幅は斜面下方側が流出しているが2.5mまでは残存している。

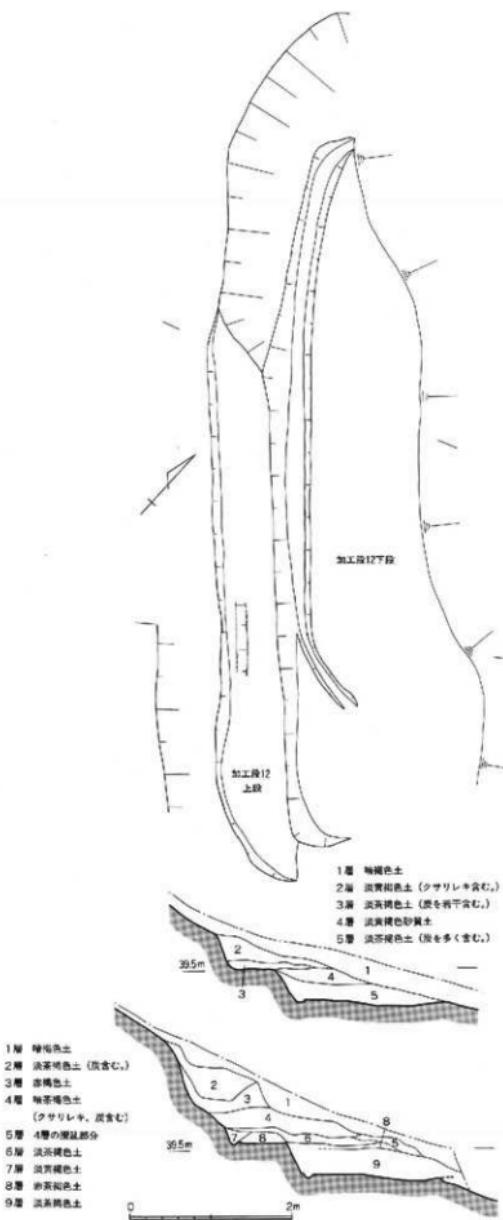
壁際の溝から約25cm内側の床面に、5cm~20cm程度の小穴が並んで検出されている。小穴は30cm~40cmの間隔でほぼ直線状に並んでいる。内部には黄褐色粘質土が一様に堆積しており、断面を見ると先細りになる穴が多い。深さは非常に小さい穴のうえ、奥は細くなっていて正確には測定が難しいが、20cm~25cmまでは確認が出来ている。この小穴列は、そのあり方から枕列の痕跡である可能性を考えている。杭で何を構築していたかは不明だが、加工段自体が整った形態であるうえ、壁際に整然と溝が掘られていることからすると、何らかの建物を想定するのが自然であろうか。ただ短辺側は小穴は続かず、対応する反対側の列も斜面となってしまっていることもあって検出されていない。杭で建物が支えられるかという問題も含めて、建物の存在の断定は出来ない。

加工段11出土遺物（第263図） いずれも覆土内より出土している。1は復元口径17.4cmの複合口縁の甕である。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁の立ち上がりが一般例に比して短い個体である。2は小片で口径は不確実だが、小形の甕である。大きさの割に全体的に分厚で、特に頸部は1cm前後と厚い。複合口縁部の稜は若干下方に伸びており、口縁は外反して立ち上がる。赤褐色を呈す。3は低脚環の脚部であろう。底径5.9cm、接合部の径4.2cm、脚台部がさほど高くない個体である。4は複合口縁状のつまみを持つ蓋として図化したが、脚台部の可能性もある個体である。複合口縁状の稜は、わずかに斜め下方に伸び、そこから外反して立ち上がる。端部に向かっては先細りとなり、先端は丸くおさめている。つまみ部の内面は丸くボルト状を呈している。上端部径は10.0cmである。外面には丹を塗布している。



これらの遺物の時期は、塙津4期と考えられる。S I 05とそう大差ない時期で、両者の切り合い関係とも矛盾しない。

第263図 加工段11出土遺物実測図 S=1/3 (1~4…覆土)



第264図 橋遺跡加工段12実測図 S=1/60

加工段12 (第264図)

東斜面北側の谷状地形の奥、標高39m付近の急斜面で検出された加工段である。加工段11がすぐ南に隣接しているが、両者は切り合ってはいない。

床面が上下2段に検出されており、上方を加工段12上段、下方を加工段12下段と呼ぶ。下段は両側の端がほぼ確認されており、長さが8.7m、幅は斜面下方側が流出していく不明だが、広い部分で2.3mを測る。壁はほぼ直線状に伸び、床面もほぼ水平で、加工段11と同様に整った形態である。

壁際には幅20~30cmの溝が検出されているが、この溝は壁際を通して設けられているのではなく、南端の手前で折れている。下段でも2時期の遺構が重なっている可能性が高い。

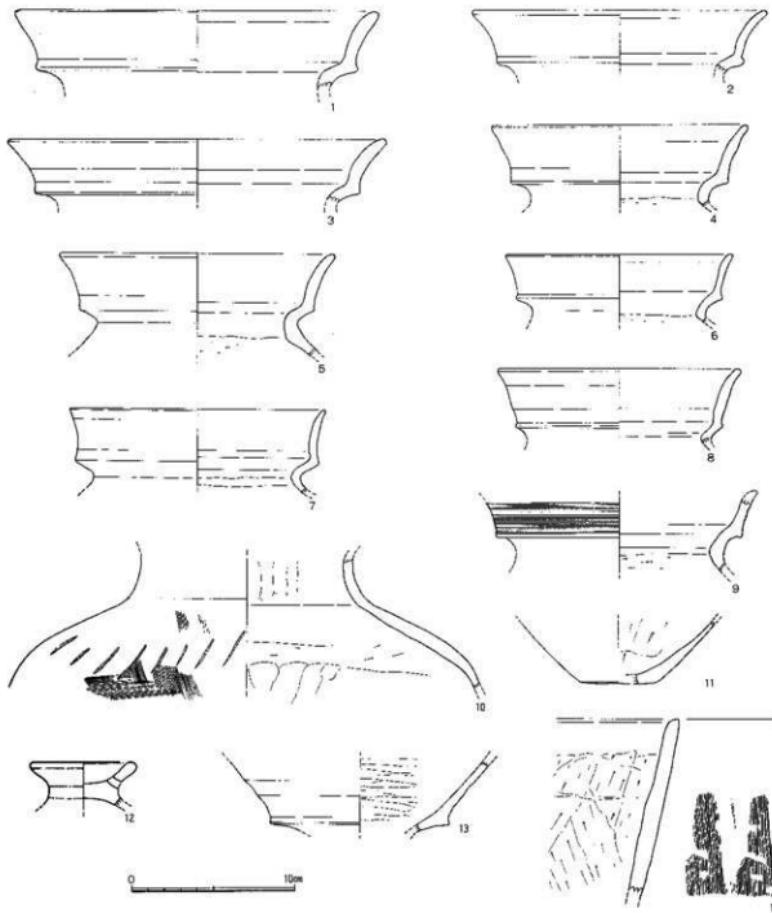
上段は、下段の床面から40cm高い位置に床面が設けられている。北側は流出か何らかの加工によって検出できておらず、規模は不明である。壁際には下段と同様に溝が廻っていたことが明らかになったが、土層で確認されたのみで平面的には検出できなかった。土層の堆積を見ると、上段の床面は下段を埋めた土の上に続いていることがわかる。おそらく床面の拡張のために背後を掘り進め、生じた土砂を下段に埋めて平坦面を広げたものであろう。

上段、下段ともに柱穴や焼土は全く検出されなかった。

加工段12出土遺物 (第265図) いずれも覆土内から出土している。1は復元口径22.4cmの甕である。全体に分厚で、複合口縁部の稜は若干横方向に出ている。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめている。3もほぼ同様の特徴を持

つ。2は複合口縁部の稜が横方向に伸び、口縁はよく外反して立ち上がる甌である。口径は不正確である。4～8は、1～3ほどは口縁の外反度が強くない甌である。復元口径は14cm～17cm、口縁端部はいずれも丸くおさめている。9は口縁の外面に擬円線がみられる甌である。複合口縁部の稜はわずかに下方に伸び、口縁はわずかに外反して立ち上がる。他の個体と比べて古い様相を持つ上器である。

10は甌の頸部～胸部である。肩部は肩がよく張り、肩部上方付近には、ハケメ原体状工具で刺突を施している。外面には細かなハケメがみられるが、刺突の原体と同一工具かも知れない。頸部は復元径13cm前後である。11は甌の底部である。底面積は小さいがまだ明瞭に平底を残している。12



第265図 柳遺跡加工段12出土遺物実測図 S=1/3 (1~14…覆土)

は小孔が貫通していることから蓋と考えられる。上端径5.5cm、接合部の径4.2cmで、つまみ部の上端はやや膨らんで丸くおさめている。13は鼓形器台の受け部である。14はコシキ形土器片であろう。外面は細かなハケメ、内面にはヘラケズリを施している。

これらの土器は、9が古い様相、10が新しい様相を持つ他はほぼ塩津4期でまとまっていると考えられる。よって加工段12の時期も塩津4期と考えて大過ないであろう。

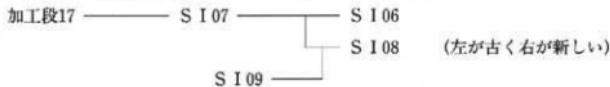
加工段13～加工段20・S106～S110の配置

東斜面北半の谷状地形の調査区北西端付近、標高約34m～38m辺りに集中して造構が検出された。特に堅穴住居跡が5棟、切り合いながら密接して検出されており、建て替えも含めて複雑な造構の重なりを呈している。この造構群はさらに上下2段に分けることができる。

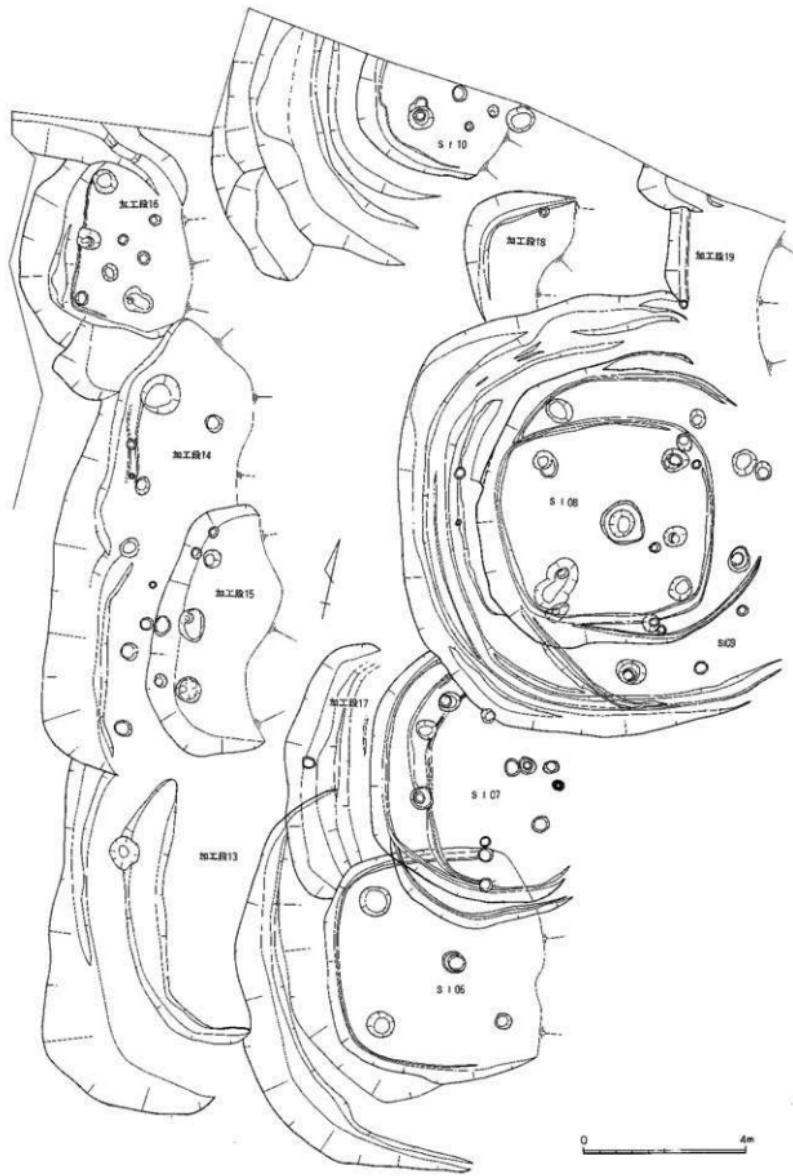
まず標高37m前後を床面として、加工段13、加工段14、加工段15、加工段16が切り合ひながら連なっている。これらのうち加工段13～加工段15は弥生時代の遺構だが、加工段16は古墳時代の遺構である。ただ加工段16も背後の加工段を切って作られており、同じ位置に弥生時代の加工段が統いていた可能性がある。加工段14も細かく見ると二つの加工段が重なっているようで、さらに加工段14の後に加工段15が形作られている。

こうした加工段群の下方、標高34m~36m付近に豎穴住居跡が密集(S I 06~S I 10)、そして豎穴住居跡に切られて、それらの間に加工段18~20が残存していた。豎穴住居跡は、南から順にS I 06、S I 07、S I 08、S I 10と呼び、S I 08に切られてその南側に床面の一部が残存する住居跡をS I 09とした。

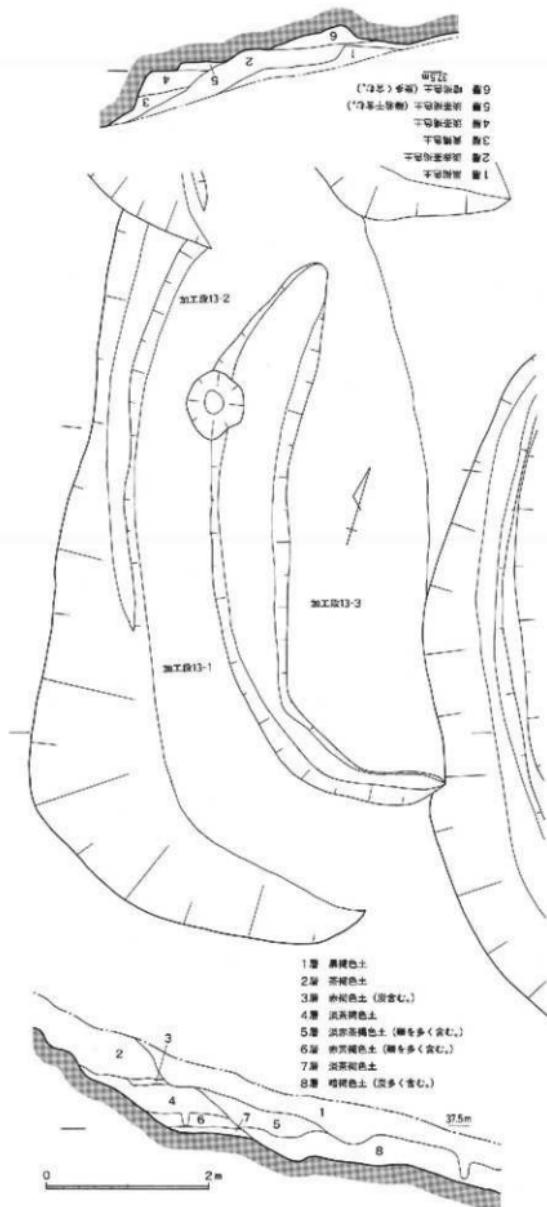
豎穴住居跡の前後関係は、切りあいから次のようになる。



上空から見た加工段13～加工段15、S106～S109



第266図 柳遺跡加工段13・加工段14・加工段15・加工段16・加工段17・加工段18・加工段19
・S106・S107・S108・S109・S110配置図 S=1/120



第267図 柳遺跡加工段13実測図 S=1/60

加工段13 (第267図)

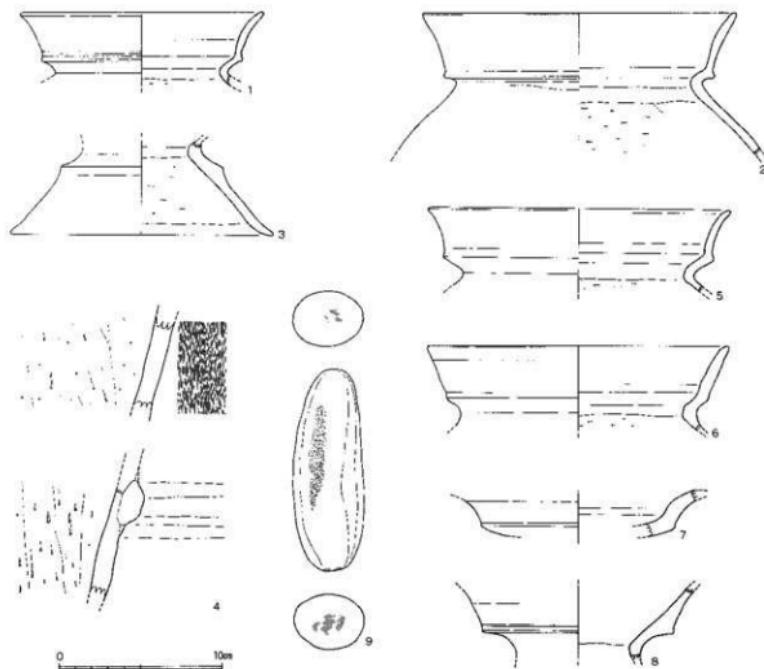
東斜面北半の谷状になつた地形の奥部、加工段12に隣接するが床面のレベルが1.5mばかり低い位置にあたる。斜面の上方側を削り込んで、その下に平坦面を作り出す加工段で、南端は壁が斜面下側へ廻り込んで終結しているが、北側は加工段14と切り合っており、長さはつかめない。

加工段13も細かく見ると少なくとも3つの造構が切り合っているのがわかる。ひとつは斜面を切り込んだ大きな壁とその下の床面、(加工段13-1)もうひとつは壁の一部に幅が狭いながらも検出されている平坦面で、土層断面で床面が下方に向かっても続いていることが確認されている(加工段13-2)。さらにもうひとつは加工段の内側で検出された溝とその内側の平坦面である(加工段13-3)。

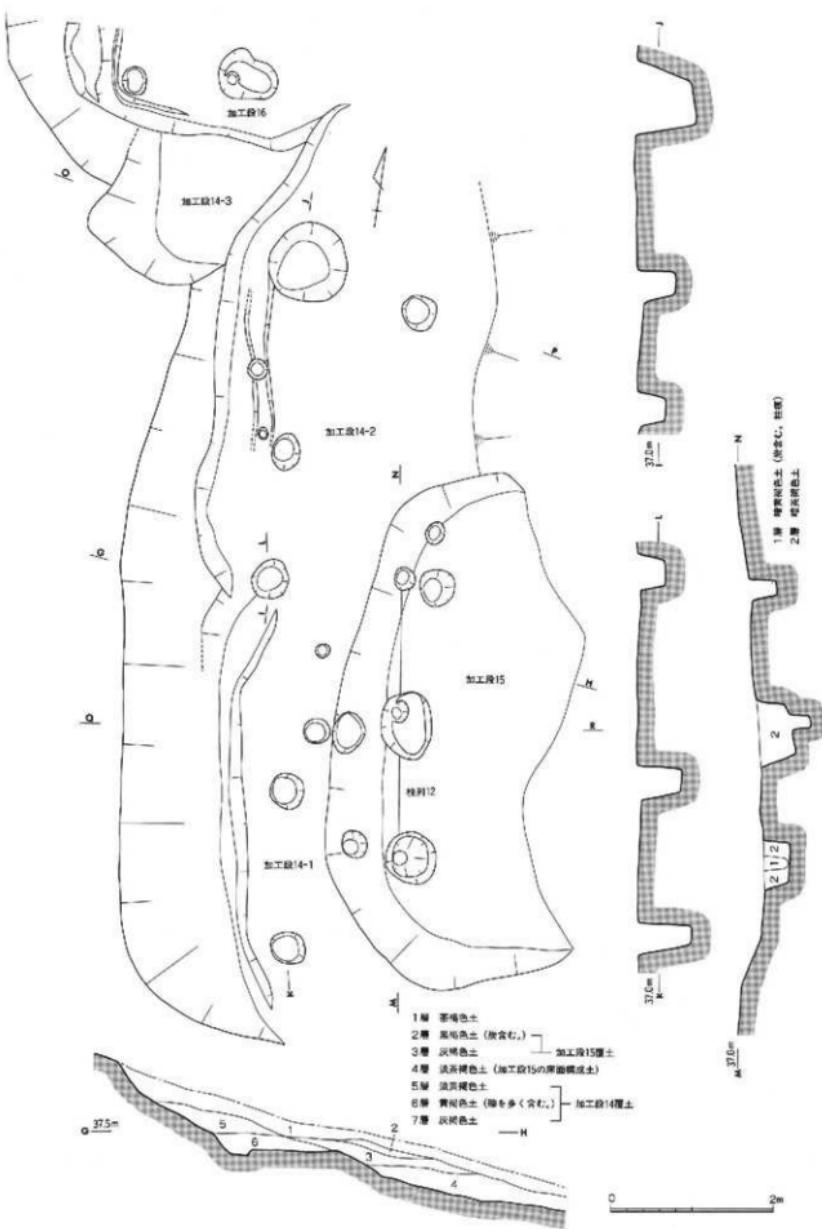
加工段13-1は、床面の現存長が7.5m程、幅も下方がS I 06と切り合っているため不明だが、残存部で3mを測る。壁の高さは0.9m、床面はほぼ水平である。加工段13-3の溝を切ってピットが検出されているが、建物を構成する対応するピットは検出されていない。

加工段13-2は、加工段13-1の壁を切って、10cmばかり高い位置に床面を設けている。加工段13-1の上に床面が続いており、13-2が新しいことがわかる。加工段13-3は、土層の堆積状況から13-1、13-2の覆土を切って形成されており、加工段13のうちで最新の造構である。覆土のうちからは平面的な検出が出来なかったが、壁際に溝が作られていることから長方形の平面形が確認できる。ただ北端は自然消滅しており、規模は不明である。溝は深さが5~10cm、幅が25cm~1mで、北側は溝幅が広くなっている。

加工段13出土遺物(第268図) 1~4は加工段13-1の床面から出土した土器である。1は復元口径15.0cm、厚さが3~4mmとなり薄手の甕である。複合口縁部の稜はわずかながら横方向に突き出し、その直上には2条ほど平行四線がみられる。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。橙褐色を呈す。2は復元口径19.2cm、口縁の厚さが4mm以下と薄手の甕である。複合口縁部の稜はやや斜め下方に伸び、口縁はわずかに外反して立ち上がって、端部は丸くおさめる。3は鼓形器台の脚台部である。復元底径16.2cm、筒径7.2cm、筒部に比して高さの低くなる個体である。4はコシキ形土器の破片であろう。外面は細かな縱方向のハケメ、内面は縱方向のヘラケズリが見られ、突帯を貼り付けている。端部付近と推測されるが、通常この種の土器の突帯と比べて幅が広く高さが低い。暗赤褐色を呈す。



第268図 柳遺跡加工段13出土遺物実測図 S=1/3 (1~4…床面、5~9…覆土)



第269図 柳遺跡加工段14・15実測図 S = 1 / 60

5～9は覆土中出土の遺物である。5は復元口径18.6cmの複合口縁甕である。口縁は外反して立ち上がり、端部は薄くなつて丸くおさめる。白っぽい淡褐色を呈す。6は復元口径18.6cm、口縁の厚さが7mmとやや厚めの複合口縁甕である。口縁部は外方に開いてまっすぐ立ち上がり、端部は細くなつて丸くおさめる。7は中途に稜を持つ皿状の器形で、高环の破片であろうか。稜の部分にはわずかに段を持ち、上方へは外反しながら立ち上がってさらにも開いていく。厚さが7～9mmとかなり厚い個体である。橙褐色を呈す。8は鼓形器台である。3と比べてやや筒部の長さが長い個体になりそうだ。9は細長い河原石の両端に、摩滅した面がみられる彫り粉本状の石器である。長さ12.4cm、幅4.4cm、厚さ3.4cmで、表面が一部黒変しており、火を受けているかも知れない。

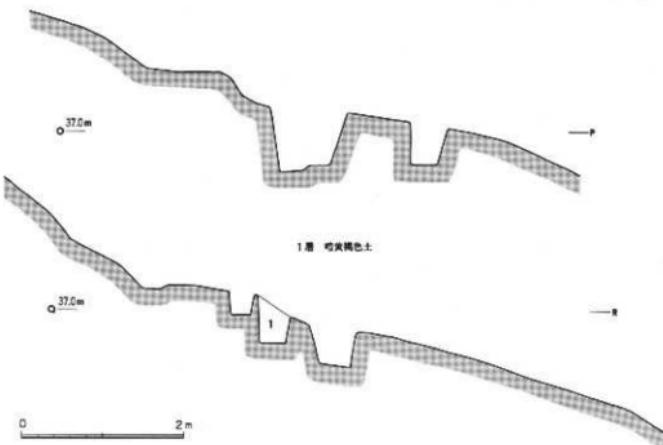
加工段13の時期であるが、床面出土の上器を見ると、口縁が外反し端部に調整がみられない1は、かなり薄手ではあるが塩津4期の特徴を持つものである。ただ2は塩津5期としても差し支えないかも知れない。遺構の時期としては4期から5期にかけてと考えたい。

加工段14（第269図）

東斜面北半の谷状になった地形の北端付近、加工段13に隣接して検出された加工段である。長さ11.8mに渡って、広い平坦面が形成されているように見えるが、壁の床面近くを細かくみると2つの加工段が重なっていることがわかる。南側を加工段14-1、北側を加工段14-2と呼ぶことにする。

加工段14-1は、北端が不明瞭ではあるが、壁際の溝のあり方から長さが5.5m程度であったと考えられる。溝は壁に密着し、幅20cm～40cm、深さ5cm前後である。加工段14-2は壁の切りあいをみると14-1を切っているようである。長さは不明瞭だが、およそ6.3m前後と考えられ、幅は下方側（東側）が流出しているが、3.2m残存している。壁際からやや離れた位置に幅20～30cmの溝が確認されたが、その全容は不明である。

床面からは多くのビットが検出された。いずれも深さ40～70cmと深くしっかりしており、建物を構成する柱穴の可能性が高い。掘立柱建物が建て替えも含めて幾らか存在することは間違いないと



第270図 柳遺跡加工段14・15断面図 S=1/60

思われるが、並んでいる柱穴はあるものの、加工段との対応や柱間が一致せず、明確に掘立柱建物を指摘しにくい。ただ加工段14-1の下方の加工段15に重なって検出された3穴の柱穴（柱列12）は、柱間が揃っており、掘立柱建物の一辺を構成する柱列の可能性が高いと判断している。

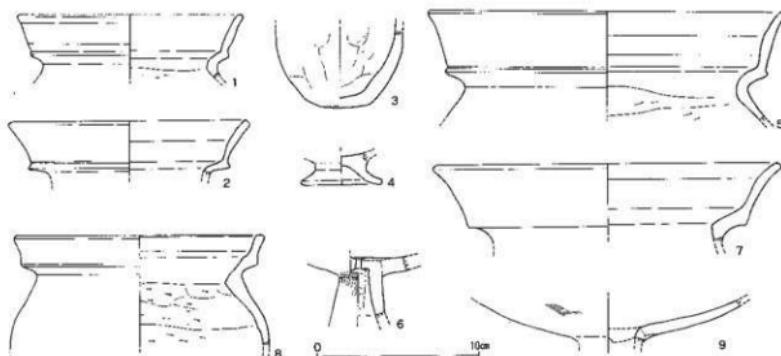
この柱列12は加工段15の壁にかかっていることから、この加工段15に伴うものではなく、方向の揃っている加工段14-1に伴う可能性が高い。柱間は柱穴の中心で測って1.7m、よって掘立柱建物だとすると桁行が3.4mの建物となる。柱穴の直径は南側の2穴が大きく60cm~75cm、北側の柱穴が30cmで、中央の柱穴は、底面からさらに深く径20cmの穴が続く。深さは検出面から30~45cmだが、加工段14-1の床面から測ると90cmもの深さとなる。南側の柱穴の断面では柱痕が観察され、その幅は約20cmである。

加工段14の北側、14-2の壁を切る形で斜面上方側（西側）に加工段がみられる。これを加工段14-3とする。この加工段は、後世の加工段16によって切られ、詳細は不明である。

加工段14出土遺物（第271図1~6） 1~4が加工段14の床面出土遺物である。1は復元口径14.0cmの小形の甕である。複合口縁部の稜は、その直上を強くなすことによって横方向へのアクセントを付けている。口縁は外方に開いてまっすぐ立ち上がり、上端には微妙に面を設ける。2は複合口縁部の稜が横方向によく発達した甕である。口縁はわずかに外反気味に立ち上がり、上端部には面を設けている。復元口径15.0cm、白っぽい淡褐色を呈す。3は手づくね風の小形の壺である。内外面ともナデによる凹凸が目立ち、底部は平底だが曲面を呈す。4は低脚環の脚台部である。底径5.0cm、接合部径3.1cm、脚部の高さ1.4cmを測る。

5、6は覆土内出土の土器である。5は復元口径23.0cmを測る中形の甕である。複合口縁部の稜は横方向に伸び、口縁はわずかに外反気味に立ち上がる。6は高环である。接合部の径が2.6cm、脚部と环部の境は明瞭に船出し、双方にハケメが施される。脚部と环部の接合はいわゆる差し込み法である。环部の底に小孔が貫通しており、脚部内面は横方向のヘラケズリが見られる。

加工段14の時期は、床面出土の甕がやや厚めではあるものの、端部に面を設けるなどの特徴があり、塩津5期と考えられる。

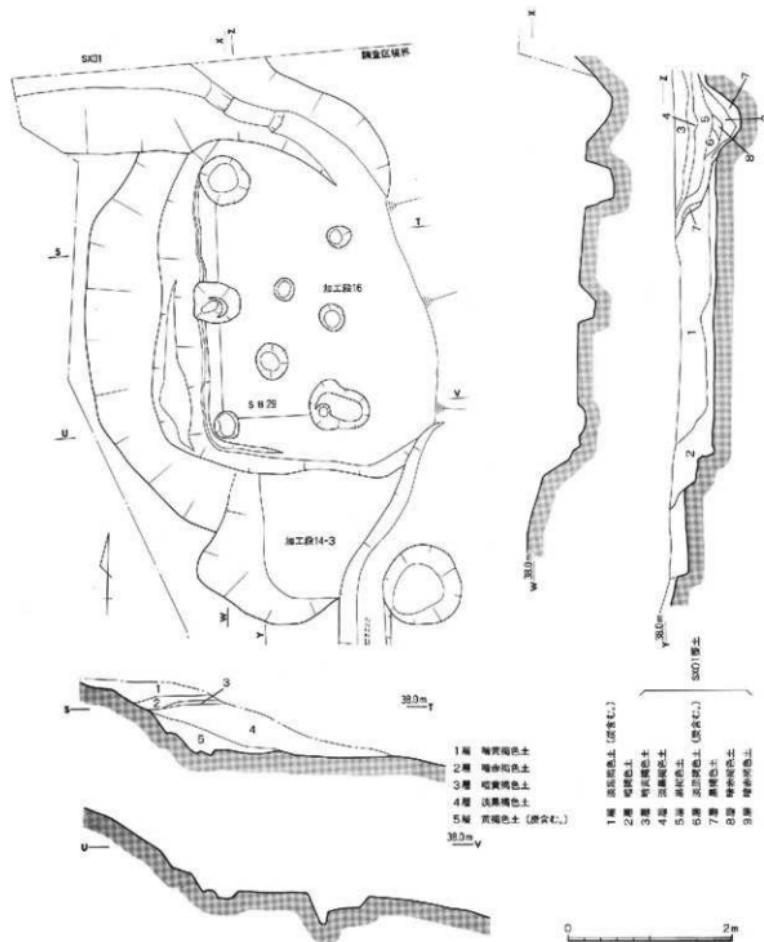


第271図 柳遺跡加工段14・加工段15出土遺物実測図 S=1/3
(1~4…加工段14床面、5、6…加工段14覆土、7~9…加工段15覆土)

加工段15（第269図）

東斜面北半の谷状になった地形の奥部、加工段14のすぐ下方で検出された加工段である。長さが5.7m、残存幅が2.3mを測る。土層の堆積状況から、加工段14-1の覆土を切って壁が形成されており、加工段15が新しいことがわかる。壁を切っていくつかの柱穴が検出されているが、前述したように加工段14に対応するものの可能性が高い。

加工段15出土遺物（第271図7～9） いずれも覆土内の出土である。7は復元口径21.6cmを測る



第272図 柳遺跡加工段16実測図 S = 1/60

中形の壺である。口縁は外方に開いて立ち上がり、中途でわずかに折れ曲がる。風化により不明瞭だが、端部には面が見られる。白っぽい淡褐色を呈す。8は復元口径15.4cm、口縁の立ち上がりが短い壺である。口縁部は外反し、端部はやや膨らんで丸くおさめる。9は高壺の壺部である。壺部が大きく開き、底に円盤が充填されるタイプである。白っぽい淡褐色を呈す。

加工段15の時期は、造構の切りあいから塩津5期以降となる。覆土出土の土器では9はほぼ対応する時期であろうが、8はやや古相を呈す。

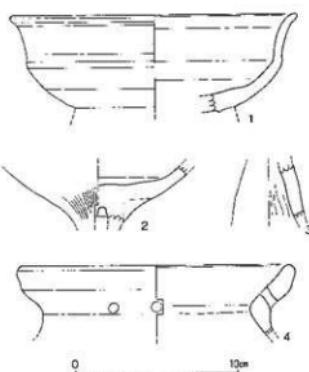
加工段16（第272図）

東斜面の北端、頂上部の北側斜面との変換点付近から検出された加工段である。加工段14の北に隣接し、加工段14-3の覆土を切って形成されている（第272図Y-Z断面）。北側は細長い階段状の造構（S X01）に切られており、造構の全容は不明であるが、北側の壁は廻り込む気配がうかがえ、検出された規模と大きな差はないかも知れない。検出時の規模は長さ3.9m、幅が2.9mである。

壁際の床面には幅10cm前後の細い溝が走っている。床面はほぼ水平で、8穴のピットが検出された。この内の4穴が直角に交わって並んでおり、掘立柱建物を構成していたと推測され、SB29と呼ぶこととする。

S B29 加工段16の床面で壁面に沿って検出された建物跡である。桁行き2間分、梁間1間分が検出されたのみだが、配置や柱間が整っており、掘立柱建物を構成すると判断した。柱間は南北方向が1.5m、東西方向が1.25mを測る。柱穴の直径は30cm～60cm、深さは10cm～35cmと一般例に比して浅い。

S X01 加工段16の北側を横切って、東斜面と北斜面を繋ぐように堀切り状に切り削った造構である。加工段16の覆土に掘り込んでおり、肩部の幅は確認できた部分だけでも2m以上、深さも90cmを測る。横断面は2段掘り状で、底面の幅は20cm～40cmと狭い。底面の縱断は、ステップ状になって西側に向かって下っており、階段状の道を思わせる。この造構の時期については、加工段16よりも新しいという以上のこととは不明である。



第273図 加工段16出土遺物実測図
S=1/3 (1~4…覆土)

加工段16出土遺物（第273図） いずれも覆土出土の遺物である。1は須恵器である。底部に幅9ミリの剥離痕があり、高壺になるかも知れない。壺部の下半は浅いボール状で、中途に棱を設け、その上は一軒外湾して立ち上がり、口縁端部に向かって開く。口縁端部は丸くおさめ、復元口径17.8cmを測る。脚部が付くとすれば、接合部付近の推定径が9.9cmと、通常の須恵器の脚部に比べてかなり径が大きい。3mm以下の白色砂粒を含み、灰白色を呈す。あまり類例を見ない形態である。2、3は土器器高壺である。ともに淡橙褐色を呈し、胎土には白色の継模様が見られる。2はボール状の壺部であろうか。底の中心には小孔が見られる。4は復元口径17.2cmを測る壺である。全体的に分厚で、口縁部の外側には複合口縁の痕跡であろうか、微かに

面を設ける。頸部には少なくとも2ヶ所、直径5.5mmほどの孔が貫通する。

加工段16出土の土器は、時期の特定が難しいが、土師器高坏の特徴からおよそ古墳時代中期～後期頃と考えられる。

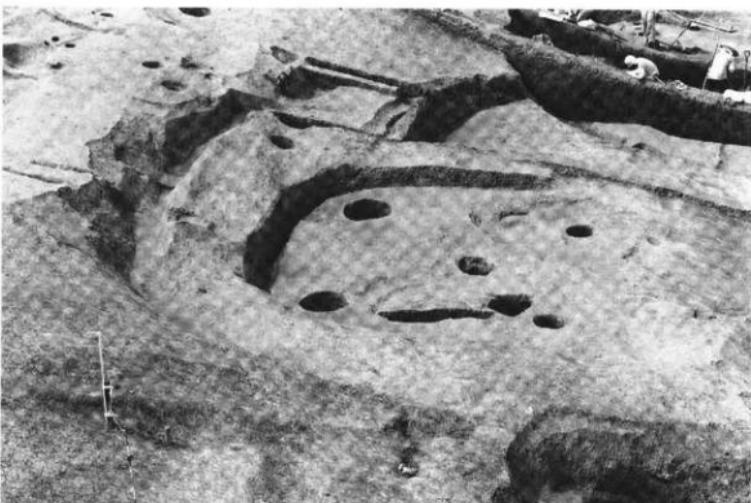
S I 06 (第274図、第275図)

位置と切り合い関係 東斜面北半の谷状になった地形の奥部、加工段13のすぐ下方で検出された竪穴住居跡で、竪穴住居跡の集中する区域の南端にあたる。南側で隣接するS I 07と重なっているが、S I 06の床面がS I 07の覆土の上に伸びていることから、S I 06が新しいことは明かである。また加工段17とも重なりが見られるが、後に述べるように加工段17がS I 07より古い造構であることから、必然的にS I 06が新しいこととなる。加工段13との前後関係は、造構や土層の関連では直接つかむことは出来なかった。

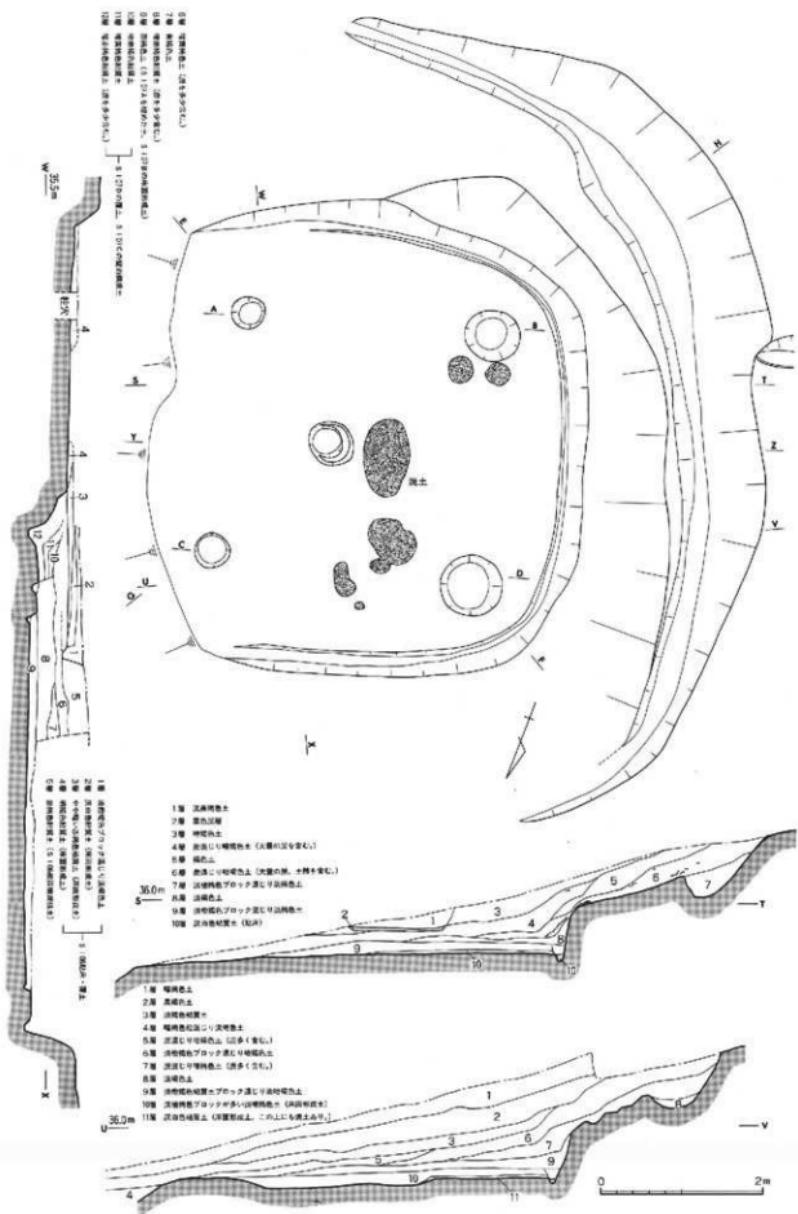
全体の構造 全体として造構の残存状態は悪い方ではないが、壁の上方や外周溝の両端付近はかなり流出しており、S I 05程は良くない。竪穴の壁の周縁には平坦面(外周平坦面)がめぐる。平坦面の幅は、斜面上方側(西側)で15cm～30cm程度しか残存していないが、壁の角度から復元すると1m程度はあったものと推測される。平坦面は両側に広がりながら伸びていくようだが、S I 05のような盛土による造成は明かではない。

外周平坦面の外側には、斜面の高い側を区切るように外周溝が弧状に廻っている。底面の幅が15～45cm、深さは上方側で60～70cm前後、外周平坦面からは10～30cmを測る。外周溝外側の残存部分の差し渡しを測ると10mとなる。

竪穴本体 S I 06は、東側の壁が流出しているが、竪穴の大部分が遺存しており、ほぼ大要を知ることが出来る。平面形は隅円方形を呈し、規模は残存する南北辺の壁体溝内側で5.25mを測る。主柱穴は4本で、壁のコーナーにほぼ対応して検出され、柱穴の中心を結ぶとほぼ一辺3mの正方形を



S I 06 (南から)



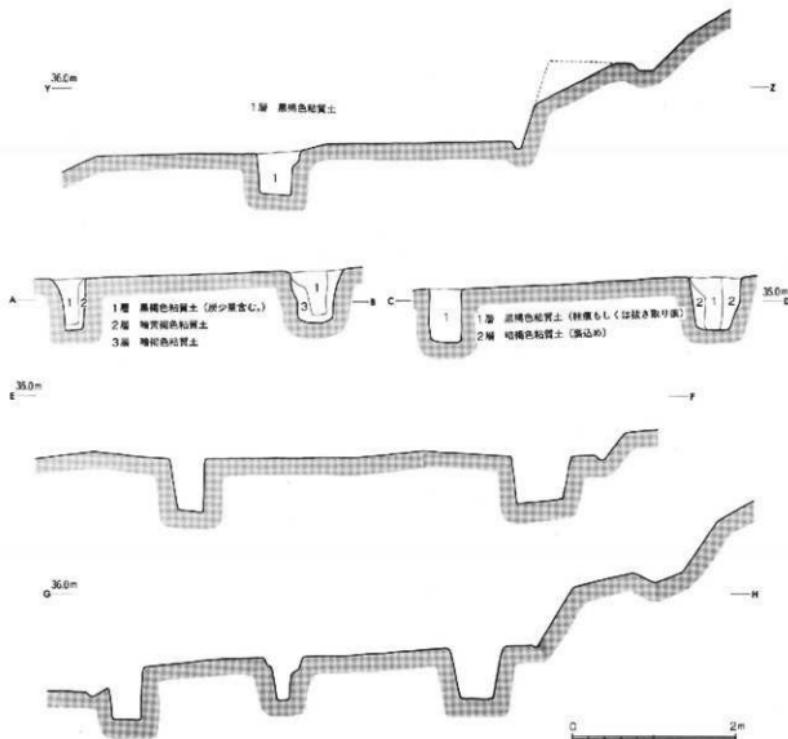
第274図 柳遺跡 S-106実測図 S = 1 / 60

呈す。柱穴に重なりは見られず、基本的に建て直しはなかったものと考えられる。柱穴の直径は40cm～80cm、深さは検出面から65cmを測るが、北西側は地山面がやや低いため、北側2穴が底面の絶対高が低い。柱穴の断面を見ると、3穴に柱底もしくは柱の抜き跡を確認でき、その幅は20cm前後である。

いわゆる中央ピットは、床面の中央からわずかに東に寄った位置で検出された。床面からの深さが50cm、床面から15cmの深さの位置にさらに狭い面が認められ、2段掘り状になっている。直径は床面で60cm、2段目で40cmを測る。

床面には貼床が認められ、特に北側が厚く貼られている。貼床面上で焼けて赤変した面が5ヶ所で認められる。壁の直下には底面の幅5～15cmの壁体溝がめぐる。壁の高さは、西側の斜面の高い側で外周平坦面の高さから復元すると、1m前後になると考えられる。

床面から25cm上方の覆土内に掘り込みが見られ、水平に炭が5cmほどの厚さで堆積しているのが土層断面(第274図S-T断面)でわかる。平面的には検出していないので詳細は不明だが、土坑が存在していたようだ。隣接するU-V断面では認められず、さほど大規模なものではない。当地域



第275図 柳遺跡 S-I 06断面図 S=1/60